

川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十七年四月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇五五号

日川協加盟

No.1055

四月号

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

盃と賽と

小島 蘭 幸

私の家の廊下の壁に、師、先輩柳友の色紙十四枚を飾っています。今回はその中の二作品を紹介します。

盃の順日本の祝いごと

不二也

増井不二也さんは、私が高校生の頃から、竹原川柳会主催の近県川柳大会に出席されておられました。昭和42年に開催した第10回近県川柳大会では、課題「ボス」の選者として出席して下さり、見事総合一位に輝かれました。

もめごとの境界線へボスの杖

不二也

不二也さんは、がっしりとした体躯と風貌でしたが、しっとりとした和服が似合いそうな方でした。

人生の賽丁と出る半と出る

勢 火

伊藤勢火さんも、選者として近県川柳大会によく出席されておられましたが、一番印象に残っている

のは、昭和52年、竹原の古刹照蓮寺で開催された、山田季賛一周忌法要・遺句集「鉄道草」発刊記念句会です。

勢火さんは、課題「新幹線」の選をされました。その時、同一句を入選句とされたのです。そして披露の前に「平抜きトップの二句について天国の季賛さんに尋ねたら、「かまわん、かまわん」と言われたので同一句でしたが戴きました」と言われたのです。新幹線開通の工事に生命をかけた季賛さんを偲ぶ会にふさわしい一齣でした。それまで謹厳実直というイメージしかなかった勢火さんでしたが、一気に親近感が湧いたのを覚えています。

新幹線の粋を世界が買いにくる 勢 火

先日、たまたまスポーツ紙を買いましたら、川柳誌ふあうすと一、〇〇〇号の軌跡——人間を詠んだ、時代を斬った——2月1日〜4月12日、神戸文学館企画展の広告が掲載されていました。なんとか出席して、ふあうすと同人だった、増井不二也さんと伊勢火さんを偲びたいと思います。

ふあうすと一、〇〇〇号記念川柳大会は、平成27年4月12日に兵庫県民会館で開催されます。

座右の句

聖夜の餐 神父の靴は常のまま

(薫風)

私の句

生きていることがベストといいきかす 辻内次根

川柳塔 四月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「興福寺の春」

■巻頭言 盃と賽と

或る日の述懐

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌⁽²⁴⁾

新川柳鑑賞⁽³⁸⁾

自選集

温故知新

水煙抄

西尾 葉句抄

英語 de Senryu⁽⁴⁰⁾

誹風柳多留 一二篇研究 22

愛染帖

檸檬抄「学校」

一路集「目立つ」

小島 蘭幸……(1)

藤村 亜成……(2)

小島 蘭幸選……(4)

木津川 計……(44)

麻生 路郎……(45)

西出 楓楽選……(49)

吉村 侑久代……(72)

吉村 侑久代……(73)

新家 完司選……(74)

新家 完司選……(76)

牧野 芳光・古久保和子共選……(80)

藤岡 りこ選……(83)

或る日の述懐

藤村 亜成

うかうか齢を重ね、気付くと今年2月で七〇歳。古稀やがな、恥ずかしいやら、情けないやら、何とも複雑な気持ちや。思えばこれまで多くの人の出会いと別れがあった。中でも僕の場合、親父が失明した事で、母と共に支えていかなあかんと、宿命ともいえる親父との関わりが否応なくあった。けど、そのことで父にまつわる素晴らしい詩人、柳人との出会いがあり、これらの人から感化と刺激を受け、僕の人生を豊かにしてくれたことは疑いようがない。

とりわけ尾道は、僕にとって生れ故郷でもあり、想い出の一杯詰まった土地や。そういえば、路郎先生と同郷なのも不思議な縁やなあ。尾道では失明した父を訪ねてくれた、備北新聞の仲田多香史、竹原の山内静水さん。シャガールと親交のある福富雷童画伯は、帝釈峡にアトリエを持ち、父を慰め励ます為暫く尾道に滞在した。父が勧め小遣いはたき買った

一路集（「助走」）

「麻生路郎読本」余滴（28）

初歩教室「真つ直ぐ」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

追悼 土橋はるお君を悼む

インスピレーション・ナビ 印象吟

■寄稿 写俳亭俳話八十年

民族の詩歌（34）

せんりゅう飛行船（52）

三月本社句会

句会燦燦

各地柳壇（佳句地十選／川上大輪・居谷真理子）

柳界展望

四月各地句会案内

■編集後記

朱夏・まつお

（120）

坂 裕之選

石田隆彦選

乗原道夫

山口光久

升成 好

（88）

川崎ひかり

土橋 螢

大西泰世

伊丹三樹彦

三好 專平

（96）

新家 完司

岩崎眞里子

（99）

（103）

（104）

（105）

（106）

（107）

（108）

（109）

（110）

（111）

（112）

（113）

（114）

（115）

（116）

（117）

（118）

（119）

（120）

座右の句

飽食の箸では何も掴めない

（楓 楽）

私の句

雑草は期待されずに強くなる

木見谷 孝代

画伯の絵は、燦燦と輝く太陽の光の輪が岩肌と海面を照らし汚れた心身が洗われるようで、今も家の玄関に飾ってる。反響を呼んだ「白黒記」も、藤井杜次を始めとする詩人達の恩恵がなかったら陽の目を見なかった。大阪へは父の柳友、大坂形水さんの会社に入り、上司の高田博泉の勧めで三井団地の抽選と一緒に申し込んだら運よく二人とも当り両親を呼び寄せることができた。博泉さんや、市議の山本三郎さんの世話により、団地の集会所で「三井ヶ丘川柳教室」として細々始めた会が今の「川柳ねやがわ」やし、会社では「オーエスケー川柳会」として選者を招き三〇年余も続いた。それもこれも、実に多くの柳縁、詩縁による方達との出会いがあり支えてもらえたからや。殆どの人が亡くなり淋しいけど、どの人も個性豊かで人間味があり、魅力に溢れていた。知識も教養も無いボンクラな僕がこんな人達と面識が持てたのも親父のおかげやなと、今に思う。

残りの人生僅かやけど、その後も続いてる柳友、詩友との交流だけは、せめて大切にしていきたいものや。古稀やからで、老いはれてたらあかんわ…。



小島蘭幸選

尼崎市 春城年代

ペンネームわたしの温いかくれ場所
背のびしてきょうを生き抜く葱坊主
多情多恨一筋縄で済まぬ過去
ようやくにあしたになった旅の朝
亡夫に聞いたことばの綾を想い出す
追いかされてもなんてことない歳になる

檀原市 安土理恵

手を放すまでは私の夫です
聞分けのいい女まつ毛にしくして
きりきりとまだしたたりのある背骨
親の手を放れて行つたばかりに
そうですかやっぱり今のままですか
満開の花が答えてくれるでしょ

米子市 吉田陽子

半分は鬱でわたしが出来ている
ユーモアはスパイスちよつとだけ利かす
七十路を見よう見まねで生きている

惚けませぬように天満宮参り
正真正銘春です猫やなぎ
戦闘機見えない空を飛んでいる

堺市 栗原道夫

猫の戻るを待ちわびている掘炬燵
街灯の照らす範囲を舞う雪よ
むかし広場にあつた見事な水たまり
自転車を叱咤激励してみても
三日月を啜えて猫が還り来る
猫の瞳の中のしあわせそうな僕

弘前市 高瀬霜石

生まれた時は空を目指していた土筆
ご先祖の生まれかわりだとも燕
欲のないひとに授かる花の種
眼鏡を拭いてじつと出番を待っている
好きだけ食べても蟻は太らない
バンジー・ジャンプ人種の違うヒトがいる

出雲市 竹 治 ちかし

勾玉の形で待つている夜明け
想い出にない母さんを恋うる老い
同窓と語れば今は右派と左派
化粧した私が見える日記帳
ふつ切れた夫婦茶碗がよく笑う
挫折さえ年輪円く包み込む

鳥取市 森 山 盛 桜

スイーツにやけに詳しい男たち
錯覚が始まる新しい鏡
ごまかした過去が大きくリバウンド
花明かり僕は不粋な存在だ
関数が解けたあの頃湧えていた
無防備の割には隙が見当たらぬ

吹田市 山 本 希久子

生きている手応えのある寒の水
座り胼胼消えたがペン胼胼は消えぬ
こだわりを捨てたら鉛筆が折れぬ
歳月の風に乾いていく記憶
八十歳という免罪符もらう
あくまでもグレーわたしの余命表

和歌山市 柏 原 夕 胡

木洩れ日を浴びてやさしさ取り戻す
猜疑心ひとりぼっちが好きになる
さよならを告げて心の水浸し

心の中をしあわせ色に染め上げる
さびしくなつてコンビニに逢いに行く
荒野から招待状の来る心

和歌山市 木 本 朱 夏

放置自転車あふれて街はモノクロに
約束は小指の爪が伸びてから
星を視る父が坐っていた場所
母の忌へはつほつひらく寒桜
ひび割れた壺にも春の花束を
変換キー押したら春が飛び出した

香芝市 大 内 朝 子

春風に希望の種が発芽する
黄な花のあの優しさは愛だろう
踏みつけにされた根っこも息吹く春
親は子に勝てぬと悟るしゃあないな
未体験ゾーンの老いへ日日進む
深刻な話はお日さまの下で

大阪市 谷 口 義

追伸のさくらかくれんぼのさくら
パーマ当てる日はパーマを当てるだけ
面白いと思えば面白いこの世
ちよつと緩くなつた靴から春になる
失敗のサンプルとして生きてます
いい加減なところが空になつてゐる

藤井寺市 太田 扶美代

此所までは一緒に生きてきた鏡

お誘いの手紙の中の春の音

ずっとずっと女でいたい葉指

独り言洩れる胸ポケットの辺り

孫が来る今日の風には羽根がある

薄味へこっそり込めている祈り

橿原市 居谷 真理子

墓石は寒い所に立っている

手袋をはずして触れてほしかった

いつの日か自分を許したとき咲ける

なで肩の男も風を受けている

ライバルはひよいと跨いださて私

穴ひとつ君のかたち空に空いている

紀の川市 辻内 次根

閉じこもりにならないように日に当たる

磯自慢わたしは歳をとりました

砂浜の砂に昔の音がする

新発想導いたのは朝の霜

立って履く靴下今日のスタートに

背伸びして長期予報の春を待つ

尼崎市 山田 耕治

王子様現れタイヤ換えてくれ

ばあちゃんも難出すときは騒がしい

お手頃な値段の少し下がよい

こちらへどうぞ先生の横の席

あんたならやれる自分に言い聞かせ

里の味今年は義姉の名で届く

鳥取市 岸本 宏章

曾祖父の名前家系図書いて知り

お金にはならぬこととして日が暮れる

七色の薬でいのち永らえる

おしどりの雄のおしゃれを見習おう

戯れか自由か風刺画を思う

ちよい悪のおやじになれぬまま老いる

豊中市 水野 黒兎

百歳の叩く太鼓の響く阿蘇(樟 水田俊子さん)

蛇口からじゃぶじゃぶ水は春の色

くもの巣のまるで神技雨上がる

万病に効いて無料のいい笑顔

地下街を抜け春風の御堂筋

いくつもの迷路を残す喜寿の道

宝塚市 田中 章子

語りたい話持ちよる震災日

全壊に家族の絆深まった

まだ背なに疼く震度七

たらればたらればとそんな日が続く

転居して川柳に出合う運の良さ

川柳に涙し励まされもした

河内長野市 山岡 富美子

見くびっていました老いという刺客

式次第みな省略をして余生

着膨れて着火不良のまま暮れる

最強の敵も味方も手鏡に

青麦が春を先取りする仏花

廃校に名残の雪が舞っている

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

寒緩むかすかにゆれた実南天

妹と歩きたいから逢いにゆく

病み上がりの小指が細くなっていた

ひかえ目な好意が慕情へと変る

これからも灯りはひとつあればいい

ルビをふらねばわたしの主張消されそう

大洲市 中居 善信

酒二合ドラマは上の空で見る

ご機嫌のいい日はおはようさんと言う

モンゴルの荒野で育つハングリ

主題歌もマッサンもいい嫁がいい

もう書けぬ文字をワープロ出してくれ

日の丸の下に集まる改憲派

和歌山市 古久保 和子

紙雛を折って殖生の宿飾る

寄り道の好きなママチャリ漕いで春

ベッドから届くメールがもう鳴らぬ

新聞の読みたくもない日が続く

一週間の予定に今日が抜けている

美術館の空気で五感リフレッシュ

大阪市 川端 一步

春闘に響き合いたい高齢者

春叙勲妻に勲章あげたいね

春ですな一年生はきれいだね

もしテロがそんな話も出るお酒

パンの耳語れば亡母の面影が

ワイツゼッカー名演説を読み返す

米子市 中原 章子

異常気象普通になつて驚かぬ

平凡と言う贅沢に気が付いた

受け入れる心が福の神招く

圭君を我が子のように応援す

側に居た羊今年はもう居ない

永遠の伴侶川柳手放さぬ

米子市 竹村 紀の治

思い出をことごと鍋も酔ってきた

歯軋りの迫力が無い保険の歯

呑みながら待つております鯛あら煮

ルームシェア貧乏神と酒呑みと

青汁のあと焼酎で嗽する

いいことがあるから米を研いでいる

西宮市 西口 いわゑ

恙なく二人で雑煮食べている
鉛筆とわたくしだけの扉押す
魔法のように心を解かす旨きもの
花の首しゃきつと活力をくれる
シチューことと孫が彼女を連れてくる
足袋を脱ぎほつと喝采聞いている

羽曳野市 藤原 大子

ライバルと勝手に決めて燃えている
待つというときめき連れて便り来る
ひと呼吸おいて言葉の角をとる
余生とや自由いっぱい今ぞ春
水仙が亡父の笑顔を連れて来た
半生に豊かさくれる子に感謝

大阪市 津村 志華子

生きるべし生きるべしとてさくら咲く
卒寿から白寿へ欲が湧いてくる
成長をした子に意見されてます
桜さくら人をほんわか包み込む
磨崖仏谷の底から拌んでる
それぞれの表情 味がある羅漢

奈良市 辻内 げんえい

成長を夢見る古希の空元氣
定位置で冬もほっこりサンルーム
下戸の僕ホットココアの風呂あがり

儲け話に乗らぬ家訓に縛られる
孫三つ日課でくれる朝の声
会うたびに新たな言葉孫二歳

東かがわ市 川崎 ひかり

適当に手抜きしながら冬ごもり
一本のペンが流れを変えてゆく
身の丈を生きて流れに身を任す
患って小さな臓器の凄さ知る
永遠を神は誰にも与えない
家計簿におむつの予算組入れる

八尾市 山根 妙子

寒い日は電話も凍り音もなし
犬の背に粉雪光る朝日受け
私の手一番便利な道具です
還暦を引いて豆まき二十二個
デパートがどんどんチョコの色になる
説明がくどいと言えず時計見る

富田林市 山野 寿之

快復の窓から春のドレミファソ
これからを二人ゆつくり夢の坂
下町の花ロケットが咲くロマン
勝ち負けにまだこだわって古稀未完
翌檜が大きく育つ褒め言葉
掛合いの夫婦で競う物忘れ

松山市 古手川 光

寒波寒波の次は花粉に攻められる
孫が来るカンフル剤を打ちに来る
人生のゴールトップは狙わない
NHKらしさが消えて行きそうだ
躓いた石が囁っている驕り

西予市 黒田茂代

雪ちらちら娘よ凍てに負けてぬか
雪ぼとり厳しい冬の去る前に
しもやけと縁の切れないまま春に
存在感膨らみかけた桜の芽
今が大事食べたいものを食べている

高知市 小川てるみ

直島のアートを巡る冬日和
意表つく快感地中美術館
胸底の真水流れる正義感
墓守る使命薄れてゆく都会
DNA百まで生きるやも知れぬ

高知県 小澤幸泉

耳鳴りの奥に私が住んでいる
熟年のいのちを燃やす二人旅
居酒屋にとおひ会話が消えてゆく
民族を二つに分けた丘に立つ
人生の地図を途中で塗り変える

唐津市 坂本蜂朗

老人のスタート台に立つ傘寿
手探りで進めば妻が付いてくる
加齢臭していないかと妻に聞く
お早ようを交わせば今日もいい予感
災難の次は福だと前祝い

唐津市 山口高明

我が家には縁が無さそう鶴
隣国の思惑なんて気にもせず
諦める前に努力を為さるませ
悪党の方がイニシアティブ取る
自己責任とれと政府のご見解

熊本県 岩切康子

起床時のふらつきこれは老化かな
病院を替えたら痒み消えました
生で食う野菜は妻の手で植える
旗はた旗道の案内有難う
寒満月神鏡めいて美しい

札幌市 小沢淳

テンションが解けて口笛吹いている
寒の底底で天下を語らんか
裏の裏読んで世間の広いこと
上げ潮に乗れば私も正社員
スランプに初心に返る入門書

札幌市 三浦 強 一

定年の以後はもっぱら腹時計

ちよつとどう待つてた飲み友のメール

焼酎のお湯割りを聞く虎落笛

晩成へくたびれた辞書友として

俺を追い越せと先輩太ッ腹

黒石市 相馬 一花

万歩計付けて脂肪を捨てに行く

煎餅と果しあいする総入れ歯

歯を忘れ酒だけ浴びる祝賀会

高齢者が息子を乗せる車椅子

年金のお蔭で今日も食える幸

弘前市 浅田 隆樹

雪かきが趣味で津軽に生きられる

降り放題今日の除雪は二時間コース

自慢するダンブに盛った雪の量

寒波来る少し太めの女いい

雪路の歩き方まで評論家

弘前市 稲見 則彦

オリオンが確と見えている梯子酒

ドタキャンは決してしない花便り

蹴いた石を探して夕暮れる

一味も二味もある春津軽

クラス会小出しに過去をついてくる

弘前市 岡本 花匠

難聴も笑福の輪に和む母

溜め息の米寿さびしい厄の内

大根おろし葛藤終えて夫婦箸

散髪でときめきの顔人生譜

遁世の森でシャキッと座禅草

弘前市 今 愁女

あとひと月とこころ宥めて朝の雪

お仏飯パンを供えて旅の朝

豪雪をメルヘンにする雪まつり

板チョコをわざわざ壊し作り変え

会心のチョコ夫を飛び越え佳き人に

弘前市 須郷 井蛙

戦前派粗末にしないパンの耳

母にしか解らぬバズル冷蔵庫

未完成スベアの命欲しくなる

割り勘で酒豪がいつも得をする

新人生先生泣かせの名が増える

弘前市 高橋 洋子

女ですお洒落は生きるエネルギー

ピンコ口は元気な人が言えること

千波万波これも生き甲斐マイペース

介護する義母からの礼重過ぎる

追伸でまた念を押すありがとう

弘前市 富士慕情

子を渡す川の深さを確かめる
侘・寂の深さに触れる薪能

蒐集の盃旅の想い酌む

ウサギ小屋建てて祝杯あげている

献杯に騒つくものは何もなし

青森県 松山芳生

もう少し風を興せるから生きる

信じれば模写も立派に光り出す

幾歲月埋没林の叫び声

歳月のほどよい風を呼ぶ石碑

ロボットの進化限りなく人になる

さいたま市 星野育子

立ち位置を変えて見たり聞いたりする

建前と本音の仕分け世間体

被災地の「風の電話」に耳澄ます

除菌ジヨキンと過剰で免疫落ち

デパート巡り最後は地下で試食

東京都 まえで とよこ

四季咲きのなでしこの冬あとすこし

橋のかなたにしろじろと照る冬の海

テロリスト爆弾の帯しかと巻き

鬼は外こころひとつに守らねば

かごめかごめ いとこたちきて手をつなぐ

調布市 伊勢田 毅

月命日ひとり淋しく墓洗う

仏花比べ亡妻よ許せと墓洗う

汚染土の行方神も迷ってる

午後三時化粧の手順見る車内

オーナーに雑魚の歯ざしり聞こえない

横浜市 小野 句多留

評論がどうにもならぬ死で終る

探しもの連結してるように出る

ポイントを溜めてちっちゃな夢気分

食べさせる相手がいてのレシピです

四対一男一人は無に等し

横浜市 菊地 政勝

熱爛の相手を探す妻の留守

眠いとき眠ると決めて自然体

赤い丸ひとり占めするテレビ欄

自画像へ描き足している笑い皺

いい星の下底分の幸に会う

富山市 島 ひかる

本に載るときは四月の花吹雪

猛吹雪眺め春の句踊り出す

大雪ヘスコップじつとしていない

立春へ鱈大根はもう飽きた

増額の御布施ジゴクを遠くする

可児市 板山 まみ子

豆まきはしなけれども恵方巻

健診の前だけ少しダイエット

健診で見つけたならご安心

北風の中にも花屋春を置き

健康で皆に感謝の誕生日

犬山市 金子 美千代

電動のペダルで脚を甘やかす

特養の内覧会のすごい列

留守電にしてもやっぱり出てしまう

息苦しくなるおぞましさを増すニュース

この分だと年末なんてすぐに来る

犬山市 関本 かつ子

吹かせてはならない進軍のラッパ

ポストだけ残し角地も店仕舞

鬼は外今年も豆は袋入り

ほっこりと日記を閉じる嬉しい日

敗け越しの力士笑顔でコマーション

京都市 清水 英旺

一皮剥けば嗚呼ヒトという生き物は

しゃしゃり出たい気持ち抑えて一歩退く

書けば誤字打てば変換ミスをする

これからも低空飛行で恙なし

青春の蹉跎癒した名曲喫茶

京都市 高島 啓子

肩書きがとれて天狗の面がずれ

いつまでも姉にリードをされてます

あこがれはシッポボトルに入れてある

大阪人に東京の住み易さ

さよならのあとは風景画になった

京都市 西村 益子

ソロバンを使い頭のリサイクル

目の前の片付けひとつ日が暮れる

暖かいスーパードつい立ち話

常連が次々欠けるクラス会

参加出来る喜びがみしめクラス会

京都市 藤井 文代

叩かないよ生きていたのか冬のハエ

京言葉ぬくいんですが吹雪いてる

譲られた席のぬくもり抱いておく

発芽せず幻だった片想い

体裁を捨てたら見えた昼の月

長岡京市 山田 葉子

ぶらぶら歩きあかんと叱る万歩計

親のコビーになりたくないとい荒れている

あれもいいこれもいいなと旅プラン

春の息吹き差し込む窓を少し明け

おみくじは吉踏み出すのなら今だ

八幡市 今井 万紗子

真似ごとを少し覚えて嫁にゆき
お散歩をするには遠い孫の家
ビーチバラソル一つや二つあった恋
砂浜に泣かせた男埋めてきた
試供品いっぱいもろて若がえる

大阪市 池上 清治

節分の鬼追う豆が足下へ
大江山鬼はいないが懐かしい
名残雪に黄色水仙凜と咲き
鬼やんま追うた蓮田が今はビル
年相応に元氣と友の賀状来る

大阪市 井丸 昌紀

STAPの証は夢のまた夢
内なる鬼宥めすかして生きてゆく
とりあえず今食べている生きている
餅好きのDNAが恨めしい
立春も冬は頑固に仁王立ち

大阪市 江島谷 勝弘

七転び八起きの倍はしています
仰ぐこと知らぬ男ですんまへん
飲み会だけ陽気になるの私です
はじめから肌の合わない人もいる
熱燗は一杯だけでしみわたる

大阪市 榎本 日の出

黒門へ中国人が流れこみ
丸暗記あくびが出たらみな忘れ
ボックリ死皆喜ぶ顔が見え
洋ダンス明けたら猫が飛び出した
大声で泣くこと今はありません

大阪市 榎本 舞夢

二ヶ月に入り健康取りもどす
元氣だと楽しい日目が付いて来る
友見舞い励まし合える幸せよ
誕生日バレンタインとサブライズ
雛人形おすまし顔で招いてる

大阪市 大川 桃花

独り住む覚悟八十路の万歩計
アンテナをリニューアルするひとり旅
貧乏性買物下手なまま老いる
豆蒔きへ鬼は袋を受けて待つ
烏なら餓え死にしそう記憶力

大阪市 奥村 五月

ぼんやりと僕にそっくり昼の月
時価の寿司答でるまで恐ろしい
大吉をひいた翌日雨嵐
命だけ伸びて貯金は減るばかり
文句だけ口一杯の紙オムツ

大阪市 笠嶋 惠美

便座カバー換えてトイレに春が来た
新コンロちゃんと火を消すかしこいの
あらいやだ食べ方下手になっている
家に居ると同じ思考ばかりして
最高の夢の一日娘と一緒

大阪市 熊代 菜月

決心を心に秘めて靴みがく
ひよこにもなれず今も卵で句を作り
乾杯の泡消えてゆく御挨拶
嫁姑割り込む隙のない二人
割り算の出来ぬ私の胸の中

大阪市 古今堂 蕉子

ついでにと持ちきれぬほど頼まれる
アルバムはいいあの日この日に囲まれる
美術展座り座って出口まで
日に何度感謝もせずに厨殿
行く行くと空手形だけ送られる

大阪市 小谷 集一

正論を吐いて自分を追いつめる
振出しへ戻って見れば別世界
仲直り妻はリングの皮を剥く
微笑んで妻のするどい変化球
ひたすらに磨く自分が光るまで

大阪市 近藤 正

静かに武器商人が火をつける
再稼動まず始末せよ核のゴミ
怠け者省エネという三分の理
夢を持つ今日から後期高齢者
金目では動かぬ党が躍り出る

大阪市 坂 裕之

生きるのに悩まない人見てみたい
税務署が恐かったのは大昔
適当に仕事があつて寝込めない
次の章へいつも妻の手借りていく
絵の中でこそ美しい銀世界

大阪市 田浦 實

生駒山の日の出拝めた運の良さ
義理の鎧脱いでゆくの老いの幸
へそくりを隠し忘れて妻に聞く
休スマホ日つくってほしい娘に願う
だんだんと見たいものしか見なくなり

大阪市 津守 なぎさ

体調をととのえ旅の予算組む
お互いに電話魔になる冬ごもり
健康に良いとおおさの鳥羽土産
立春も過ぎて芽吹きのを待つ
ラッキーな予感だ白い雲走る

大阪市 寺井弘子

猫が好き愚痴聞かされる妻よりも
好奇心まだいっぱいといふと八十路坂
湯たんぼの寝床はっこり眠りつく
ファミリーの母真中に笑いじわ
内助の功横綱までに上り詰め

大阪市 栃尾奏子

落日へ人の数だけある祈り
人は泣く自分を洗うかのように
あの時の返事花霞のあたり
さくらさくら恋なら幾度したことか
伝説が今よみがえる月あかり

大阪市 原田すみ子

大根に愛を沁ませて帰り待つ
玄関にびったり正論のあなた
二人居て大きな音は咳くしゃみ
百歳に若いと言われ元気です
モノトーン今日はハイですプラス赤

大阪市 板東倫子

何時か来る平和な朝を待つて居る
外国人が守ってくれる相撲道
この親にしてこの子ありうらやまし
ひたすらに炬燵の中で春を待つ
テロに死す人をよく見よ神佛

大阪市 平嶋美智子

ばあちゃんの皺を数えてくれたつけ
かわいかった孫もおっさん顔になり
人並に痩せたいなんて口にする
好きなもの我慢はおよし娘に言われ
古里へ不義理の陰が消えやらす

大阪市 伏見雅明

あらかじめベルト緩めるバイキング
鏡には亡父そっくりの老いた顔
黒い腹エコー検査で読み取られ
家中が妻の好みで仕切られる
由緒ある町の名前がまた消える

大阪市 升成好

肩の荷をおろし肩から老いてゆく
今欲しい視力聴力記憶力
酒の害思い当たりが多すぎる
白いロマン豪雪知らぬ人が言う
止めどなく出て来る嘘が恐ろしい

大阪市 松尾柳右子

リハビリに通った日々を忘れよう
献立に手間ひまかけて笑顔満つ
一人居の作句の楽しさをおかする
旅写真眺め思い出楽しい日
星明り見えた旅の窓ガラス

大阪市 山崎 君子

夕暮れて今日は節分豆まきを
鬼は外福は内皆賑やかに
春がきて校庭の花思い出す
ペランダの花それぞれに美しく
葉のむ美容にいいと言われても

大阪市 吉内 タカ子

テロニユース涙溢れる世が怖い
リハビリで通うカラオケ福貰う
友が待つ早く逢いたいウォーキング
意欲出る新曲デュエツト脳トレに
生きる価値ひろい世間を歩き抜く

堺市 奥 時雄

人の数戸数を割ったわが故郷
ゆるキャラのひとつで村は興るまい
農協が葬式までもする田舎
孤独にはよう耐えんから先に逝く
腰曲がり小さくなっていた上司

堺市 加島 由一

墓参り老いと病の里心
癌だよと笑って言える癌である
入院にしても女難がつきまとう
採血の度に名前を言わされる
人質のニユース納豆練り回す

堺市 柿花 和夫

修験者の顔で毎日一万歩
伸びすぎた天狗の鼻が乾涸びた
難民を置き去りにする疑似正義
コンビニの傘が微笑む俄雨
デュエツトの声が揃って立つ噂

堺市 源田 八千代

遠い国の惨事が母国にも及ぶ
ゲームから洗脳される恐ろしさ
熱いお茶供え夫の無事祈る
福豆も恵方のり巻も無い儘
生きてたら母百歳の誕生日

堺市 齋藤 さくら

朝ドラの明治時代にあこがれる
この辺で年を忘れることにする
薄味にやつと慣れたねお父さん
気が置けぬ友とコーヒー若返る
四季のある日本ならではの雪景色

堺市 澤井 敏治

拍子木にひび割れそうな凍てた月
左手の手袋だけが二つ三つ
積雪の梢に春を待つ蕾
喜寿過ぎて祈る姿に丸味でる
すみません幸せですといひ笑顔

堺市 遠山 唯教

側にいる産んだ命が頼母しい
手のひらに話題ひろがる iPad
とまどったり悩んだりして老けていく
仏像の魅力にひかれ旅にでる
母の灯が揺れて淋しい墓参り

堺市 内藤 憲彦

砂糖入り母の自慢の玉子焼き
頼み事膝を崩してから本音
激安の過密ツアーで風邪もらう
均等法だんだん伸ばす適齢期
ズボンばかり穿いてる妻の広い守備

堺市 村上 玄也

年金が先細りして枯れそうだ
背もたれの無い椅子だから落ち着かぬ
先回りして喋ったら叱られた
プライドが知ったかぶりを強いている
ミステリーの結末喋り疎まれる

堺市 矢倉 五月

神棚が待合室にある医院
どっこいといよいよで向い風受ける
パジャマならなお買いませんベアルック
御堂筋腕組む人の無い寒さ
小銭入れ空っぽにして鳥居出る

堺市 山本 半銭

身に付けて一入いとし母の衾
春兆しスツケースが目覚ます
蓬餅やんちゃな頃と同じ味
湯呑み置く間合も同じわたし達
ばらずしも鶯餅も春の色

池田市 栗田 久子

恵方巻顎が外れませんかように
大根炊き形ばかりを家でする
ほどほどで垣根は越えぬおつきあい
お互いに言葉控えている会話
失礼にならぬ程度に辞退する

和泉市 横山 捷也

完璧な人を眺めているだけだ
リハーサル弔辞はうまく行ったのに
歩一枚あつたら勝っていた勝負
ゆっくりと歩く夫婦の寒の入り
飛べるとき跳んでおかねば老いの坂

茨木市 島田 誠一

被災地の無口を一挙裂く祭り
三代目親のコピーで社を潰し
栄光の昔語らぬ笑い皺
求人票ブラック企業とは書かず
大都会喧騒にいてふと孤独

茨木市 藤井正雄

吹田市 木下敏子

こんなにも喋る無口な友の酒
言い勝ったけど友一人敵にする

義理チョコが倍加花の係長

力借る菩薩に長い立ち祈り

ビューティフル炎の宴の二月堂

大阪狭山市 矢野 梓

朝ニュース流れて心寒くなり

菜の花を買って食卓春にする

ペアを買う歳相応の春の靴

喧嘩中うっかり返事してしまい

家電器具指一本がもどかしい

交野市 森本弘風

ありがとう杖持ちだして増えた僕

チョコの山築き微笑む奴が居る

コンビニが商魂見せるレジの前

ヴァレンタイン俺には来ないチョコレート

ホワイトデー考えなくてよい歳になる

吹田市 太田 昭

ひと呼吸おいて言葉を丸くする

思い出せぬサイドラインを引いた訳

自己暗示かけて八十路を登り切る

十年日記買って卒寿を祝えるか

妻の秘密ひとつ見付けて好きになり

合唱でせめて若さを取り戻す

ストレッチ今日もストレス追い払う

雑草も春には咲いて戯れる

弱点を隠し切れない赤い靴

人生をのびのび描き余白の美

吹田市 須磨活恵

スーパ―へ独りの春を買いに行く

春を囁む筈たらの芽路ノトウ

髪切って気分も軽く街は春

駄菓子やも本屋も消えたシャッター通り

お花やへ寄って帰ってまた独り

吹田市 野下之男

銃撃は花の都に似合わない

運ですか風刺画書いてあの世行き

先生が裸にされて何になる

好きだから手加減してよ桜島

夜店でも聞いた日本語なつかしい(台湾)

河内長野市 植村喜代

ある日ふと足の自由を奪われる

タクシ―で家につくのも味気無い

少し歩きたい駅まで来たが椅子がない

日頃の感謝日本のための福袋

寿命と病氣どっちが勝つかわからない

河内長野市 大島 友子
冗談よと笑い本音も混ぜておく
此処だけの話が市中引き回し

値踏みして皿投げつける敵一人
縫いつけておきたいかしましいお口
溝を掘り溝を埋めての夫婦道

河内長野市 梶 原 弘 光
徳積んでできることなら白寿まで

さみしいなタコ焼きにタコ見当たらず
オリックスの話が出ない酒の席
食べ過ぎて散歩コースの回り道
二万越え減多に出ない万歩計

河内長野市 木見谷 孝 代

金釘の母の手紙に愛がある
手が届きそうで届かぬ夢を追う
義理チョコを届けしつかり元をとる
バラの花届けるような気は利かず
故郷のわかめが届き春を炊く

河内長野市 黒 岩 靖 博

まだ志わずに残る老いの道
うまくても腹八分目箸を置く
高齢化増えて財政四苦八苦
挑む度畏怖を感じる山の神
南海の小島が騒ぐ赤サンゴ

河内長野市 坂 上 淳 司
百句目をやつと掴んだ喜寿の暮
夢だった柳壇百句集準備

兄たちも祝いの美酒に千鳥足
表題のカット画妻のプレゼント
装丁の今日は嬉しい色合わせ

河内長野市 谷 久美子

競争心煽る女の試着室
退職の夫に譲る台所
交わらぬ子供達の夢と親のエゴ
肥満調整加減乗除のリバウンド
神を借る異国の闇に散る命

河内長野市 辻 村 ヒ ロ

雨の日は大声一人コンサート
古い二人静かな風呂は覗き合う
ちよつぱりと癖のある人好きになる
舵きって危うくなった日本丸
四十年近所仲良く高齢者

河内長野市 藤 塚 克 三

ときめきは老いてもうれし若返る
禿げてきたねそう言う妻はもう付け毛
高台の自慢の家は息が切れ
この歳で頑固偏屈両天秤
判るやろと言つて論した忘母の知恵

河内長野市 松岡 篤

私の奥歯に本音挟まって

このマスク予防用です念の為

引越したままのケースが押し入れに

高齢化僕も一役買っている

嫁いだ娘赤子抱く腕さまになり

河内長野市 水谷 正子

入所して世間の裏を垣間見る

長生きを喜び合う友居なくなり

物欲で人格変るおそろしさ

宗教は自由の筈だ攻められる

イスラムを思えば日本天国だ

河内長野市 村上 直樹

マッサンが惚れて余市にでっかい灯

神の名を借りて懲らないテロの鬼

明るさに悩みぶつ飛ぶ朋友のTEL

囲む会鬼もすつかり好々爺

老いの身も磨けば明日が光り立つ

河内長野市 山室 光弘

眠れない羊が枕をとり囲む

年の豆危なっかしい歯でかじり

イケメンにセレブはとんと縁がない

嬉しさは本命以上孫のチョコ

サクラ咲く孫の報せは志望校

岸和田市 岩佐 ダン吉

時どきはジグザグの道振り返る

飾るもの何にもなくて空を見る

監獄跡冬に耐えてる百日紅

荷を分かつ仲間がひとり居てくれる

主人公僕を不幸になどしない

岸和田市 雪本 珠子

逢うたびに膨らんでゆく恋心

断ち切れぬ恋を引きずり生きている

裏切られ打ちのめされた影法師

娘が逝って人生観が変わりだす

思い出が化石のように眠ってる

四條畷市 吉岡 修

深そうな淵だが糸をたれてみる

世論調査聞きに来たこといまだない

神様に国旗からむとややこしい

きらいじゃない言うから好きと思ってた

歳老いた猫です鈴はもうやめて

高石市 浅野 房子

一人酒はあなた私はひとり鍋

怖いニュース見ながら食事進まない

天災に人災怖い世にひとり

春よ来いみんな待っているんだよ

猫は奔放飼い主にさえ媚売らぬ

高槻市 井上 照子

福豆を二度に分けてる年の数
絵の山は吠えず叫ばず美しい
バスの席ゆずってくれた美青年
料理番組一人分だけなんて無い
順とりにまた一番で待つ医院

高槻市 指宿 千枝子

祝祭日多ある国の平和はけ
生きているを実感寒いの苦手
ミーちゃんと一緒に春を呼んでいる
蟬の子をびっくりさせた移植鏝
移植鏝たのしみに待つ豆の苗

高槻市 片山 かずお

かかってきた電話を借りて長話
お茶一杯出しても滲みでる気品
話の中にすぐに昔が出る後期
ちよつとゴメンと勝手口から顔を出す
お返事はゴメンねだけというメール

高槻市 島田 千鶴子

降りしきる雪に友住む町想う
陽の当たる場所に水仙群れたがる
若い娘に紛れてチョコを買おうふふ
頑張つて母さんここで見てるから
梅一輪春の扉を押し開ける

高槻市 初代 正彦

煙突が消えて明るいき空になり
掴もうと焦れば逃げてゆく浮き輪
軽口を叩いていたら解けた謎
世の中をしつかり照らすLED
勝ち負けに拘らないと言ったのに

高槻市 杉本 義昭

雑魚だけど胸に抱いているモラル
アドリブでリズムが踊るこれぞジャズ
百歳に楽しみ聞けば飲む仕草
指切りの手から漏れてる内緒事
ほめ殺しなのかも知れぬほめ言葉

高槻市 富田 美義

我を見る時間を呉れる日向ぼこ
モラル説く大人の腹が透けて見え
クラス会花の命は口にせず
この俺も病理素材に寄与してる
この齡じゃ怖いもんナシ医者通い

高槻市 富田 保子

子や孫に蓄財額は伏せておく
嫌なことバスし余生は好きなこと
心地よい香りだ君に酔っている
正直に真冬も鈴が鳴り続け
義理チョコを抱いて男の急ぎ足

高槻市 原 洋 志

生きることのみ下町の洗濯機
ハンカチを忘れて帰る泣きに来て
風景がまた遠ざかる月曜日
ハイテクの世に背を向けるおでん鍋
誤字脱字絵馬に残して受験生

高槻市 安 田 忠 子

室内で汗かいてるが外は雪
幻か二千円札見かけない
うさぎの切手封筒がまだ呼んでいる
物忘れどんどん進み元気です
国の借金一〇〇兆円で援助する

豊中市 池 田 純 子

あふれ出る思いを告げた風の電話
インフルよ嗚呼私はひきこもり
インフルで私タイムの五日間
平和とは床暖房の上の猫
好きだったキスチョコふたつ父の忌に

豊中市 江 見 見 清

病み上りを見事隠した派手なシャツ
口だけがどっこいしょに加勢する
窓いっぱい開けると風が軽くなる
一族の目出たい顔が集う春
一本の糸で自由になれぬ風

豊中市 藤 井 則 彦

コンビニのおでんと競う妻の味
プライドを気にして揺れている髪
どの趣味もやがては妻に追い抜かれ
チョコそつと呉れた隣のおばあさん
カルチャーのクラス替えにも胸騒ぎ

豊中市 松 尾 美智代

財布失くす厄を落した事にする
につこりと話しかけられ誰だろう
更新しない決めて寂しい免許証
したたかなりベンジが待つ向い風
みすゞの詩読んで心に灯をともし

豊中市 松 村 里 江

はじめまして曾孫の写真抱きしめる
待ち合せ改札口を出たところ
何もかもそっくりママのいらちまで
もう出番ないドレスでも吊し置く
カラオケがご縁たのしい老後です

富田林市 片 岡 智恵子

深い霧亡夫にあう辻見つからず
アンテナが錆びて世間に遠くいる
遠足の子が乗り若返る車内
セピア色の写真憎めぬ人ばかり
ほどほどのバランスが良い趣味仲間

富田林市 関

よしみ

もてなしの一言うけて動き出す

もてなしは朝餉の卓の初桜

上品な文字が私を誘い出す

ほかほかの湯で解かしたい蝶番

合格にさくら時間を開けておく

富田林市 中井アキ

明日というコントに虹を遊ばせる

尽くされて尽して愛は煮くずれる

針の穴大きくなっていた不覚

どんどんと優しくなつてゆく次男

哲学の視野で雪原謳歌する

富田林市 中村 恵

目の前に懐かしい顔たぐり寄せ

あちこちに不信の種が蒔いてある

一撃で木端微塵になる絆

重すぎてすぐ履き潰す象の靴

昨日今日笑い話にしてしまう

富田林市 肥山一文

豊かさを追い求めずにゆっくりと

弱点はここにあるよと敵に見せ

根っからのお人好しだと妻が言う

お互いにゲームのような五十年

ひたむきに生きてきたけどまだ半ば

寝屋川市 平松 かすみ

水茎のあとも恋しい師の便り

カレンダー捲ればのんびりと歩幅

ご家族の趣味が笑っている出窓

テロと拉致母のところで祈ります

町内の仕事もあつて元気です

寝屋川市 富山 ルイ子

手のひらを見せて安心お茶を出す

医は仁と心に決めてなる心医

ほっこりの優しい言葉あたたかい

人に優しい言葉かけよう努力する

神に祈る先に逝かねば決めている

羽曳野市 安芸田 泰子

痛いとかやんわり探る他人の手

妥協する度に人間弱くなる

孫嫁ぎ心の部屋が空になる

お針箱昔話がしたくなる

近道を歩いて落ちた落し穴

羽曳野市 宇都宮 ちづる

介護疲れの友を励ます女子の会

三角の底辺伸びて格差増す

娘等もあちこち痛い歳になり

失敗の夢をよくみる几帳面

海外の孫と毎日会うネット

羽曳野市 徳山 みつこ

もう春があふれて湧う雪柳
おきぬけの検温きょうも大丈夫

味のある話をもらう立ち話

ものいわぬ子も目のはしに入れ教師

残業の君へ柔らか終い風呂

羽曳野市 永田 章 司

改革は親しい仲も溝を掘る

労わりの心のこもる国言葉

自慢する相手が居らずつまらない

先人の白黒付けぬ知恵を知る

前向きの提案常に少数派

羽曳野市 三好 専 平

長生きをしますすなあと税を取り

ひっぱるとやっぱり切れるゴムの紐

ブランコに乗って宇宙へ飛んでゆく

刺青に孤独ただよう渡世人

ハルカスで通天閣を睥睨し

羽曳野市 吉村 久仁雄

風見鶏だって好みの風がある

抜け道の路地を着飾る四季の花

三十分妻を待つのに慣れている

釣柄に鮎と元気をもらう街

自尊心失せて笑顔の好々爺

東大阪市 北村 賢 子

萌黄色命みなぎってる新芽

白い息言葉交わしてあたたかい

挫折してまだ種を蒔く古稀の坂

子育ての命かがやいてた昔

青空に若いパワーを貰う老い

東大阪市 佐々木 満 作

味しめて子猫何度も寄ってくる

味加減まだまだ妻に及ばない

片意地を張らずに輪の中にとける

ネットから物は買わぬと決めている

バレンタイン商売人の仕掛け事

東大阪市 米田 水 昇

初日の出生駒山上かぐわしい

友の名が次々消えゆく電話帳

豪雪に消される命いとおしい

日が暮れて古民家暗く霊出そう

有難う心をこめてデイを去る

枚方市 海老池 洋

人間に飽きて動物園へ行く

せめてもの供養魚の目まで食う

逆走は誰もしてない羊雲

眼前のことに追われている手帳

枯れぬよう老後の夢へ水をやる

枚方市 小林わこ

古布が好き祖母の匂いの古布が好き
好きなことお金あつてもできません
炊き込みのにんじんごぼう今は好き
薄味の一工夫している食事
好きという声もう聞けずたまらない

枚方市 伊達郁夫

幸せに過ごした振りで生きている
手を取って泣ける息子になりました
若き日の証に古い英和辞書
謎解けた時に女はもういない
屋台酒軽い命を温める

枚方市 丹後屋 肇

訣別の言葉玉虫色にする
コーヒ店ハシゴしている老いの恋
校門を出る道草のランドセル
目標は合格ワンランク下げる
マネキンより可愛い巨漢力士の手

枚方市 寺川弘一

ロボットと宇宙人とは気が合いそうだ
部屋掃除ルンバの後について行く
アイラブユーは心の中で繰り返す
以下余白これで終わりじゃないけれど
消しゴムで消しても滓が残ります

枚方市 二宮紫鳳

露天風呂溶かしてくれたわだかまり
ケセラセラ笑って流して生き上手
ろう梅の香りほのかに退院日
妃殿下のオーラ流れる写真展
身繕いいいたわり合って老いの坂

枚方市 二宮山久

好きだから本音と違う事をする
酔うほどに古い話に花が咲く
ちよつと席外して女が紅を引く
段々と欲が出て来た趣味談義
夕日落つベンチ寄り添う影二つ

枚方市 藤村亜成

割れそうになり風船怒ってる
よく弾む風船つまってる元気
風船の臍からしぼんでゆく気力
わずらわしきこと詰め風船降下する
やわらかな風船なんでも聞いてやる

藤井寺市 伊藤アヤ子

豆まけば鬼は寒がり家の中
いつまでも子供は子供親は老い
三寒四温桜のつぼみふくらみて
一面の菜の花畑蜂が舞う
誤字脱字書いては消してまた書いて

藤井寺市 鈴木 いさお
アテンションブリーズ髪を染めました

飾らなくなったら人が寄って来た
二等辺三角形の夫婦です

武器のない平和は蜚気楼だった
もう背伸びしないと決めた七十二

藤井寺市 高田 美代子

冬なのにビールの空き缶が溜まり
ギャル五人食べる話で盛りあがる

付け睫少し長いと思う顔
春になったら春のスカート春の靴

体育が一番好きなランドセル

藤井寺市 津田 シルク

母さんと同じ年です南無阿弥陀

どの友もみんな達者な口になり

日の本の神も仏も穏やかだ

狭い居間にも決った席がある家族

テーブルの椅子は一つで事たりる

藤井寺市 増井 ヨシ枝

紅白の嫁入り荷物昭和の絵

金の糸はく蚕でも飼ってみよ

嬉しい日亡夫に送るラブレター

深刻の極で生きてきた命

どんな時も笑える女になりました

藤井寺市 吉田 喜代子
節分に鬼が寒波を連れて来た

本当は泣きたい私頼られて
出ないでと足を引っぱる掘りごたつ

深夜便世界の天気聞いている

師の古稀会指名を受けた亥の傘寿

藤井寺市 若松 雅枝

雪の日は蜜柑と炬燵の定位置に

押入れからたんと出て来た不用品

流行り風邪恐くて今日も閉じ込める

隣近所に空家が出来て子がいな

罪の無い子の虐待が哀れなり

松原市 森松 まつお

好奇心うすれ無口になっている

本当に妻はA型なのだから

ほんのりと酔ってる時に句ができる

守護神が休みか今日はよく転ぶ

散歩から帰ってきても暇である

守口市 井上 桂作

夢一つ生れる気持本を書き

理屈抜き聞いて楽しい川柳を

顔のない頭の中で歌を詠み

この寒さ杖つき歩くのもきびし

人間に生れたと泣く赤ん坊

箕面市 酒井紀華

姉よりの小包とき雪匂う
夜の砂浜波の音ききプロボーズ
浜辺の歌想い出せない過去すて
谷の水名前がついて村おこし
しんしんと雪のふる街青春譜

箕面市 出口セツ子

夫も子ももう手の上で踊らない
最大の幸福息子居て無敵
健康で明日の米さえあれば良い
ささやかな幸せで充電するパワー
空財布アベノミクスに厭いてくる

箕面市 広島巴子

鬼は外かみさん内でふくよかに
節分会鬼の反撃霰降る
テレビ前世界一周目が疲れ
町内の賑わい恋し春を待つ
里帰り母の粕汁ほっこりと

八尾市 内海幸生

夢で乗る免許返上してしもた
万歳が嬉喜びと知った手よ
辞書に無い新語並んだ手紙くる
ポジティブになれと貧乏神が言う
情熱の塊が来た友の声

八尾市 高杉千歩

米寿すぎ独りの自由やつと知り
床暖を切って幸せ日記書く
お若いっ大正ですと言いつ返す
日々好日長生きしていいですか
たまさかの電話元気でねだけ聴こえ

八尾市 寺川はじむ

人様の孤独をもて遊ぶスマホ
似合うと言われ頷くだけにする喪服
白い恋人名前に惚れて買わされる
親し過ぎ言うに云えないこともある
ランク落ち野菜に群れる今朝の市

八尾市 宮崎シマ子

譲られた席にほっこりした温み
春の階段すみれたんば順に咲く
だから外国へ行くなと言うてある
遅く来た幹事の汗にもう言わぬ
ありがとう嬉しい言葉二度も聞く

八尾市 村上ミツ子

得て知れないイスラム国の恐怖
殺戮の文字に心もふるえます
切羽詰まればなんとかなると呑気
気候寒いが心はもつとさむい
耳じゃなく脳が日曜しています

大阪府 桑 田 ゆきの

神戸市 白 川 淑 子

雪しんしん更に読み次ぐサスペンス
学校の銀杏大樹にエピソード
猛吹雪神の叱咤か雨戸打つ
助走の手やさしく受ける八十路坂
年の豆両手に溢れ生かされる

大阪府 野 田 栄 呼

胸奥の郷は夕やけ風ぐるま
手をつなぐ人は居ますか冬の底
電飾の街一隅の社会鍋
羊雲ゆつくりと飲むミルクテイ
手に馴染む詩集一冊午後の駅

神戸市 能 勢 利 子

身心の休養足りて春待つ身
シュンシュンと心の鬱を茶で浄化
それなりの痛む箇所あり齢だもの
笑いの輪今日もつないで三世代
底辺に行く句作にも夢がある

大阪府 初 山 隆 盛

妻の合格なかなか出ないおみそ汁
メモ通り買って来ないと払わない
自立して息子料理に振りだす
二度並び安売り玉子娘にも買う
国産にこだわ的家計また赤字

神戸市 福 原 悦 子

人形とあそんで育つ母性愛
一日は診察券であそんでる
犬小屋にでっかい窓が描いてある
寅さんの画像で締めるバスツアー
自叙伝の埋めないページ抱いて老い

大阪府 米 澤 俣 子

過ぎ去ればすべてが並で生きている
菊一輪御仏飯に詫びる留守
昭和が遠くなつて来る初暦
思ひ出を抱いて温かい冬炬燵
葱坊主特に出世の友も居ず

神戸市 松 井 文 香

生かされる今日一日のこの時間
生きて死ぬ何のヒントもないままに
時時は笑い袋を補修する
大笑い脳活性のアルファード波
煮こごりに遠い昔の母に会う

空になり千年杉に乞う教え
娘の企画金婚の宴湧く涙
ふわふわと生きて楽しみたい余生
金婚と喜寿同じ日の夫祝う
にんげんに戻す日記に書けぬ嘘

神戸市 山口 美穂

蠟梅の黄の明るさに背を押され
三寒四温天気予報のよい外れ
路の臺不穩なニュース知らぬ氣に
震災の傷抱いたまま二十年
物忘れ自嘲の外にないひとり

神戸市 山崎 武彦

兄に還る母を叱って詫びている
顔見ない主治医信じていいですか
おのろけの一つも言えぬ固い椅子
余生とはこんなものかと懐手
公園のベンチで万歩計を振る

明石市 梶谷 和郎

陽を吸った蒲団は母に似て温し
上げ底に難問詰めてさし上げる
雲間から欠伸の洩れる昼の月
こぼれ種抱いて地球は母代わり
招かざる鬱が氣楽に訪れる

芦屋市 黒田 能子

料理上手器にセンス光ってる
童うた祖母と唱った膝まくら
子の笑顔ただそれだけでいい平和
その日までつなぐその手は離さない
白黒をはっきりさせぬ処世術

芦屋市 竹山 千賀子

叶うならも一度父母と笑いたい
出不精を誘い出してる花の精
その話昨日もしたよとは言えず
鍵いらぬ暮しで今日も鋏を振る
初期化して傘寿の道を踏み出そう

尼崎市 市坪 武臣

賀状もう止めにしますと来た賀状
古稀過ぎてブライドなんか捨てました
忘れまい震災後はや二十年
駆け込み乗車座ってみれば女専車に
老夫婦平たい道をぼちぼちと

尼崎市 加川 靖鬼

忘れなや押された傘が見当らぬ
ブランデーを割った紅茶に溶かす嘘
まだ未熟シッポを出しているカバン
活字になると関西弁はややこしい
消した筈なのに火種が転移した

尼崎市 長浜 美籠

雪の花 暁風師の顔ふと浮かぶ
退屈を凌ぐちぎり絵まだ未完
愛情はんなり感じとる手編み
ワンデイバス雪見と洒落る湖西線
可も不可も無く満たされた日が暮れる

尼崎市 藤岡りこ

外は雪ショーウインドーは春の色

寒椿開いて鳥を呼んでいる

春風に乗って黄砂の長い旅

春霞はるかすの塔空に溶け

絵馬どっさり文殊さまさえ春を待つ

尼崎市 藤井宏造

鍋パーティー淋しがりやと囲んでる

ライバルへたまには見せる力瘤

微分積分僕の中ではどうに死語

三寒四温花もわたしも試される

パソコンはないがレターセットはある

加西市 金川宣子

鍛えよう一駅前のウォーキング

春の色周り気になる若作り

盃の紅拭く二十歳誓いたて

彩遊びことば遊びで友も出来

駅前に佇む母娘見て和む

川西市 山口不動

春よ来いミニのあの娘に早く来い

成人の孫の電話になぜか照れ

朝ドラを再放送で見る余生

一年を無事に過ごして自分褒め

好ましい香り残してすれちがう

篠山市 北澤稠民

晴れ間みて冬ごもりから野良仕事

移りゆく四季にときめく命あり

旬破るハウスイチゴは瑞瑞し

有難う友の純情身に染みる

雑草の花は決しておごらない

篠山市 酒井健二

駆け抜けた友のメールは紀行文

居留地の疲れをいやす甘いジャズ

遊びだけ世間の人と折り合える

励ましの嘘ならたんとついてきた

消去法あなた以外に無いと言う

篠山市 酒井真由

あいまいな位置で揺れてるやじろべえ

私とて水に流したわけでない

酔うほどに切なくなってくる美酒だ

淋しくはないか夜更けの丸ポスト

鍋きゅっと磨いて一日が終わる

三田市 石原歳子

擦れ違う時に背丈をくらべてる

独り居で自由溢れている我が家

自由だけはあるが淋しさ隠せない

待つ人の居ない私に急ぐ癖

賑やかに三回忌すみ夜ひとり

三田市 上垣 キヨミ

久し振り解った振りでまだ解けぬ

独り居の高期にも来るお正月

やわらかな言葉解かせた蟬り

国中が無事を願ったテロ無惨

長引いた風邪にヤル気を奪われる

三田市 尾崎 一子

たしなみの老いの絵筆に二重丸

初雪に確とふみ込む靴の跡

心して人のところにひびく詩

三ヶ日済んで神様ひとりじめ

福は内心の鬼も福もらう

三田市 北野 哲男

節分の鬼は根っから子供好き

バンザイで戻る合格発表日

珍らしく車内で新聞読んでいる

したたかで柔かい手は握手好き

人様のチョンボ肴に弾む酒

三田市 久保田 千代

ワンタッチの暮しの中にいる寒さ

傷心の隙間を抜ける風の音

寒明けてなお堪えること赦すこと

切り取り線片だけに引いてある

子が来るとすこし仲良くなる夫婦

三田市 福田 好文

どか雪が罪ない竹を土下座さす

お年玉しばらく値上げ無いまんま

無職でも何故か嬉しい日曜日

黒い腹気付かぬ振りの内視鏡

ガラス戸に写る猫背を叱られる

三田市 堀 正和

またひとつ歳とりましたありがと

金婚かずいぶん我慢したもんだ

辛口のコメントきつとエールだろ

ドタキャンをしてからやつて来ぬ誘い

風呂上り迷いなどない顔となり

西宮市 秋 元 てる

見ぬ振りで九十五歳を放し飼ひ

ひ孫とも手加減なしの七並べ

隙間風塞いで呉れる古仏壇

キッチリと五分遅れて来る幹部

満艦飾の中で寝ている淋しがり

西宮市 足 立 茂

細やかな情けが邪魔をする出世

ベンチ裏で素振りばかりの指名打者

細い目に凄みをきかすサンガラス

家の鍵落として夜の溝掃除

目薬が上手く注せない手の震え

西宮市 梅澤盛夫

ガンバロね声かけ合つて20年
平均を超えたぐらいが丁度よい
アベノミクス平らどころか凸凹だ
女房は一部始終を知っていた
ブレッシャーかけていたのは僕自身

西宮市 緒方美津子

通学路にあつてはならぬ手向け花
越えてきた山の高さをいわぬ母
日日感謝父ていねいに歛洗う
棟梁の耳の鉛筆口を出す
悪友のくせ字の賀状見飽きない

西宮市 片山忠

ただ二人ゆらぎの中にいる老後
本日の運勢少し気が重い
新型となれば風邪でも手ごわいぞ
アドリブで賢い人と思わせる
ポリュームを上げてとなりの音を消す

西宮市 亀岡哲子

地下街で酔うてマグマが揺れている
国境を越えて種飛ぶ花も咲く
願うたら限らないから南無阿弥陀
白寿祝いを練っております三姉妹
オブラートの中でもやもやする苦言

西宮市 福島弘子

水張るメダカに元気もらう朝
義理チョコでもサークルの座が和んでる
子に越されうれしくもありとまどいも
通学の往復五キロ今も効く
口笛の助走で行こう花の道

西宮市 山本義子

独り渡る橋の長さよ骨密度
吊り橋の真ん中へんに善と悪
峠みち風と指切りして下りる
ハンカチは綿百パーと決めてます
朝一番背なまっすぐと魔法かけ

西脇市 七反田順子

玉子やきママの手作り最高だ
ロボットに掃除まかせてお買物
役に立つ宝くじ号一分寄付
和の文化トイレピカピカ世界一
青い空双眼鏡と闊歩する

姫路市 古川奮水

あびす会酒はやかんでするめ裂く
髪切つて向いのオバちゃん若くなり
サラメシはスキ定食がお気に入り
コップ酒偶に盃気分変え
浅草に観音さまと蛇骨の湯

奈良市 阿部 紀子

高津の富なま落語聞き初笑い

門出祝貯金通帳プレゼント

おしゃべりのおもろさ超える句は出来ぬ

病の父花より煙草持つて来て

フレンチのラストデザート桜餅

奈良市 岩本 浩二

跳ぶ力試しているか水たまり

脳トレでボケと老化をブツ飛ばす

巢立つ孫の背万感こめてポンと押す

円満の秘訣といつも耐えている

知恵の輪にはまりストレス増すばかり

奈良市 大久保 眞澄

お育ちかななぜかほっこりするテンポ

夫には弱いところも見せておく

病んで知るほは完璧な主夫がいた

足を知る猫の寝姿から学ぶ

病院が墓地を見下ろす場所にある

奈良市 加門 萌子

さくら好き日本大好きわたしです

他人事と思っていたのは骨粗鬆

若い日のお転婆何処へ行ったやら

年初から厭な事件がうとましい

眠れない人に今年の羊たち

奈良市 天正 千梢

これはこれあっちの方へ置いておく

昨夜見た夢川柳にまとめる気

お金では買えない物を模索中

日光浴しながら川柳考える

低温火傷するとカイロを外される

奈良市 米田 恭昌

蹴鞠する大宮人にスカウトの目

還付金少しほっこりする財布

お互いに競う気も萎え酌み交わす

今だからこそ言いますと恐い妻

復帰するを復活すると頼もしい

生駒市 飛永 ふりこ

柔らかいピンクの似合うお人柄

息遣いふうつと本音もれてくる

誇示したらあなたの値打下降する

まかせときだけあとから出る文句

タバスコを多めにはくしょんの効き目

大和郡山市 坊農 柳弘

その先の修羅は語らぬいぶし銀

輝きが失せないうちに身を処する

チャンスには滅法強い友に賭け

聴診器恋のいろはを聞き分ける

身の程を悟る夜明けの青いバラ

奈良県 安福和夫

孫試乗もみじの横に若葉貼る
マイカーの助手席にいて落ち着かず
バスツアープロが運転コックリと
久々に見る日本海波高し
戦果より犠牲になった民想う

奈良県 中原比呂志

制服へ四月の訓示は堅いもの
炎の粉受けに襟立て二月堂
消しゴムが痩せるまともらぬ思い
耳学問深夜放送イヤホーン
大卒に負けぬ智恵持つ内ポツケ

奈良県 渡辺富子

入院のスケッチ春が溢れ出る
退院の夫と春陽踏む散歩
思い出を煮込むおでんの上機嫌
憎しみの連鎖を寒く聞いている
物忘れ増えて身軽になつていく

和歌山市 岩本美智子

笑み浮かべ心の鬼に豆をまく
老いの僻心配させて拗ねている
書いた文字見えず推敲かなわない
ストレスの中にもぐって眠りこむ
逆境に生かされ生きて愛を知る

和歌山市 上田紀子

充電を急ごう春はもう近い
生き方を試されている骨密度
アングルを変えて人生謳歌する
念ずればいつしか消えていた迷い
引く事を覚えて温い風当たり

和歌山市 喜田准一

切なさをほころび縫える人がよい
享年が身近過ぎます死亡欄
号泣をしてる孫なら許します
八十路坂命の余白活かし切る
改革へ維新見習え金バッジ

和歌山市 楠見章子

焼き芋の匂い体が笑い出す
温かい言葉集めるイヤリング
書いて消す愛という字がこそばゆい
テレビとコタツわたしとトリオ組んでます
ほり炬燵ルンバサンバは夢の中

和歌山市 坂部紀久子

カレンダー一枚繰ればそこに春
やがて来る地震頭の隅においておく
棒読みにされて心が届かない
喋る間のない会話の中に浸ってる
不意の客今日に限ってスッピンだ

和歌山市 武本 碧

前向きに走ればいつも裾を踏む
マイペースで探すわたしに合う器
革命をするには古い脳のしわ
針穴を覗き悟った振りをする
舞い終えて緩い時間の中にいる

和歌山市 玉置 当代

白状をしました妻に負けました
早春の庭に哀しい落ち椿
気まずさに傘傾けた鉢合わせ
為せば成る道一筋に賭けている
思いつきり羽ばたけと切る赤い糸

和歌山市 土屋 起世子

一すじの泪の跡にあるドラマ
隠したい話は聞かぬ友がいる
良縁とあなたが逝ってから気付く
家族の溝いつも繕う母の針
企画するイベント祖母は外野席

和歌山市 福井 菜摘

誉め上手叱り上手がいて平和
良い方にとってみんなに愛される
早や傘寿悲喜こもごもが皺になる
堪えぬいた母の笑顔が道しるべ
ありがとう丸い心で今日を綴じ

和歌山市 福本 英子

多数決だから私も手を挙げる
姥桜ばかり元気なデイケアー
視野いっぱい広げて見ても四畳半
運転の妻へ遠慮の酒の量
もう少し自惚れ持っていた記帳

和歌山市 堀 富美子

苦勞など帖消しにした今の幸
呆け装うつもりが呆けていた迂闊
すんなりとブランド買って満ちている
自分にも聞かせるように子を諭す
残り火を私のために金使う

和歌山市 松尾 和香

幼な児も大人の動き良く見てる
バイバイと手を振る仕草泣く手前
全没も一位も入りおもしろい
静かな日孫の留学胸踊る
手を振って笑顔の背中風荒ぶ

和歌山市 松原 寿子

勝ち進むチャンスへ運が舞い降りる
昨日をたたみ今日の視点へ置く未来
頑張ろう形見の帯でひき締める
生きる糧女コツコツ趣味を織る
どう出るか明日の風を推理する

岩出市 藤原 ほのか

ごった煮の中で持ち味發揮する
ごった煮の中で旨みを光らせる
ゆるキャラで故郷再生狙ってる
車間距離保ちゆつくり歩み寄る
チャンスだと思つて今を描き出す

海南市 小谷 小雪

井の中の蛙を笑う壺の底
踏み外し少しとほけた顔もする
きちんと解くこんがらがったチャンス
北窓へわたしの花を挿しておく
横顔もすつきり笑う誕生日

海南市 堂上 泰女

娘より優しい婿に恵まれる
無事に夫婦してくれた子らの汗
春よ来いまっさらな靴叫んでる
大病に耐えた人から降る情け
寒月を仰ぎ涙を堪えてる

紀の川市 宇野 幹子

一徹を少し崩してゆく草書
定休日とれぬ地球も心臓も
六Bを捻り川柳しほり出す
プライドも影も妥協はしていない
一輪になつても女たくましい

紀の川市 北山 絹子

プライドを捨てた男の荷が軽い
細長く生きる私の設計図
手加減をされて女が強くなる
引き受けた話だんだん怖くなる
白昼夢宇宙に建てたマイホーム

田辺市 岡本 昇

人生の終い仕度はあるがまま
雨の日は自家のカラオケフル稼働
当選のガッツポーズにある打算
ミステリー僕の心の万華鏡
バタフライ抜き手に勝ったこともある

橋本市 石田 隆彦

神の名で飾る卑劣な自爆テロ
空仰ぐ少年の手に機関銃
見返りを讀んで総理の援助金
団塊でどこも賑わう散歩道
人気復活やぐら太鼓の弾む音

鳥取市 有沢 せつ子

健康で兄弟五人古稀越える
小走りで来る朝刊へありがとう
記憶力クロスワードでテストする
川柳のおかげ辞書引くくせが付き
公園の朝はシニアのゴルフ場

鳥取市 池澤大鯨

気短かで出遅れほどが丁度いい
しばらくはスタートダッシュユベース守る
形だけ市民マラソンダッシュする
都合により忘れたふりで息をつぐ
ほろ酔いで常備薬など飲み忘れ

鳥取市 加藤茶人

ラッキーな星座心も身も踊る
泥試合避けるに嫁の側に付き
往生はまだかも知れぬ夢枕
腑抜けでも良い好戦派にはなれぬ
怒る事もう忘れてる倦怠期

鳥取市 岸本孝子

カラフルな和菓子抹茶で初句会
お雛さまようこそ今年また逢えて
ご利益があると信じて墓掃除
仏壇のお供物は欠かさない
病気せぬだけで家族の役に立つ

鳥取市 倉益一瑤

大往生神から母へご褒美か
母逝ってもうアメ玉の出ぬボツケ
わたくしの脆さを曝け出す仏間
達筆な賀状挑戦状らしい
エゴいっぱい詰めたわたしの知恵袋

鳥取市 鈴木一弘

消費者を誘う口上宇宙規模
冬枯れの紅葉の枝に真珠玉
忘却は新鮮を呼ぶ大掃除
惚けでない忘れることを咎められ
一生に一度演じたプロポーズ

鳥取市 竹口清信

弱虫のくせに意地だけ張りたがる
まだ傘寿これから先が楽しみだ
につこりと笑う家庭だ福は来る
良い風に乗って生きると面白い
肩で風切って生きてた頃がいい

鳥取市 中村金祥

入院の前に宿題片付ける
覚悟した手術だけれど隠れたい
可能性あつて闇夜を這っている
一汁一菜ごちそうだった焼野原
いとおしい傷口舐めてくれるポチ

鳥取市 永原昌鼓

いとおしい負け越し土俵去る力士
商才がなくて儲けも損もない
DNA大金持ちになれぬ相
平凡に暮れたと仏間灯をとめす
強面を笑顔にさせる蟹の足

鳥取市 夏目 一 粹

動物は人を見る目を持っている
受験生みんな笑顔で春よ来い
老いたれば無駄な力を貯めておく
嫌われる勇気があれば子は育つ
結び目に鉄の入る時もある

鳥取市 西川 和子

ゆったりと構えていても句は出ない
横着をする気は無いが身が重い
あれやこれゆったり出来ぬ定休日
貧乏性じつとしてるところばゆい
夢でまで時計が尻を叩き出す

鳥取市 春木 圭一郎

隣より自分の芝生青くする
迷わずに没頭すれば知恵もわく
いいときもピンチも長く続かない
やっつてゐるか今の自分にできること
経験は才能知識越えてゆく

鳥取市 福西 茶子

何時からか私見下ろす子も孫も
同郷の訛が消えて打ち解けぬ
何時からか私が三步前歩く
メダカにもガキ大将と優しい子
何度も何度も食い縛った菌が宝

鳥取市 前田 楓花

決心すると女は前を向く
決心の両手は空へ伸びてゆく
たった一人では勝ち目のない正義
戦闘の国に正義は通じない
愛犬が握る我が家の空気感

鳥取市 吉田 孔美子

初詣で夢三十枚を買った
雪霰戯れる中露のとう
カラフルなバジヤマ落ち着かない枕
二十二歳恋を形にしたかった
正義感知らない父にそっくりと

鳥取市 吉田 弘子

忘れたい過去刻んでる手の平だ
儉約もほどほど余生楽しもう
いつまでの幸せだろう皆元氣
風邪に寝て病氣もいいな家族愛
天気図に合わせ献立組み直す

鳥取市 両川 無限

辞表書き終えてひとまずお茶にする
改札を抜けて働き蜂の朝
大根を抜いて地球の裏覗く
後方支援やがては銃を持たされる
包んだら嘘がこんなに重くなる

倉吉市 猪 川 由美子

自分好きで他人を上手く愛せない
人質の首は総理が左右する
マスコミが挙って取材佳子さまだ
値上げ続き背丈が老いてまた縮む
墓友を探す終活懸命だ

倉吉市 牧 野 芳 光

人間はそんなものかとカラス啼く
野良猫と同じ温度になってくる
悲しいがオバさん声になっている
渡り鳥の涙が雨になってくる
お日様がたまに出るから油断する

倉吉市 山 中 康 子

さまざまな時代を越えた今である
数値みて医師はわたしの鬼退治
鈍くても感情線はまだ豊か
折れそうな心柳誌がつなぎとめ
追われてた時間あり余る時間に

米子市 後 藤 宏 之

人並みに飲む打つかうはやって来た
羽ばたいたはずが毎日里がえり
きれいですそう言っとけばいいのです
本当のすみませんではない言葉
小正月餅がなかなかなくならぬ

米子市 後 藤 美恵子

誇らしくLEDで春祝う
少子化に雪だるま見てホツとする
省エネで一日過ごし余熱あり
休耕地発電パネル植えられる
寒寒と虚飾に満ちた話聞く

米子市 成 田 雨 奇

新年に鳩のはばたき聞こえない
群の中もぐり込もうか抜け出すか
女子の名が記憶の底で目を覚ます
祝福に哀悼に鈴一つある
結論を出さぬおしゃべり女子は好き

鳥取県 石 谷 美恵子

耳の遠い人にも笑顔なら届く
山盛りの愛で看とった悔いはない
タンスに眠る和服ほんとにいとoshii
熱い冷たい何でもぬるいのは嫌い
明日があるきつとあしたも言うだろう

鳥取県 岩 崎 和 子

句の世界止められないよペン動く
齢忘れ二人共々生きている
お休みのベッドの会話猫が聞く
やわらかな光だ春がすぐ其処に
可愛いね猫は尾っぱで返事する

鳥取県 斉尾くにこ

鳥取県 松川行男

休息と再生のため冬はある
そのままにあなたのままに価値がある

相槌のバリエーションに乗っていく

優しさをもらい優しさ思いだす

おひさまと冬の窓辺でお話中

鳥取県 竹信照彦

ウォーキングついでに畑ひとまわり

剪定はどの木も手前勝手流

山道も歩くものキノコ見つけた

孫のため豆まきをする鬼になる

立春の尻尾に寒波ついて来た

鳥取県 西谷悦子

満たされた振りしています屋根の下

高齢者の車ダンブがピタリ付く

年老いて忘れることを許し合う

花で言えばもうドライにはなるところか

足跡は消えても記憶忘れさせぬ

鳥取県 細田裕花

玄関の花活け替えて春招く

ポストイン田舎の匂いする手紙

サーブ打つ自分を信じきって打つ

BGMはナツメロほっとティータイム

パフォーマンスでも握手する手は温い

閉校に一期生です肩よろけ

校長は蛍の光聞かず去り

爺婆の歩みを語る春時雨

ベストセラー読まない春の専門書

春霞今消えないで二人です

鳥取県 山下節子

九条を軸足にして国守る

民の声投票率じゃ計れない

もの言えぬベットの仕草いとおしい

柿終えて大根吊す軒の下

せつかくの芽生えを親がじやまをする

松江市 小川注湖

麻酔覚めキョロキョロわが手爪立てる

看護師さんよい人ばかり不思議群れ

明日に夢りハビリ室を出る笑顔

吟醸酒退院を待つ冷蔵庫

涙腺がゆるんで医師の背を送る

松江市 藤井寿代

マッサンのテーマソングで動き出す

山陰を跨ぐシベリア寒気団

芋焼酎に嵌まってつづくキムチ鍋

エンドレス悪の連鎖に止まぬ雨

パンザイで見送る大切な人を

松江市 松本文子

英語ペラペラ偉い人だと思う
気楽に生きたい青空にメール打つ
阪神地震おめでとう会の後だった
乱筆のいいとこ読まれたりしない
独り者と分かる姿で帰途に着く

松江市 松本知恵子

山陰の冬空青は隠れんぼ
猫のヒゲ動かぬ雪の日を籠る
健やかにあれ灸が動くときとさん
デイの楽しみ九十の母が言う
いつまでも青いハートは持つてるよ

松江市 三島 崧 丘

寂しくはないか一輪挿しのバラ
丸腰のわたしを攻める人の口
胸底で白魔が雪崩繰り返す
木々芽吹く私の殻はまだ脱げぬ
軌道から外れ思いのまま生きる

出雲市 伊藤 玲子

献眼の奉仕でこの世締め括る
時計めがねあなたのロマン捨てられぬ
よれよれのネクタイあの日呼び戻す
思い出の花を咲かせて生きていく
笑ってるのに何故か泪のジンと湧く

出雲市 岸 桂子

少年の助走路にあるマンガ本
煩惱はお寺に捨てて来たつもり
パン屑を孫に持たせて鳩と居る
手の平の冬がゆっくり動きただす
計算が狂い思案の爪を噛む

出雲市 小白金 房子

赤い屋根友待つ春の喫茶店
帶少し緩めて春の風を抱く
五つ玉弾きわたくしの脳みがく
パイパスが地形を替えた文化の灯
四十九日明けて渚の波に立つ

出雲市 多久和 敬子

価値観の違う笑いで響かない
結婚の指輪なくても五十年
母と娘のレシビ交換Eメール
大賞の知らせに頭真っ白に
コーヒーとお茶で会話が弾まない

島根県 伊藤 寿美

帰りなんいざ山は笑って出迎える
釣鐘も戦に征った昭和の絵
温度差が埋まらぬままの結露拭く
気配りはベールで包み気付かせぬ
天皇語録光と影が浮く昭和

広島市 岸 本 清

マッサンの広島弁が心地よい
家族して縁起をかつぐ入試前
世が荒み監視カメラの中で生き
ハッカーよその才能を世に生かせ
安全と言うが何故だか領けぬ

竹原市 石 原 淑 子

日本中希望の彩よさくらいろ
原発の審査合格とやいかに
七歳の心の温くなる話
春霞先行き見えぬ待ち合せ
道徳の時間私も座りたし

竹原市 岩 本 笑 子

誕生日回る寿司でもいいのにな
雪割って露のとうという緑
エプロンの下で携帯鳴る朝だ
ランドセル雪が降ってる声となり
消しゴムを転がしている締め切り日

宇部市 平 田 実 男

聴診器より正確な酒の味
肥後守昔文具で今凶器
火傷した恋若かった若かった
素顔でも結構いけたのはむ・か・し
七十年前を肴にクラス会

(前月分) 府中市 藤 岡 ヒデコ

毎日が模索変えられない食事
心配はしても手出しは止めとこう
腰痛に合わせて動く万歩計
玄関に踏み台を置き二重丸
悔しいが今日の歩幅を良しとする

(前月分) 高知市 小 澤 幸 泉

もっと教えてほしかったひとすじの道(K師追悼)
故里に明日の鐘が鳴り響く
腰痛がまた暴れ出す冬の朝
中東のいのちをさがす泥の水
寒梅が今年はさいて娘が戻る

水煙砂

(つづき)

三田市 木 村 マユミ

買物はカートひかずに手かごもつ
寒椿新雪かぶりうす化粧
さざ波に鴨の夫婦の仲の良さ
旅すがら心の重荷おいてゆく

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

木津川 計

ハハハハと笑い二月になりました

谷 口 義

坪内稔典さんの人口に膾炙した句「三月の甘納豆のうふふふ」であるが、一月から十二月まで稔典さんは甘納豆を実は詠んでいた。

「二月の甘納豆はやせてます」「二月には甘納豆と坂下る」「四月には死んだまねする甘納豆」：「十二月どうするどうする甘納豆」結果、三月の句が一番評判がよかったのだ。

で冒頭の句に応用しようとしたのだが、如何せん、甘納豆になぞらえる主格がない。「ハハハハと笑い四月になりました」うーん。

中立という穏やかな卑怯者

福 西 茶 子

右にも左にもつかず様子を見、形勢を探る。すなわち日和見である。今号、左右田泰雄さんもそれをこう詠んでいる。「無理をせずそつと流れに身を任かす」。つまりは二股青葉である。洞ヶ峠を決め込むのである。

本能寺の変の後、明智光秀と羽柴秀吉の軍勢が山崎で合戦、双方から加勢を頼まれた大和の筒井順慶が洞ヶ峠へ兵を進めて分のある方を探り、結局中立を選んだ「穏やかな卑怯者」である。茶子さんは旗幟を鮮明にせよと。

恐るおそる再婚したと年賀状

池 上 清 治

94年に最初の夫を亡くした寛千佐子（68）はその後10人の高齢男性と結婚、交際、死別を繰り返して、青酸カリで2人を殺害、起訴された。今日の新聞で他にも6人を殺したと供述。恐るべき毒婦の再婚戦術である。

だから清治さんの知人は「恐るおそる再婚した」のであろう。今月、坊農柳弘さんも詠む。「知り過ぎた恋はじつくり吟味する」と。左様、ご同輩に申し上げる。「じつくり吟味」すべし。人間の面を付けた鬼女がいますぞ。

待ちかねた手紙にNOと書いてある

伊 藤 寿 美

OKの返事待ち続けたのにNOだった落胆は大きい。モテ男の平中が藤原時平に仕える「侍従の君」にラブレターを送った。が無しのつぶてを嘆きわび、さらに手紙を書いた。返事をくださらずとも、読んでくださったのなららせて「見つ」の二文字だけでもご返事くださいと。すると届いたからときめく思

いで封を切ると、手紙の「見つ」の部分破つて貼つてあった。平中物語で有名なフラレ話。寿美さんはさてどんな落胆をされたのか。

生きている証拠字忘れ物忘れ

竹 村 紀 治

「手のひらを太陽に」を歌おう。「ぼくらはみんな生きている／生きているからかなしいんだ」。かなしみも生きている証だ。忘れたら物忘れもそれ故と納得がいく。何が起つても気落ちしない。なるほど、紀の治さんに安心させてもらいました。

僕は足許がフラつき、ステッキに頼り始めた。万事動作が遅くなり、アカン毎日を送るのも「生きている証拠」と思えば平気、平気。終点がそこだ身仕度焦らねば

西 川 和 子

何をしても時間がかかる。三十分ですんでいた準備が一時間を要する。一時間で着く距離も二時間の余裕を見る。老化しての行動は時間を食う。だから和子さんは終点をそこに置いて降りる準備に焦る。それにしてもどれほどの手荷物、身掛けなのであろう、ではない。終点と言いつつ終活を指しているのだ。後顧の憂いをなくすには、いたすことが一杯。

『上方芸能』（発行人）

新川柳鑑賞 (38)

麻生 路郎

しゃなりしゃなり十半の足袋で
来るおかま

(一 颯)

おかま(男娼)を詠んだ句は珍しいが、この句を一読するといかにも美人気どりで歩いているおかまをビシヤリとやつつけているところに特に興趣を覚えるのである。顔も美しい、姿も仇つばいにしても、足袋の十半はツヤ消しである。思わず吹き出さずにはいられない句であるが、ムリにくすぐって笑わさないところに作者の腕をみとめねばならない。上の齣「しゃなりしゃなり」もこの句を生かしている。

不渡りと知らぬ女將は靴そろえ

(梨花)

今のおそびは月が出た出たや、黒田節で、ドカドカと来てドカと帰って行く。払いと云えば会社の小切手。ウツカリすると不渡りと云う。コレでも遊んだ気がするとは、世も末やと云いたくなる。

お勘定の小切手へ三拝九拝した女將、飛んで下りて靴までそろえたのに、不渡りとは、そりや聞こえませぬと云って見てもあとの祭り。人物躍動。

お女將さんがうるさいのよと断られ

(多久志)

しげしげと来る客が、

「どっか、温泉へでも行こうじゃアないか」と、誘いをかけて見たのであろう。それは婉曲なくときでもある。ところが女の言葉は「お女將さんがうるさいのよ」であった。アツサリとことわられたのである。酔客と仲居との心の動きを巧みに描出している。話し言葉ズバリの穿ちの句である。

座布団にいつかなつてた膝枕

(白 星)

好きな酒に酔うた上に、好きな妓の膝を枕にうとうとすることは、むじょうのよろこびに違いない。維新の志士の詩に、酔うては枕す美人の膝というのがあるが、今も昔も斯うした気持ちは同じだと云えよう。酔いがさめ、目が覚めて見たら、美人の膝ではなく座布団を枕にさされていたのである。現実をそのまま見せてくれた面白い句である。

妻のみでなく芸者までお父ちゃん

(愁 夢)

いさ、か禿げて来たせいもあるが、人の善さからでもある。

「お父ちゃん、ワテこつちにするわ。エ、でしよう。」

「ウム」

「姐ちゃんにもコレ、エ、でしよう。」

「ウム」

何か、買わされたのである。

「お父ちゃん、早よ帰りまひよ。お女將さんが待つてはるわ。」

「ウム」

斯くもお父ちゃんは善人なのである。

まをを外さぬネライ、巧みな描写、句は生きている。

啄木を晶子を語る妓で売れず

(春 日)

石川啄木の「一握の砂」がどうの、与謝野晶子の「舞姫」がどうのというインテリ芸者だけに、媚を売ろうとしないのである。男の脱線を理解することの出来ない、イヤ男と一緒に阿呆になれる妓が売れる筈もない。そこをとらえたのがこの句である。

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

木の芽和え文楽好きな母なりし
俄遍路スケッチしたり拝んだり
方言をまねて度を越す旅の酒
養毛剤のおろかしき値を信じ
天皇の傘寿にあやかる今日の幸
新幹線隣は何をする人ぞ
結び目がほどけかかっている絆
辞世句を八十五歳で捨て台詞
何もおいてないのが社長の机とか
初節句朝から来てる里の親

宴会で漢方薬のメモをとり
自由業と書いた所得の桁違い
へんたい仮名の一字が読めぬ道しるべ
兄弟に思い出があり蟬の籠
古稀とかや一步退く事に慣れ
塔一つ大和の冬を広うする
カラフルな薬並べて七十三
日の丸やここに明治の人が住む
建国祭の国旗はためく風きびし
大川端柳の風で暮れてゆく
もの書きの妻叱られて叱られて
竹を踏み喧嘩のつづきをする夫婦
菖蒲湯の菖蒲枕に老いの顔

自選集

小島蘭幸

六十七歳 私に棘はまだあるか

バレンタインチョコを狙つて孫が来る
なにをしに來たのだらうか灯をともし

証明写真撮るたび終活を思う

伸びる芽を摘んだやさしさだったのか

三宅保州

緩じ紐を辿ると過去が甦る

私の意見無視され多数決

竹光を差しておつとり駆けつける

ゆつくりと見る振りをする美術展

甲子園のサイレン平和囁みしめる

宮西弥生

信号の赤は命を叫ぶ彩

赤いマツチシユツと春呼ぶ二月堂

受付の笑顔は公と私の差別

一流も二流もレベルない役所

悟りには遠くありがとこちぞうさま

八木千代

いつもの朝

まつさらの水を欲しがる仏たち

いつもの朝の手順で今朝も香を焚く

想い伝わるらしく煙もゆれ加減

真言のしばしばダライラマもどき

絵ろうそく儚い煙置き残す

両川洋々

火葬場だ柩の亡父よ目を覚ませ

原発は脱法ハーブより恐い

決断は妻で働くのはわたし

地球狂うと僕も狂つてみたくなり

迷子札着けて貰つてする散歩

板尾岳人

なあ妻よスッポン鍋を食べようか

田んぼ道美空ひばりと散歩する

戦車に踏みつぶされている蟻の列

屁をこけば渡る世間に鬼が居る

器から零れた水から大惨事

奥田みつ子

ハガキにも祝う心をてんこ盛り

今年また出雲の心白牡丹

満天の星に今の私を見てもらう

木の上でカラス元気に飛ぶ構え

一筋の道歩き続けて悔いはなし

河井庸佑

由緒ある樹木で切れぬ訳がある
深追いはするなと友にアドバイス
思惑があつて先頭には立たず
高価だがお買得だと勧められ
先読んだ一手が利かず苦戦する

川上大輪

福耳でまたもや外れくじを引く
進化しました昨日まで猿でした
異常乾燥生命線がひび割れる
脳内革命 疑問符が消えている
終着駅に蒔いておこうか花の種

小西雄々

一呼吸おいて返事を整える
水仙の咲く道亡母に逢いたいな
流れてる雲の行き先かんがえぬ
墓石が動いた死んでから叙勲
古傷へ戦地の苦勞わすれない

斉藤 弘

寄り添うて咲こうよ福寿草だから
地球儀を撫でるいくさの傷撫でる
震災の子らへ贈ろう花の種
おにぎりを握りに立って空の青
ありがとこのことが奇麗子の笑顔

新家完司

お抹茶をいただくしばし文化人
手ぶらでも少し重たい胴回り
鉛筆を離すとただのおじいさん
ジャンプ傘ほどの気力も失せてきた
これからは残り時間を数えない

津守柳伸

お日さまに笑われそうな重装備
芽吹くものみな美しいウォーキング
当然の摂理足腰軋みだす
愛燦燦諸行無常のお念仏
菜種和え産寧坂のなごり雪

遠山可住

頭から足へじわじわ老いが来る
それぞれの花のいのちよ旬を咲く
郵便局で忘れた一円とどけられ
パンダの子なみに抱かれた記憶なく
年金がゆっくり腰を落ちつけぬ
戦争を知らぬ政治家勇ましく

都倉求芽

鉄棒は爪楊子少年Aの鬼
鬼やらいどこも由来を掘り起こし
強引に引き返させた鬼の慈悲
追い出した鬼がもう酒のんでいる
この道の鬼が後継者を喚く

土橋 螢

前 たもつ

弟が兄の顔して先に逝く
蜂の巣もつばくろの巣もある我が家
アルバムに我が半生が詰めてあり
歩けあるけとロボットに介護され
寒いねと言われ二月が逃げてゆく

西出 楓 楽

政岡 日枝子

春キャベツバリバリ齧る建国日
エゴン・シーレの絵に迷い込む白昼夢
直葬を頼めど息子返事せず
早春賦口ついて出る昨日今日
今おもう姑も母も偉かった

仁部 四郎

結び目が何と言おうとこだわらぬ
無理をして梅よ咲かなくてもいいよ
弁えてバセリは主役をもちあげる
急ぐ足 歌を唄って和ませる
不時着をするなど風の糸はなす

駅長と少尉が坊主の夢であり
親の汗通学定期ににじんでた
とにかくに汽車通学は腹が減り
複線で高架定期で小学生
新駅の名前に小字起用され

林 瑞枝

長生きの秘訣 白寿の声を聞く
下積みの努力実った廻り椅子
おみこしの声をエプロン脱いで待つ
隣席の頭痛サンブル役に立ち
ふりそぐ太陽園児の歌が好き

井笠川柳会 第16回 笠岡大会

とき 5月23日(土) 開場 9時30分
午後1時 締切 午前 11時30分
ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
笠岡市十一番町1-3 TEL.0865-62-5701
笠岡駅から④バスで伏越下車。徒歩4分

課題と選者

事前投句「逃げる」(2句)

鈴木公宏・大家風太・久本にい地

3選者による共選

天位の中から1名に市長賞として句碑を贈呈
所定の用紙または便箋に2句併記のうえ、

住所・氏名・電話・所属柳社明記

投句料1000円と共に4月30日必着で送付のこと

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289

井笠川柳会 宛

TEL.0865-62-6200 (戸田さだお)

当日投句 (各題2句)

「薬」	久保田	半蔵門	選
「宿」	赤井	花城	選
「妹」	矢沢	和女	選
「腰」	小島	蘭幸	選

当日席題 (1句)

当日参加料 2000円 (弁当・大会誌)

主催 井笠川柳会

27年度 誌上競詠川柳 「咲くやこの花賞」

題	選者	ハガキに2句
第1回 無 心	森中恵美子	2月20日 済み
第2回 薬	井上 一箇	3月20日 済み
第3回 人 間	赤松ますみ	4月20日 締切
第4回 点	嶋澤喜八郎	5月20日 締切
第5回 明 る い	前年度優勝	6月20日 締切
第6回 許 す	板野 美子	7月20日 締切
第7回 ぼんやり	徳永 政治	8月20日 締切
第8回 隙	木本 朱夏	9月20日 締切
第9回 深 い	雫石 隆子	10月20日 締切
第10回 偶 然	大野 風柳	11月20日 締切
第11回 裁 く	天根 夢草	12月20日 締切
第12回 怪 しい	新家 完司	1月20日 締切

投句料 (掲載誌料含む) 1年 2000円とする
送金先 〒547-0006 大阪市平野区加美正覚寺
 3-5-5-304 立蔵 信子 宛
投句先 〒572-0844 寝屋川市太秦緑が丘11-8
 川柳瓦版の会

創立58周年 発行700号記念 第26回 時の川柳交歓川柳会

日時 5月10日(日) **開会** 12時30分
会場 兵庫県民会館9Fホール
 神戸市中央区下山手通4-16-3 TEL.078-321-2131
 JR元町駅西出口・阪神電車元町西出口より北へ10分
会費 2000円 (記念品・発表誌呈)
 ※昼食は各自でお済ませください
 (地下に食堂あり)

講演 「連句でチャット」
 詩人 鈴木 漠先生

兼題	各題2句			
	「無 理」	高木 勇三	選	
	「鳴 る」	木本 朱夏	選	
	「風」	大家 風太	選	
	「間」	天根 夢草	選	
	「他 人」	森中恵美子	選	
	「真 心」	赤井 花城	選	
	「雑 詠」	平山 繁夫	選	

特別課題 1句
 「さっと」 小山 紀乃 選

投句締切 12時 欠席投句拝辞
主 催 時の川柳社

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

プロレスを見るととき父の目が生きる
 ぎょうざ食う逢わねばならぬ人もなし
 負けまいと薄い財布がレジに立ち
 浮き雲は今ののどりわがいのち
 七光エスカレーターに乗って来る
 駄句名句 父の記録として遺す
 よれよれの背広が似合う詩人です
 椿落つ尼僧が語る艶ばなし
 落ちてなお椿は五弁くずさない
 子の寝顔つくづく祈ること多し
 清純で売ってヌードでカムバック
 老夫婦パントマイムでことが足り
 握手する手の大きさに負けている
 光らない勲章ほくの青春だ
 既製服びつたり萬年平社員
 王手飛車 煙草の灰が落ちまつせ
 神さまが栄えるほどに世が乱れ



西 出 楓 楽 選

三田市 上田 ひとみ

温かい手のひら奇跡生むだろう
暴走は青かった日のアルバムに
越えて行く後にすこうし風残し
見えてねいつでも飛んでみせるから
小道具を使いなんとか生きている
水鏡今日の私は如何です

弘前市 吉川 ひとし

雲行きを知ったくちびる貝になる
ラップして置きたい里の風と雪
静寂な森へ左遷の辞令くる
匿名で良いと言うから本音書く
前向きな足に無かった疲労感
靴を買うまだまだ坂を登れそう

箕面市 寺井 柳 童

少子化に街から消えた鬼は外
節分の豆歳の数もて余し
もう飽きたしかし今夜も鍋料理

「元氣そう」言われこっそり医者通い

スタップ細胞釈明もなく謎のまま

お受験に我が事のように寝つかれず

堺市 近藤 治子

欲しい物ないがときたまデパートへ
去りぎわに本音ぼつりと打ち明ける
コンビニがおにぎり道を極める気
コンビニを頼っています母代わり
自分にもときたまあげるプレゼント
コンビニを味方につけて妻はとぶ

京都市 櫻崎 篤子

哀しい時に猫がそばから離れない
机の下で目線を合わす猫を飼い
日記閉じつつ今日の私をほめてやる
何も言うまい時代の違う嫁だから
泣き言も聞かされました雛の箱
父さんの靴音ボクも合わせよう

大阪府 高 木 道 子

一息をつけば目蓋の揃いぶみ
春めくもビル無表情笑う山

ロボットと暮らす未来になりそうな
胃と心満たしてくれる母恋し
あなたの元気貰いたいとの握手攻め

神戸市 上 田 和 宏

剛直に生きる卒寿の背の丸さ
テロ愚か独り善がりの世界地図
やわらかな刻を広げる二度童子
ぜいたくの風が糊代あまくして

横浜市 巖 田 かず枝

愛犬も私もあつた福白髪

日向ほこビタミンDを補給する

転んだら最後と足に言い聞かす

平凡に暮らせる日々に感謝する

孫からの電話に声が甘くなる

行く先を心配してる着物達

豊中市 荒 卷 夢

毎日がすべてスローで平和です

しきたりを次第にやめて老い早し

ふらつくのは心とからだどっちだろ

優しさに緊張の糸ふつと切れ

ホームにも恋の噂のちらほらと

テロのニュース流れた後のコマーシャル

羽曳野市 安 本 美 喜

世界に一着私のコート縫いあげる

夫と居るそれだけの幸 福寿草

アルコールと化粧品代とで喧嘩する

人生を十七音が語り出す
居候させた水虫七十歳

何処からか漏れた名簿で来る電話

孫ほしい息子に一寸拗ねて見る

出来るなら行つて見たいね江戸時代

胃の中で酒と葉が手を握る

笠岡市 藤 井 智 史

新嫁が来たら家じゅう百ワット

シャッフルをしてもあなたを忘れない

飛車角の動きで酒を手配する

ブルブルと平行線を辿る恋

点と点結んで開く恋の花

川柳で家を一軒建ててやる

横浜市 長 島 亜希子

保険下り黒字だったと怪我の友

お似合いと赤いセーター勧められ

わたしたち掛時計よりもちました

人前では言えない夢を抱いている

減塩低糖夫につき合い絶好調

借金大国なのに外では羽振り良い

和歌山市 磯部義雄

鳥取市 坂本とも湖

イスラム国地図のどこにもありやしない
頑張って上司抜いたが飛ばされる

添うてきた道振り返り老介護

何故出口調査で決まる当選者

ハローワークに通うトンネル無い出口

紀の川市 楠原富香

内輪もめソフトにさばく匙加減

血縁と言えば態度が丸くなる

それからが大変だった川の幅

頂点に立って足下すくわれる

成長が見え隠れする子の便り

和歌山県 森下よりこ

冬にしか出来ぬ仕事を一つずつ

生きている実感日脚伸びてくる

今日の収穫籠いっばいのふきのとう

嘘のようなほんと人質のニュース

一人ぐらし何でもありのくらしです

鳥取市 近藤秋星

特養へ心新たに門出する

第三の古里さらば「なごみ苑」

限られた生命ボケては居られない

特養で余生静かに送りたい

天国に特等席は予約済み

増税のゴングは総理やめてくれ

巡回のバトに無事故の夜が明け

初恋のブランコ揺れていとおしい

弁解はするなと叱り陽が沈み

手話の指弾んで春の恋語る

倉吉市 中村毅

年明けて何も変わらず一カ月

大吉が出たのでくじを買ったのに

使いましよ老人力はどこにでも

諭吉さんせめて三泊しておくれ

問診をする時画面見ないでね

境港市 中井虎尾

高速路走るその下過疎の里

年輪の皺くつきりと初笑い

人類に反省しろと地球荒れ

開店だチラシ握ってよーいドン

冬の月冷めた目をして俺見てる

米子市 生田和之

文庫本読んでスマホに笑われる

立ち入ったことが聞きたい女偏

玄関に裸足で下りて下駄を履く

ほろ酔いの詩もまんざら捨てられぬ

税還付縁なき春も十年目

米子市 見山 温子

いい笑顔名前浮かばず会釈する
きなこ餅供え仏もお正月
賞味期限多少の事は気にしない
ローカルバス訛に里の空気かな
白葱を風邪引くなよと娘に送る

米子市 永井 三津子

ICU心凍てつく器械音（病室にて）
動ける日頭に浮かべ聞凌ぐ
弱音吐く自分褒めたり叱ったり
耳元で闇が囁く負の思考
三途の川渡りはせぬぞ子を残し

鳥取県 田口 清帆

幸せは笑い袋の中に棲む
久し振り笑顔作るが名が出ない
いい予感すつと朝日が照っている
溜息をつけば幸せ逃げてゆく
隠しても心の闇を照らす月

松江市 武島 千代枝

生姜湯の気配り嬉し今日の冷え
味染みた大根舌にとろり溶け
介護士に頼らぬ努力グーチョキパー
幼子の笑顔に負けたしかめ面
出遅れて言いたい事を引つ込める

岡山市 工藤 千代子

通院日増えて三寒が続く
テロップが流れまた遠くなる昭和
にこりともせずにオヤジギャグ連発
平凡な正月ありがたいと思う
私パスしんどのことはもうしない

岡山市 丹下 凱夫

春よ来い早く来いと膝小僧
ドキドキもワクワクもして春が来る
生きていてよかった今朝も目が覚めた
帰り道おぼつかないが覚えている
残生のいまひとたびの春である

岡山市 藤成 操江

宿根草芽吹く箱庭春の景
カタコトを解った顔で聞いてやる
大型店人の熱気に疲れきる
横入りをされて話が蛇行する
転んでは起きて学んだ処世術

瀬戸内市 東 槇 ますみ

懐の小石一つが重くなる
学びしろ残し夕日と遊んでる
大声と人のいいのが取得です
幸せの尻尾なかなか掴めない
風よけの夫の背中がまるくなる

備前市 森 ふみか

過去はみなゴミの袋に詰められる

殊更に選ぶ遺影になる笑顔

雨の音聞けば貴女がいるようで

甦るすつかり褪せた走馬灯

私の千倍亡母を知る指輪

三原市 鴨 田 昭 紀

溶けるまで弱火で煮込むわだかまり

懸命にあなた好みに咲いている

ブライドに触れるとすぐに点火する

ハローワークの椅子に連帯感がある

節穴に呼び止められる好奇心

岡山県 池 田 たか子

絵手紙の羊が友の顔になる

通院のセーター桜色を選ぶ

菜の花のオーラにやる気わいてくる

弥生の空なら翔べそう羽繕い

前向きに変わらなくっちゃー花は咲く

岡山県 田 中 恵

ふり向けば風が一瞬立ち止まる

茶柱が寝たり起きたりして迷う

日向ぼこ自慢の茶請け提げて来る

過疎なりに羽ばたく夢はたとある

人生の節目節目に置く葉

尾道市 小 畑 宣 之

待ちかねし冬至明日から日が伸びる

捨て難し昨年の良きカレンダー

絵心の無くて羨む年賀状

子や孫も炬燵に集う灯油高

泥酔の朝一杯の水旨し

竹原市 若 年 幸 子

お喋りは脳活性とエンドレス

カラフルなマスクをかけて落着かず

冬晴れに心も少しハイテンポ

残酷非道アラアの神は赦すのか

冬眠を春一番に揺さ振られ

竹原市 土 井 輝 恵

終活は孫離れから手始めに

いつのまに生命線が延びたのか

講演に歌を組み込み睡気抜く

私を強くしたのは子育てか

生きる道狭くしている真正直

福山市 藤 後 卓 也

不器用に生きて喜劇を持ち歩く

極楽は圏外ですとナビが言う

自分史にある失点がなつかしい

人様の話で聞けば他愛ない

春机独り黙々書に溺れ

三次市 伊藤 寿子

ヒーチャンと認知の義姉が受話器取る

スイッチオン義姉は認知には見えぬ

嫁御から義姉の苦勞の山を聴く

姑の一生大正昭和見事生き

折りにふれ姑が恋しく仏間立つ

山口市 増田 めだか

太い骨無口な父の喉仏

一天を指す男に修羅がある

マンモスの骨が歴史を変えていく

垣根越し声かけ合つて今日を生き

箱庭に草が芽を出し春を知る

岩国市 上村 夢香

厳しさを見せず背中では師は語る

訴えるように顔出すパスポート

なぞなぞはようやく解けて青い空

胸の内そっと仕舞つてペンを置く

鬼も内受け止めてます豆を撒く

松山市 栗田 忠士

春うららダリの時計が欠伸する

鳩尾の辺りに留めている本音

ウインドーに映る影見て背を伸ばす

人並みと思つて丸く生きている

人生のジグソーパズル解けぬまま

松山市 神野 きつこ

寒波到来雪の下では春を待つ

高野山祈りの水が凍てついて

仏さまにつこり笑う桃節句

アンドウトロワ鏡の中の美しさ

万札があつと言う間に消える春

佐賀県 真島 久美子

陽だまりと言うべき夢の捨て所

許すこといくつも抱いて揺れている

つなぐ手と同じ未来を見ていよう

すごいねと言われたかったペン仕舞う

イヤリング心はここにありました

シドニー 坂上 のり子

どう読むの今更聞けぬあの雅号

音楽会フツと臭ったガーリック

輪の中にこっそり別の輪があつた

栄養にこだわり過ぎて病んでいる

日本の悪夢仕掛けたのは総理

札幌市 斉藤 宏子

四年目の春を迎える仮設の子

青春の甘い香りのジンフリーズ

風花は厳しい冬のプレゼント

甘酒に元気をもらいする除雪

オーボエの響きのような吹雪の日

登別市 小林 碧水

静岡市 渡辺 芳子

水柱から春が一滴ずつ降りる
また雪が冬の景色を描きなます
早春賦唄い暦へ帰る冬
背負い投げとても上手な宝くじ
齒科予約鉛の靴を履いて出る

弘前市 肥後 和香子

メレンゲのようね抱かれてなごり雪

胸椎の骨折知らず無理笑顔
救急で着の身着のまま運ばれて

愛知県 樺 嶺 志

津軽弁フランス料理に絶妙で
白桃はすっぱいほんの白桃で
大阪と津軽の血ですわが白桃
赤ちゃんはこれから手術アンパンマン

塩竈市 木田 比呂朗

入院で心配ことは留守自宅
独居の身突発入院困り果て
我入院妻ホームにて穏やかに

大阪市 磯 島 福貴子

春四月存在うすい黒電話

古都の宵火の粉蹴散らすお水取り

白線も弾むカバンも新年度
露の臺ハウス育ちと後で知り
検査値が予定変更させたがる
氏素姓鼻にかけてる吟醸酒

東京都 高岡 弥生

ママママと新入園児門扉越し
北国は梅桃桜一斉に
人生もルーズリーフの如くなら
金策の手段の一つ無精髭

大阪市 宇都 満知子

雪の中親子で向かう志望校
次々と旅だつて行く子供達

平日のランチは主婦で賑わつて

同年代私一番物忘れ

事務職も段々辛いお年頃

ホワイトアウト雪女かな白い闇
雪空に負けず嫌いか梅二輪
魔女です爺ちゃん溶かす孫娘
眉間より目尻の皺の幸せよ
アイフォンにハテナの答早すぎる

大阪市 太田 としお

駅から五分あれば車のことでした
美人だがそうじ洗濯大嫌い

金ためて醜い顔になっている

昔も今も義理人情は変わらない

することがいっぱいあつて死ねません

大阪市 柴本 ばつは

大阪も不馴れな島も自己流で

好きなもの作つて食べて元気です

五ヶ月我慢古家変身いたします

やさしさと元気もらつた屋久の島

サンセットこの残照をありがとう

大阪市 高杉 力

夏まではとつておこうかビールの句

半額のシールで決まるお献立

ええ歌や選曲だけを褒められる

パソコンと車買い替え迷う歳

五十代より上はないアンケート

大阪市 寺本 実

肌みせてスキは見せない美女と飲む

今だけの割引とまだだまされる

回せない記憶の鍵がさびついて

独り身は風呂もトイレも鍵いらず

花嫁にいつ生まれるか問うてみる

大阪市 橋本 典子

長電話愚痴が惚気に変わるまで
頑固さは筋金入りの父に似て

落の臺たらの芽こごみ春はそこ

調理器具歴史を刻み手の一部

向かい風負けるものかとペダル踏む

大阪市 平賀 国和

箱開けたイラク戦争罪深し

日本も我が人生も曲がり角

職退いて子供がくれた夫婦旅

故郷で妻と仰いだ冬銀河

二人の趣味一部重なり丁度いい

大阪市 藤田 武人

靴下は右足からと決めている

本命は手作り義理は百均だ

方言を都会の中で聞き分ける

ヨシヨシとされて甘える膝枕

神様が逢わしてくれた錠と鍵

大阪市 宮村 満寿恵

集まって文殊の知恵を出している

ささめ雪庭の葉ボタンうす化粧

旅に出る気分はすでに春うらら

父さんと一緒に呑んだ旅の宿

川柳に挑みストレス溜めぬ喜寿

大阪府 小栢 こずえ

とりとめない話が弾む日向ぼこ

良く食べて良く喋るからまだ逝かぬ

老いて嫁に従う老いの演技力

呆けかげん互いに見てるクラス会

好奇心燃やして老化遠ざける

大阪府 神野 千恵子

定年後しゃしゃり出てくるスニーカー

こだわりを捨てると夢がそっぽ向く

駅伝の沿道にいて膝笑う

現実には妄想が遅れとつている

選挙にも行かず思想もない自由

池田市 上山 堅坊

ちよつとだけ背伸びしてみる青い空

スポーツのニュースが多い平和な日

トゲ覚悟なおも触れたい赤い薔薇

九条の変化ながめている余生

世渡りがそこそこなのか無事傘寿

貝塚市 吉道 あかね

新しい春を迎える窓を拭く

トンネルの向こうはきつと春の海

チューリップ行進曲が鳴り出した

みんなみんな忘れてあげる春だから

年金者と書いておきますアンケート

堺市 羽田野 洋介

ちよつとした心配りが倍返し

いい素材どうまとめるか五七五

かたちだけ出来れば後は年の功

大風呂敷拡がり過ぎて畳めない

自分史の遠いドラマがアルバムに

堺市 山崎 早苗

あなたもか友の老化にほつとする

我が身体電池交換必要か

老人の愚痴聞くだけのボランティア

寝てしまひ今日も犯人見逃した

安物も銭失いにさせぬ母

堺市 大和 峯二

元気です散歩散歩と鍛えてる

セシウムが消える日も見ず再稼働

被災地の画像見るたび身が震え

弱者から希望を奪う消費税

沖繩の悲痛な叫びかなえたい

高槻市 松岡 重子

やわらかな竿で余生の夢を釣る

朗らかな嫁で近所の人気者

今日も無事いま人生のどのあたり

夫婦ともアンバランスで助け合う

生き甲斐のひとつお洒落を忘れない

豊中市 荒木郁子

言い訳がすらすら出ます妻の舌
大丈夫住所と名前言えるから
雰囲気を感じベットも近寄らぬ
折ることそれが心の拠り所
似合うけど値札に思案試着室

豊中市 石橋優明

カーテンの外で枯れ枝おいでおいで
春模様鉄条網も華やいで
内緒話ふりしかできぬ幼い子(長女三句)
お話を少ない語彙で紡ぎだす
セーラームーン何語でしゃべってるのですか

豊中市 貝塚正子

酒の味知ってこの世は桜色
舞踊会楽しく踊り二日寝る
神棚の位置が歳々高くなる
花達は息をひそめて時を待つ
使えば不安残したくない老いの金

豊中市 南正代

旅の宿どじょうすくい盛りがあがる
この頃の天気予報はよく当る
没句でもリサイクルしてまた投句
二人連れどうも気になる葉指
災害予知ねずみが先に避難する

富田林市 小出修三

沢山の玩具があつて一人つ子
合掌の手を朝の陽が暖める
よく喋る人に寄り添う聞き上手
十七音妻と一緒に指を折る
信じ合い二人に嘘のない暮し

寝屋川市 岡本 勲

目玉商品欲しさにデカイ無駄を買い
ヒヨコから育てたという目玉やき
夜ふかしは親公認の大晦日
男折れ丸くおさまる夫婦仲
梅の香にさそわれぶらり途中下車

東大阪市 織田登子

春日和旅のパンフを集めだす
外は雪お店の中は春の服
DMの挿し絵につられ足はこび
辻褄が合う人生に感謝する
歯の治療まな板の鯉ヶセラセラ

箕面市 大浦初音

姦しを越えた四人の女旅
極楽と言いつつ入る仕舞い風呂
寒い朝気合を入れて起きあがる
うっかりがすっかりになる老いの道
不機嫌はそのことだけで罪である

八尾市 前田 紀雄

点滴を外してこの世復帰する
病棟の生活昼夜逆転する
毎日の検温血圧異状ナシ
退院間近娑婆の生活思い出す
病んでみて健康第一実感だ

神戸市 興水 弘

メシ旨く頑張れるかな傘寿越え
ひと言で雰囲気壊し刺す視線
足りぬ才口で強がり50年
はやぶさの還るのが夢サブリ飲む
雲ふわり八十路を亡妻が見つめてる

神戸市 長川 哲夫

ムハマンド君がメッカで見た夢は
走る雲イスラム国に入るなよ
震災よテロよと「ガマン」試される
官邸の弔旗が雪に埋まる朝
どんな死となるとも君は美しく

神戸市 山根 弘子

口笛に惚れてあなたと縁結び
お日さまの光が欲しい老いの背な
七光り社長の椅子に胡座かく
ふわふわの心さとした父の喝
未来の子無限の光秘めている

小野市 田中 辰夫

柳友の席に一輪手向け花
春の朝眠気に負けてあと5分
シャボン玉笑顔を連れて風になり
5年後のはやぶさ帰還待つ五輪
親離れ出来ぬ子供も二十歳来る

川西市 大坪 一徳

脳トレにトマ・ピケティの本を買う
ポンポンと文句出て来る口見つめ
お受験の孫の算数手に負えず
酒楽し三人寄ればなお楽し
背丈越す雪の暮しを思い遣る

川西市 日野岡 和之

口だけは元気になつて退院日
全身を楽器熱唱演歌道
最後尾先頭にはない残り福
幸せは毎日続く普通の日
野の花をそつと一輪備前焼

篠山市 藤井 美智子

もったいない目を光らせるダイエツト
曲がり角不安片手に得た勇氣
予定外急用クリア今日無事に
流れ星一つ悩みを乗せてくれ
争いも愛も地球の丸の中

三田市 九村 義徳

南あわじ市 萩原 狸月

責任が詰まった晴着重たそう

大人への階段昇る儀式です

振袖の娘の姿ポチ吠える

朗らかな嫁がルールを塗りかえた

金婚にがまんづよいとルビを振る

三田市 多田 雅尚

理想だけ高くて未だ独り者

訳有りのカニでいいよと年金者

名前見て性別読みも悩む今

歳よりも若いと言われ受ける役

暗い世を白紙に戻す雪化粧

宝塚市 丸山 孔一

日本語の解る犬です要注意

妻娘羊年だと誰思う

娘と旅に出るといふ日の妻の笑い

月光のモノクロ世界風の音

この雨も地球巡ったひと雫

西宮市 株元 玲子

非道への怒り水の輪のように

命の重み消えゆくこの世哀れなり

目を覚まし今日のひと日の無事祈る

多忙な医者思い通院取り止める

卒寿なれど夢語る友目がきれい

人生を大かきだけで泳ぎ切り

お絵かきが上手になつて母の顔

年金は預金口座に飯の宿

きみまろに食傷をしたバス旅行

風流にカラオケが邪魔花の下

奈良市 尾畑 なを江

簡単に見えること程むずかしい

予感する今夜は亡母に会えそう

遠雷にチビリチビリと飲むお酒

本番で眠れず仮眠良く眠れ

重曹と酢でエコ掃除する

香芝市 山下 純子

特売日出会いたくない人に会う

満天の星の出迎え里帰り

アイロンでシャツも気持ちもシワのばす

骨密度ともに知りたい脳密度

食べ上手魚拓みたいに骨残す

奈良県 谷川 憲

戦争やテロに正義はありません

少年の面影さがすクラス会

消えた夢に今もロマンを持つている

あれこれと計算ばかりして飛ばぬ

孤高というがただ頑固なだけ

鳥取市 大前 安子

思い出を忘れる方がいいことも
生きてこそ庭木の手入れ楽しめる
ネジ少し緩めた私好きになる
難しいこと食べてから考える

鳥取市 奥田 由美

老親の見舞いにも要る妻の許可
まだ消さぬ短縮デソワ三回忌
責任も問うから悩む孫育て
花よりも実用的とパンツくる

鳥取市 高原 かおる

ときめいて明日の予定組んでいる
イケメンと組んでソワソワ落ち着かぬ
気持だけ焦って足が動かない
身心も波乱がおこりもめている

鳥取市 田中 天翔

胸の内明かせば人を傷つける
腹の中黒くなかったホツとする
人間ドックブライバシーはなかりけり
ドック済み外の空気の旨いこと

鳥取市 谷口 回春子

好きですと叫んだ途端目が覚めた
嫌なこと書いて破って捨ててみる
盗み食い口の匂いで直ぐにばれ
もの言わぬ孫の心が透けて見え

鳥取市 津村 律子

小保方さん信じてたのに残念だ
皺の手で金盃注ぐ嬉しい日
でこぼこを杓してくれる五〇年
あなたのことが心配だから小言いう

鳥取市 山下 凱柳

豆まきはしたことにする老夫婦
流石です褒める言葉に棘が見え
楽しそう見えても火花散らす仲
忘れる事も長生きをする秘訣です

倉吉市 岡崎 美知江

この溝と一緒に飛んでくれますか
筋トレの腕自慢して見せている
やわらかい言葉煎じてけじめつけ
ヘルシーと聞けば飛びつく熟女たち

倉吉市 田中 紀美恵

趣味多彩翼広げて世界へと
駄駄っ子に大きな翼持たせたい
壺を開け姑の愚痴詰めておく
水車回るコトコト飽きずご苦労だ

倉吉市 堀 かずこ

老夫婦散歩している手をつなぎ
傷ついた心を癒す人がいる
泣かされて未練私のじやまをする
時どきは誤解もあるが友は友

米子市 池岡 たけし

世の中の春はまだかと民の声
天と地が雷地震呼ぶみたい
春日和コタツとミカン役を終え
幸せは己の心がつくるもの

米子市 小野 鶴子

きりたんぼ湯気の向こうに亡母の顔
大仕事免許更新一区切り
春風よ助手席どうぞ空けてます
来る来ない千切る花びら来るに賭け

米子市 加藤 正二

世の中が後期高齢札付ける
ああ言えばこう言うのだと総理解く
句会から老いの一日回り出す
世の中を騒ぎ楽しむ虫が居る

米子市 田村 周子

年重ね祝う新年一入だ
正月に羽撃いて行く孫息子
歯がコロリ抜けてばあさん顔になる
良いことに眠れぬ日などありません

米子市 野川 宣子

小さな群れ束ねる父のホイッスル
願い事のせ千の鶴はばいた
新しいお役頂き惚けられぬ
本物は目立たぬ位置で光ってる

鳥取県 飯野 菖子

月だつて地球の影で隠れんば
道しるベライン外れず生きている
期限切れそんな私が役に立つ
気にしない脳のレベルはまだ若い

鳥取県 下田 茂登子

一人でも規則正しく食を取る
其の先を言えば不仲になる他人
独居老合鍵の場所ケアマネに
真面目さは買われているが二番手だ

鳥取県 橋谷 静江

困ったら神様にまず手を合わす
後悔はしないと前を向いて行く
前向きに今日一日の計を立て
老ホーム見舞う気持が遠くなる

松江市 相見 柳歩

この世へと親を選んで生まれ来る
催促をしない心の奥深さ
心だけビッグサイズに育つよう
人生を楽しむ前に心研ぐ

松江市 山根 邦代

テレビ消し心静かに清書する
必要とされているから明日がある
笑い合う暮らしみんなに福の神
ひとり言それは自分の励ましに

出雲市 黒目 英男

陽の光みんなを照らしバラダイス

つながりを求めて夢を膨らます

峠越えしたはずなのに七十路坂

ライフワーク平和願って夢を追う

玉野市 片岡 富子

感情を事務的にするメールかな

鍋奉行夫の存在輝く日

隙間風夫婦の間にたまに吹く

買物カゴ少ない人の後並ぶ

雲南市 菅田 かつ子

病床の夫の側で読む句集

ぶつりと笑い袋の電池切れ

氣を利かせ雀しゃべりに来てくれる

ここ一步踏み出す勇氣くれた風

岡山県 高岡 茂子

星空と水が自慢の過疎に住む

氣のおけぬ友に恵まれ時忘れ

半年もたぬといわれ五十年

やさしさにすじの通った大家族

安来市 原 煩惱児

初場所を盛り上げらるる両陛下

柚子や柿落ちるがままに老い独り

結局は臺が立つたる儂の野菜

母鴉が確認をする七つの子

岡山県 紫 しめの

前向きな意見でお茶を濁しとく

病名がついてますます横着に

こたつ布団猫のサイズにくぼんでる

夕食後出掛けた猫の午前様

岡山市 永見 心咲

今ぼつと音して咲いた黄水仙

春近し髪を五センチ程切つて

コンビニのおでんで足りる老いふたり

舞い込んだ幸せに鍵かけておく

尾道市 日谷 寛

退屈になってそっぽの影法師

どこまでもわたしはわたし影法師

自由だと背伸びしている影法師

戦争はもうごめんだと影法師

岡山市 前田 恵美子

やぶ椿咲いて目白が来てくれる

気楽だと顔もおなかも弛んでる

節分だ山の緑が動き出す

節分祭スイッチ変える日の光

竹原市 六田 半徳

孫五人それぞれの夢チューリップ

早世の次男愛した大宇宙

待っていた沈丁花咲き香り良い

今秋は庭の八朔五十成り

山口市 中前 幸子
恍惚の影をやさしくエスコート

のつぺらぼうの影追い掛けてゆく枯れ野
飢えた石の上に媚びない影を置く
夜明けのコーヒー羊の群れを追いつながら

宇部市 高山 清子

寒さ厳し倒れてなるか老いの意地
車椅子の卒寿に握手選挙戦
切り札をポケットに秘め輪の中に
悪役がいるから話盛り上がり

防府市 坂本 加代

動物は五感すべてに人に勝つ
さざなみがだんだん近く寄せてくる
暇人と言われなるほどまた一句
約束があれば楽しい日曜日

今治市 渡邊 伊津志

気紛れな人と約束した不覚
目を閉じて風の言葉に聞き惚れる
焦らずに番が来るのを待っている
野の花は微笑み返しお上手で

大洲市 花岡 順子

おはようの笑顔へ返すのも笑顔
留守電にして予防する詐欺電話
春二月入試の孫が二人いる
一夜漬け運に任せるほかはない

高知市 三谷 松太郎
高齢の直截もあり友の歌集

長嶋王イチロー松井次見たい
国というテロ集団にしてやられ
せつせつせ自分を生きる七十億人

北九州市 小松 紀子

おちこんだ友よ笑えと気を配る
自分に言う大丈夫まだ頑張れる
川柳は心のささえ師に感謝
お悩みもお聞きますよボランティア

福岡県 本田 さくら

「戦争」が死語となる日はいつの日か
湯につかる今日も一日恙なし
酔もの好き三歳の孫誰に似た
冷蔵庫きれいにしよう鍋にする

佐賀市 清水 園實

やせガマンせずに厚着し寒をぬけ
畳からベッドに替えて軽く起き
くらしには何も気にせず笑いたい
スタミナをつけて冬場をのりこえる

唐津市 岩崎 實

朝八時体に聞いて草むしり
玄関に泥の軍手をおいておく
目と耳がつれなくなりし足腰も
今からは物はふやさず捨てていく

唐津市 吉 富 節 子

捨てられず溜まる衣類を娘が始末
今年こそ毎年同じ変化なし
堪える事知らぬ人増え事件増え
読み返す十年日記懐かしや

佐賀県 門 井 孝

恵方巻ケーキもあると孫が言う
梅開花桜待たずに花見酒
ソーラーで猫と一緒に日向ぼこ
六度目の羊に出合いまだ元氣

熊本市 杉 野 羅 天

シリアテロ真相包むオブラート
太ったを敢えて言わないご挨拶
出会いなり夢の国なり黄泉の国
師を偲び歩む仔羊彷徨わず

山鹿市 前 田 幸 子

年賀状出さず待つてる卒寿です
デイサービス誕生祝にポリアンナ
恵方巻春を届けてくれる友
十年忌師弟の絆菊届く

山鹿市 柳 田 白 沙

人生のフィルムを逆に戻せたら
笑いには適応免疫あるのです
ハイポーズ一番好きなかけ言葉
きつとそう二人で見たのは二輪草

沖繩市 森 山 文 切

足並みを揃えてやって来る不幸
結婚の理由は謎のままでいい
喧噪に窓を閉めても世は回る
姑息に儲けても後が続かない

札幌市 富 永 恵 子

凍雲に見とれて歩く散歩道
凍る道お先にどうぞマイペース
雪にあき緑恋しく画報あけ
外は雪蟹サポテンに話しかけ

弘前市 高 森 一 吞

ブルートレイン立ち往生も超ラッキー
喝采を浴びた人ほど寂しくて
糞虫の五分の魂輝いて
おろおろと老いるばかりの加齢臭

つくば市 嶋 本 喬

四本め年金減の毒矢とは
後妻業男寡は気をつけて
真っ直ぐに進む人生眩し過ぎ
初めグー孫のじゃんけん次はパー

東京都 川 本 真理子

草の芽を落ち葉でくるみ春よ来い
二人の膳互いに好きなものを上げ
赤い糸赤いゴムへと張り替える
福は内鬼も集まれ軒の下

横浜市 川島良子

振り出しに戻して風が心地よい
所々に涙の跡のあるページ

皮下脂肪貯めております冬籠り
大福をひとつ元氣を取り戻す

伊勢原市 小田幸子

愛犬にふとんとられて風邪をひく
リハビリの母見守って犬添い寝
老いた母の動き追う犬保護者顔
トイレまで母を先導介護犬

川崎市 成田せいじ

恵方巻鬼も手を揉み寄つて来る
差入れもマニュアルチェックナツツ姫
モンゴルに綱も記録も乗つとられ
ドカ雪に庭の立木もメタボ気味

新潟県 高野不二

還暦でやっと本業米つくり
子守歌よりもテレビでよう眠る
出しゃばりが少なくなった嫁不足
栄養が爪に行くのかよくのびる

江南市 脇田雅美

しがらみを解いて笑顔で輪になつて
まだ若い自己の実績自慢する
自爆テロ特攻隊によく似てる
オー寒い部屋暖める一人鍋

豊橋市 藤田千休

補聴器を外して妻の小言きく
春風が律儀に花粉連れて来る
痴漢めくスキンシップの春の風
草の芽を揺り起こしてる早春賦

大阪市 浅井公平

句作りは気合抜けてる時がよい
おニュー着たその日につけるしみ悲し
繰返し挑めばよい句出来るはず
お年玉もらいあつさり帰る孫

大阪市 内田志津子

淋しいネひそひそ話聞こえない
冬の空凍て付く雲がおりてくる
道の駅土の匂いのする至福
氏によればいい事づくめ都構想

大阪市 大治重信

初風呂の明るい声について覗き
ひっそりと読み返しみる初神籤
灰皿がいらなくなつて客も来ず
掻き混ぜた籤で当つた女房です

大阪市 田中ゆみ子

ほめられてまたゼンマイの猿になる
っすだけ美女になったか春帽子
つまらない意地あの時もこの時も
札束にホの字良心売りました

大阪市 梅里南天

泉大津市 助川和美

行き先を知らずひたすら運転す
長編の小説読んで歳をとり
賭けもせず2番の馬を応援す
タイムマシンなくても世界逆もどり

大阪市 前川善之

叱られて初めて解る母の愛
100%の子育てなんて出来ぬ筈
無法の場行つた息子に母は泣く
笑いこそ心を癒やす一里塚

大阪市 松田聰

鉛筆を転がし答出すテスト
ありふれた一日が過ぎ感謝する
誕生日忘れていたと妻怒る
古時計時々狂いあわてさす

大阪市 吉田知之

オリンピックテレビだけでも見るつもり
羽根布団あまり軽くてたよりない
原発も震災以来困りもの
老人会衣装持参で唱う人

大阪市 若本安代

香り立つ春を包んで差し上げる
小鳥来て梅の枝先揺らす春
水仙の強さ五感を取り戻す
映画館シニアカップル増えてます

バンザーイ補助輪なしで乗れた孫
ストーブの薬缶しゅんしゅん温い朝
我が家に春合格したよメールから
兄弟で服をシェアするエコ家族

貝塚市 石田ひろ子

ピンとこぬ曾祖母ちゃんと言われても
白菜の直立不動霜の朝
カラオケで時どき脳を浄化する
久々のジャズの夕べに身を溶かす

河内長野市 穂口正子

子と写る私も立派人の親
友と写るみんな可愛いお婆さん
夫と写る私の顔が歪んでる
充分だ拘り捨てて発泡酒

河内長野市 森田ひろこ

挑むほど元気もなくて円満に
羊にも眠れぬ夜がきつとある
ほどほどの幸に感謝の福は内
言わないと届きませんよありがとう

河内長野市 渡邊修

貰っても素直に言えぬ妻のチョコ
大女優演技で迫るテレシヨップ
ほろ酔いでゆうげ作りのぬすみ酒
最後まで間違われてる声の主

堺市 梅木 澄空
カレンダーの言葉ぐさりと胸を突く

探し物ほかしましたと妻ケロリ
コンビニに助けられてる朝寝坊
恵方巻コンビニの味食べ比べ

高槻市 三谷 白黒

暖房費もったいなくて朝寝する
答弁の下手な大臣親しめる

サブリよりまともな食事取ればよい
孫が問う爺ちゃんのすねおいしいの

豊中市 上出 修

妻ダウンLEDが切れました

期待の星いつの間にやら消えました

誕生日絆深めるサブライズ

よいしょされ乗せられまいと裏を読む

豊中市 源田 啓生

一点の光見つめて生きている

値上りの株を眺めて花を買う

酒を飲み宇宙の涯に翔ぶ心

選外句とたんに色が褪せて来る

寝屋川市 荒川 鈍甲

たらちねの母は太陽むかしより

若者が夢を持てない冬木立

のんびりとしたい永くもない命

憲法をじっくり読めば出る元氣

羽曳野市 磯本 洋一

木枯しの中で薪打つ祖父の愛
黄梅が割り込んで来る冬の庭
山眠る白い冷たいベール着て
冬空に春の小川の唄聞かす

枚方市 河田 洋子

楽しみは昼の一時のど自慢

何よりも友の絆が自慢です

昭和一桁金はなくても生きられる

自慢より失敗話に盛り上がり

枚方市 坂本 ミヨノ

月光がデート邪魔して照れ笑う

梅蕾色づきふくれ誇り顔

ぜんざいに焼餅入れて歯が困り

卒寿の背真つ直ぐ伸ばしマイク持つ

枚方市 松原 保

過積載まだまだ積んで右に舵

戦いに行かない人が準備する

子や孫に重い借金背負わせて

歩く道冬は日当り夏日陰

藤井寺市 田付 絹枝

バタバタ症座れば睡魔襲い来る

洗濯を干す手が凍る暦春

退屈は知らぬ屁理屈飛んで出る

久しぶり握手をしたが貴女誰

大阪府 西川 冷子

伊丹市 平井 富夫

五輪へと目指すあの子は特訓へ
病名は加齢と記入他になし
加齢でも診察券の数増える
冥土への日帰りツアーないかしら

酒やめた体かるいが味気ない
あのしぐさ爺婆ゆずりDNA
寝こんだら金は使えずゴミ出ない
真菰はね流れの中で凍と咲く

大阪府 畑 中 節子

小野市 藤 原 泰 宏

淋しげな満月の夜の街路灯
誉め合いてカラオケ大会時忘れ
気の若さ老いの無力を置き忘れ
八十路生く老いに甘えず我がために

嫌なところ見てもからそつと距離をおく
言い訳を小さい文字で書いている
まだ上がる欲が出てきて売り損ね
ハイテクのトイレに入り落ち着かず

神戸市 井 上 忠 貞

加東市 黒 崎 美紗子

古希すぎて午後の昼寝が習慣に
ハミングが妻ご機嫌のパロメータ
笹笛に古里の道想い出す
ふところの寒さを爛で暖める

デイサービス見馴れた顔にホッとす
デイサービス時計も早く動くのか
忘れてたオヤツの時間あるつどい
子を育てたあの頃偲ぶ元氣声

神戸市 玄 番 美恵子

三田市 足 立 つな子

孫が来てふところ緩むお正月
生命線信じ白寿の夢描く
信じたら楽になるよと亡母の星
目を覆うニュースばかりに胸痛む

菩提寺と氏神さまもお年玉
おめでとう先ずは揃って大福茶
トントントン七草囃す若菜節
励みます家族の愛を背にうけて

神戸市 富 永 恭 子

三田市 今 西 廣 子

花柄のカップ選んでいる春よ
結び目を弛めてみたら笑顔増え
節分会一人っきりの丸かぶり
バラの木に止まり香りに酔うスズメ

座布団の様なステーキ食べる夢
表札にプライドの文字一戸建て
横好きの私まだまだ手を伸ばす
新婚さんソフトタッチがずれ始め

三田市 辻 開 子

原油安ハンドル握り遠出さす
ダイエット娘より先に結果だそ
泉質と効能知ってお湯の旅
古希だけどゴールド免許ちと自慢

三田市 野 口 晶 子

母よりも女でいたい夜の紅
免疫力付けねば行けぬ婦人会
切なさも添えて花束赤リボン
口達者うまいもんだな投資詐欺

三木市 山 口 久 子

幸せをわが身の力でさがします
新雪を汚さぬ様そつと行き
節分にひ孫豆まき鬼はらい
雪うさぎ南天目から涙落ち

和歌山市 北 原 昭 枝

おはように元気をもらう白い息
冬の夜のしんと静まるひとり酒
ほどのよい爛に酔ってる演歌節
あったかい鍋です外はみぞれ降る

和歌山市 平 田 元 三

出されては困る自然の新記録
鳶の子が鳶になるまい塾尽し
真夜中のトイレの後本が友
早寝癖やつと付けたら早目覚め

和歌山市 福 呂 秀 子

脱ぎ捨てて太陽根まで冬木立
羽ばたいた子等に願いは無事なだけ
喜寿になり少し自分が見えて来る
旅予定必至で風邪を追い払う

岩出市 村 中 悦 男

後悔を捨てる気になる春の宵
体温計に平熱ですと励まされ
賀礼会年相応の友が出来
五〇〇枚やつと四枚の切手貰

田辺市 大 峠 可 動

砂時計幾万粒の詩を持つ
春夏秋冬楽観主義で生きている
八十路越えつぎつぎ浮かぶ好奇心
地獄極楽僕は五感で考える

(前月分) 鳥取市 近 藤 秋 星

大みそかも元日もない救急車
未と午が富士山頂で握手する
厳寒の正月だった三が日
富士山は四季折々の顔がある

(前月分) 大阪市 田 中 ゆ み 子

委せたら見ない言わない台所
着ぶくれて言いたいことが言えぬまま
行く先を知らず羊の群れの中
悴んだ手を励まして手漉き和紙

(木村マユミさんの句は42頁にあります)

英語 de Senryu ④

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

老人は 元祖にされて 気をよくし

good feeling---

every old man loves

to be made of the founder

幸福は 金庫の中に なかりけり

happiness

is not in

the safe

every old man は「老人」の意味を限定・強調した。the founder は「創設者」とか、「元祖」の意味。safe には「安全な」、「無事な」という形容詞がよく使われるが、ここでは名詞の「金庫」の意味。

～リバーウィローのため息～ (R.H.ブライスによる古川柳の英訳④)

R.H. ブライスは、俳句と川柳の違いを「俳句に向かう心構えは宗教的であり、川柳では概して反宗教的である。俳句は宗教に真面目に対応するだけでなく、すべての事柄に対して宗教的である。・・・川柳では、宗教を弱さをさらけだすもの、最悪では迷信と捉える」と解釈します。さらに「神は、憐れみも、喜びも、冷淡さもなく、ただ興味をもって我々の苦難を見ているだけである」として、川柳のクールさに着目しました。母国英国では非国教徒、キリスト教根本主義の家庭に育ち、京城帝国大学の教員時代にキリスト教を捨て、禅仏教に帰依したブライスは、まことに宗教的で真面目な人間でした。

彼は、子規の俳句革新運動を助けた川東碧梧桐の俳句、(富士行者雲にまがへる白衣哉) *The devotes on Mt. Fuji; / Their white raiment / Mingles with the clouds.* を例にとり、俳句の持つ宗教的な、真面目な姿勢を説明します。一方、古川柳の(辻切りを見ておはします地蔵尊) *Someone trying his sword on a chance wayfarer, / Jizo / Calmly gazing on.* を引いて、「路傍の地蔵は表情も変えず、辻切りに遭遇した旅人の不運を助けもせず、辻切りに罰も与えず、ただ凝視するだけである」と説明します。わたしは川柳の持つ卓越したクールさに身震いするほどの美意識を感じてしまうのです。

参考文献：R.H.Blyth 著 SENRYU (北星堂書店 1949)

写俳亭俳話八十年

稿 寄

伊 丹 三樹彦

「川柳塔」を愛読している。読んでみると面白いからだ。二月号で一〇五三号とある。とびきり古い。主宰は小島蘭幸で巻初に「古書店巡り」なる小文を発表。内容は田辺聖子の「川柳でんでん太鼓」が大好きで、何冊も買い、知友に配った。それを東広島市の古本屋の特別セールで再び買った話。二〇〇七年九版は定価五九〇円だった。

聖子の川柳好きは良く知られているが、私の「伊丹三樹彦全句集」にも撒文を書いてくれた。逆に彼女は、「あまから」なる雑誌に書いた拙文ですっぱん料理「遠山」をひいきしてくれた。遠山は地元塚口の店で、その看板は私が書いた。

公子が逝ったので、遠山夫人に告げると、路傍でわあっと泣いてくれた。

天津川計の連載「川柳讃歌」も為になる。今号では編集長木本朱夏の「橋山へ行く日は花の種持つて」などを紹介している。木津川は私の「ベレー帽喰み出る白髪神戸でなら死にたい」の句を踏まえて「大阪では死ねませんか」とスピーチしたこともある。

小島蘭幸の先代は薫風、そのまた先代は路郎、二方とも面識

がある。橘高薫風は「青玄」の編集室に居た窪田久美とも仲が良かった。久美の紹介で私は薫風居を訪ねてもいる。温和な親しめる人柄だった。

自分の川柳集を沖積舎に出版依頼して下さった。その縁での上京時は挨拶に来られた位。詩情川柳でもあった。麻生路郎とは梅田の路上でも遇った。文学老年といった風貌で眼鏡越しのまなざしが優しかった。「おお俳人の三樹彦さんか」と言った案配。

川柳塔と番傘は、大阪での二枚看板。神戸も劣らずに川柳は盛ん。「ふあうすと」はその筆頭。そのかみ時実新子と窪田久美は並び立つての二大女流だった。岡山での女学校でも同級生けれど、久美は俳句に転じ、「青玄」同人になってくれた。一方の新子は花形作家の座を独占した。当時、「俳句界でもよろしく」と流した久美の涙顔は、今以って忘れぬ私だ。

さて川柳の味をスパイスに例えるなら、俳句はハーブだ。これが私の持論で、柳俳の相違を問われると必ず左様答えることにしている。

伊丹三樹彦

一九二〇年兵庫県伊丹市生れ。別号・写俳亭

現代俳句協会・元「青玄」主宰・青群俳句会顧問

句集「仏恋」「人中」「阿檀」「内外」「二気」「知見」

「統知見」「統統知見」「伊丹三樹彦全句集」他多数

写俳集「隣人ASIAN」「隣人有彩」「天竺五大」

「ナマステパリー」「ガンガの沐浴」他多数

誹風柳多留一二篇研究 22

小栗 清吾・細井 龍夫

伊吹 和男・山田 昭夫

石川 道子

清 博美

172 ばんどうががんのふしてと馬子はいり

小栗 よくわからない句であるが、

八文が吞内馬はたれて居る

三17

八文なげて口とりハおつかける

安七鶴 4

八文かのむ内五良のつてにげ

安八礼 12

の各句、及び、

ばんどうかくれさつしやいと馬つなぐ

幸々安元賦 2

の句から見、主題句の「坂東」は「魚屋・鮮屋・青物屋・駕舁等の符牒。八。八十。八百」(「江」)のことで、馬子が八文の安酒を飲む為に煮売店へ入る場面を詠んだ句ではないかと推測する。

ただ、「かんのう」が分らない。柳雨「風俗志」には「満足するの意」と頭注がある。

「堪能」を宛てられたかと思うが、句意今一判然としない。かなり苦しいが、「八文分の酒を充分堪能していこう」と馬子がいながら入っていくというような事か。

細井 というようなことか。「風俗志」には「八文」が一番安い一合八文の酒としています。

八文かのミ〜根はり葉はりき、

明六礼 5

八文ハみそを片手へうけてのみ

四26

山田 感応という仏語があります。読みは「かんおう」ですから少し気になります。が、「信心の誠が神仏を通じて、加護・効験の実があること」(「角川古語」)。

主題句は、板東三十三観音に願が通じて、八文がとこ手に入った。だからそれで一バヤやろうと煮売店へ入って行った、と解し

てみました。もとより駄旁解です。清 礎稿のようなことか。山田説の「かんおう」は、発音上ちと苦しいか。

173 蜆を式舁みんなにてもてあまし

小栗 そのままの句であろう。蜆を二升買、それを一度に全部煮てしまったのだが、とても食いきれずに持て余しているというのだらう。蜆は小さい貝だから、中身のポリウム自体は大したことではないが、いちいち貝を開いて食べるのは面倒くさいことこの上ない。

蜆汁口を吸ってハ菌てくじり

一四九 3

山田 賛。ただ二升も煮たというのは薬用のためだと思えます。蜆は昔から黄痘の特効薬とされています。

こんじきの男蜆に喰ひあきる

六 2

清 礎賛。この際山田説は考えすぎ、量の多さを持て余しているだけのことかと思う。粒小ささで分量を誤解したか。

174 身じまいをけころでんとへ向イテする

小栗 身仕舞いは、身拵に同じ。芸娼妓が客席へ出るために化粧すること(「江」)。

出所は、公衆の見る所。人中。往来（江）。
蹴転は、下谷・浅草その他諸所にいた売春婦。木綿物に前垂をかけ、一軒に二、三人ずつ置き一交二百文、泊まりを取らず（江）。

蹴転のような下級の売春宿では、表の通りからよく見える店先で、髪を結ったり化粧をしていたのであろう。そこが吉原と違って下品な所であり、安直な色気のある所でもある。

見世先きで袖かき合結って居る 一〇三
清 賛。

175 表紙をはねると松ばや半さへもん

小栗 表紙をめくるとそこに松葉屋半左衛門がいるということで、吉原細見の最初に有名な妓楼「松葉屋」が掲載されていることを詠んだ句。柳雨「吉原志」に採句されて、「江戸一の角にありて細見の第一頁に出ず」と頭注がある。もともと、物理的に表紙の次のページにあるわけではなく、手元の細見で見る限り、最初は「序」や「紋日」の記述、さらに吉原全体の地図などあつて、その後、に個別の妓楼の紹介があるのだが、松葉屋は江戸町一丁目の取っ付きにあるから、妓楼の部の最初に掲載されている。これを「表

紙を撥ねると」と表現したものでだろう。

清 賛。

176 ふるまいて行クのハちよきにかしこまり

小栗 「振る舞い」は「もてなし。饗応。招宴。」（日国）の意であるが、ここでは、招待されて吉原へ行く人のことで、言外に、遊び人ではなく吉原に不慣れな人を示唆している。従って、猪牙に乗ってもゆつたりとあぐらをかいたりせず、緊張してかしこまっているのである。

手をついて猪牙にのつてる恥かしさ

清 賛。 ちよきで小便千両も捨たやつ 一三三
一三二

177 身の上のかたむく迄の月を見る

小栗 身上は、身代。財産（江）。

吉原の月の紋日を仕舞ったために身上が傾いたというおなじみのパターン句であるが、百人一首「やすらはでねなまし物をさよ更けてかたぶくまでの月を見しかな」（赤染衛門）の文句取りが手柄。

月を二度しまつて内を闇にする 三四四

月にもて過きてかじちのさたと成り

清 賛。 一三三

178 惣しまひする事四ツ手かたでしり

小栗 惣仕舞は、惣場に同じ。一廓または一樓中の芸妓または娼妓の全員を揚げて遊興すること（江）。

吉原行き客を乗せた四つ手駕籠が、肩に掛かる重みでこの客は惣仕舞をする予定だと分かるという意。懐にずつしりと重い金子を持っているということなのだろう。

棒組やしつかりだなど三会目 傍一三二
清 賛。

179 下総につないだ馬のやかましさ

小栗 下総に相馬御所を作った平将門を詠んだもので、将門の家紋が「繫ぎ馬」とされていることを折り込んだ類句多数の一。

はなれ馬よりさわがしいつなぎ馬 一九一五
細井 賛。句解にはまったく関係ありませんが、岐阜県大垣市に将門の首を祭っている神社があります。

清 賛。

愛染帖

新家 完司選

(投句 276名)

大洲市 花岡 順子

雪深く高倉健のいた世界

(評)己に厳しく寡黙で誠実。男の中の男を演じ切った健さん。実像もそのようであったという。「いた」という過去形が寂しい。

大阪市 田浦 實

輪になつて鞠を蹴り合う和の日本

(評)サッカーのように激しく闘うのではない。輪になつてたおやかに楽しむ蹴鞠。優雅な伝統である「和」を忘れかけている。

横浜市 菊地 政勝

風邪ひいた妻にこまごま指示される

(評)「うるさいな、子供じゃないから、心配するな」と言いたいのが、奥さまでないとは分らないことが多々あるのは否めない。

三田市 久保田千代

自己採点どんどん甘くなつてくる

(評)「己に厳しく他人に優しく」が人としてあるべき姿だが、もう充分厳しくしてきた。そろそろ甘くしても良いのではないか。

堺市 村上 玄也

大阪弁ひとときわでかいオノマトヘ

(評)擬音語と擬態語に身振り手振りを加えて「この道をバーツと行つて、ドンツキをキユツと左に折れたらドドンとハルカス」。

河内長野市 山岡富美子

レースから降りているのになぜ走る

(評)もう他人と競争するのは卒業した、マイペースでマイウエイを楽しもう、と悟つたつもりだが、相変わらずバタバタしている。

枚方市 丹後屋 肇

マイカーで散歩場所まで乗りつける

(評)快適な散歩コースまで少し遠いこともあるが、ご近所は顔見知りが多く、「いちいち挨拶するのも面倒」という理由もある。

河内長野市 穂口 正子

幸福の階段途中こわれてた

(評)順調に歩んでいた「幸せへの階段」だが、予期せぬトラブルで立ち往生。山あり谷ありの人生。修復してまた歩き出そう。

米子市 生田 和之

もしおしめすればおしめの詩を詠む

(評)見上げた覚悟!だが、そのようになつたときに、なお創作欲を失わずにおられるかどうか? 今から不屈の闘志を養うべし。

和歌山県 森下よりこ

勝つて残つたわけではないが生きている

(評)級友の計報が続く昨今。競り合つて勝

ち進んできたわけではないが、いつの間にか「生き残り組」になつてしまった。

弘前市 高森 一吞

雪掘つて甘い人参柿の味

長岡京市 山田 葉子

満月を窓から入れて眠りつく

赤い実を食べたら歌が湧いて出る

大阪市 高杉 力

確定申告ボケのチェックに丁度良い

後続車増えて先頭落ち着かず

鳥取市 永原 昌鼓

あべこべに貼られて切手苦笑い

パトカーのあまり走らぬ街に住む

紀の川市 辻内 次根

寝入るまで歌ってくれる裕次郎

追突をしない車に乗り換える

豊中市 松尾美智代

映画館椅子に座ると眠くなる

太い足で歩いてるのによく転ける

貧乏な家にも詐欺のTELは来る

大阪市 奥村 五月

雄大な心はあるが空財布

晩酌は夫婦でセルフサービスで

岡山県 池田たか子

介護ロボハグしてくれる日も近い

「野風増」で孫の門出に花添える

堺市 澤井 敏治

青森市 守田 啓子
ほうれい線に冬が挿入されたまま

沖縄市 森山 文切
財布を開いても人が寄って来ぬ

佐賀県 真島久美子
故郷のように低反発枕

松山市 神野きつこ
カラオケの採点恨めしく思う

藤井寺市 鈴木いさお
音痴だと自覚出来れば軽症だ

鳥取県 斉尾くにこ
テーブルに聴かすさみしい自己弁護

堺市 加島 由一
暖かい部屋で見ている雪は好き

岡山県 田中 恵
雑草だ雑魚だと自虐やめとこう

北風がでんぐり返りして通る
うたた寝の味はだれにも譲れない

弘前市 三浦 柳三
年重ね亡父にそっくり喜べず

大雑把話し相手にちよどよい
横浜市 川島 良子

手の早い男 足の速い女
じつくりとキミを見つめる足の裏

米子市 竹村紀の治
自分のには頑張っているつもり

何ほどのことも無かった恵方巻

大阪市 藤原千恵子
恵方巻主婦の嬉しい味方です

河内長野市 渡邊 修
恵方巻かぶりついたら入れ歯ずれ

加西市 金川 宣子
海苔屋にも仕掛けられてる恵方巻

鳥取市 前田 楓花
砂はこり舞うから恋が育たない

神戸市 松井 文香
悔しさのグウの手ボツケ知っている

岡山県 紫 しめの
骨壺にあの日の乳菌入れてやる

あちこちを金継ぎにして夫婦です
明石市 梶谷 和郎

おのろけを聞いている犬が座を外す
女性車輛と気付いてからの長い刻

大阪市 平井美智子
しゃあないなやっぱりあんなたしかない

花冷えに保険の利かぬ針治療
岡山市 丹下 凱夫

リハビリが過ぎてコキコキ股関節
瓦せんべい囁むくらいなら大丈夫

富田林市 中村 恵
閉ざされた窓は空想掻き立てる

成り行きの恥ずかしがっている美談
弘前市 高瀬 霜石

生き恥をさらし日暮れりやワイイ酒
重大な事は晩酌前決める

弘前市 稲見 則彦
コップ酒愚痴を一気に流し込む

笠岡市 藤井 智史
引力のせいです酒がよく入る

岸和田市 雪本 珠子
少し酔い何時もと違いよく笑う

三田市 九村 義徳
二次会の盃本音あふれ出す

広島市 岸本 清
私から酒を挽いたら冬木立

和歌山市 平田 元三
咳きが教えだったか父の酒

三田市 福田 好文
北国の人も飲むかな雪見酒

鳥取県 竹信 照彦
傘持って飲み会へ行き持ち帰る

唐津市 岩崎 實
いつからかワインたしなむ妻となり

神戸市 能勢 利子
酒飲みは下戸の気持が分からない

海田市 小谷 小雪
辛党もケーキを食べる誕生日

シドニー 坂上のり子
英語力まあまあ分かる程度です

大阪市 藤田 武人
最下位があるからトップ目立つのだ

唐津市 仁部 四郎
校門に校長が立つ平和な日

貝塚市 吉道あかね
先に起き夫に部屋を温める

大阪市 江島谷勝弘
妻が起きるまでにごはん炊いておく

三田市 上田ひとみ
写真にはかなりはつきり歳が出る

神戸市 上田 和宏
日の光勇気元気を連れて来る

香芝市 大内 朝子
ドドンパのリズムで春がやって来る

鳥取市 西川 和子
春風にととう杖を買いました

三田市 北野 哲男
チンドン屋初めて見たというメール

八尾市 村上ミツ子
メキシコ産かぼちゃ八尾で食べている

堺市 奥 時雄
トイレのスリッパで出では叱られる

倉吉市 牧野 芳光
用はないけれど会いたい人がいる

大阪市 古今堂蕉子
長いことかかり不足の文帰る

三田市 堀 正和
目薬で明け 貼り薬で暮れる

橿原市 居谷真理子
銭湯をつぶした跡の狭い土地

松江市 三島 淞丘
引き算をしながら聞いている自慢

堺市 矢倉 五月
新聞の広告で読む週刊誌

鳥取市 吉田 弘子
三割引き少し恥じらうレジの前

堺市 大和 峯二
死ぬことを忘れた如く送る日々

河内長野市 谷 久美子
ランチして温泉はしごして湯冷め

和歌山市 古久保和子
たこ焼器連れて引つ越ししていた

豊橋市 藤田 千休
自分史のところどころに袋綴じ

大阪市 栃尾 奏子
幸せも夫もてのひらの中に

枚方市 伊達 郁夫
しみじみと今年も減っていく質状

大阪市 井丸 昌紀
今年またひとり削った住所録

箕面市 広島 巴子
万歩計付けて病院はしこする

西脇市 七反田順子
五千歩で保たれている健康度

枚方市 寺川 弘一
平凡の幸せわかるのは最後

米子市 後藤美恵子
若者に馬鹿の演技は難しい

三原市 鴨田 昭紀
儲かると言うから誰も信じない

京都市 高島 啓子
落ち込んでトルコ行進曲を聴く

富田林市 肥山 一文
包丁を研いでおいてと妻旅行

茨木市 藤井 正雄
童顔も髭面もいる草野球

鳥取市 奥田 由美
懐かしく夢から触れる母のシワ

和歌山市 磯部 義雄
鍋底の景気を知っている強み

宝塚市 田中 章子
豆まきの好きだった犬もういない

弘前市 福士 慕情
柳友がこんなにもいる星の数

宇部市 平田 実男
ゆつくりと日暮れを告げる寺の鐘

鳥取市 有沢せつ子
ああああで決まったペンの試し書き

瀬戸内市 東横ますみ
膏薬をベタベタ今日も慈なし

河内長野市 藤塚 克三
フラダンス腰の膏薬振れてる

弘前市 今 愁女
手みやげが欲しくて寄付するさと税

豊中市 水野 黒兎
人間の都合でいい雨わるい雨

八尾市 高杉 千歩
耳立てて聞いてもカタカナ語ばかり

池田市 上山 堅坊
年金を削ると景気落ちますよ

四条崎市 吉岡 修
次はきつとオリンピックの税だろう

八尾市 宮崎シマ子
チョコレート五つぐらいいは用意する

高槻市 富田 美義
川柳に織りなす模様わが叫び

札幌市 三浦 強一
五七五個人情報気にしない

唐津市 山口 高明
同志の名見ぬと寂しい投句欄

橿原市 安土 理恵
若い男の話はしない美容室

堺市 内藤 憲彦
横着な人多いから掃除ロボ

尼崎市 長浜 美龍
ふくらみも凹みも生きている証

尼崎市 春城 年代
生命線だけはくつきり私の掌

奈良市 岩本 浩二
猜疑心強く親しい友出来ぬ

羽曳野市 永田 章司
白黒を付けて作った敵味方

寝屋川市 平松かすみ
半数はマッサン観てる隣組

河内長野市 坂上 淳司
トマト嫌いを好きにしたのは貸農園

高槻市 松岡 重子
精一杯介護したから悔いはない

倉吉市 中村 毅
更新で頭の程度試される

大阪市 谷口 義
日傘くるくる昔は無口だった

尼崎市 市坪 武臣
芽の出ない僕には過ぎた妻が居る

つくば市 嶋本 喬
ドアマンが圭さんに似て妻はしゃぐ

奈良県 渡辺 富子
逃げていく若さ追いかけてつまずく

東かがわ市 川崎ひかり
悔しさをバネにするほど若くない

大阪市 坂 裕之
同窓会業の数を競う合う

芦屋市 黒田 能子
カラフルな平和な今を生きている

和歌山市 喜田 准一
夜半過ぎ妻の帰りを待つこたつ

鳥取県 石谷美恵子
ガラクタと一日対話して暮れる

羽曳野市 宇都宮ちづる
買い替えと免許返上せめぎ合い

奈良県 安福 和夫
聞き上手懐深く引き寄せる

米子市 中原 章子
流し難もうこの先はゴミになる

八王子市 川名 洋子
番犬のボチが尻尾を振りすぎる

大阪府 桑田ゆきの
迷い猫居付き我が家の福の神

枚方市 海老池 洋
出目金に君も暇かと覗かれる

鳥取市 春木圭一郎
誇りうる日本の良さは何だろう

大阪府 米澤 俣子
干し物にも順番がある主婦の知恵

奈良市 大久保眞澄
うたた寝のこたつ落語を聞きながら

小野市 藤原 泰宏
起き掛けの計報でこころ定まらず

海南市 堂上 泰女
元氣出せと寒の月から降るパワー

神戸市 奥澤洋次郎
苦笑いついとして出ている独り言

岡山市 永見 心咲
風邪引きが続き母の日が続く

鳥取市 夏目 一粋
ストレスが溜まりお風呂で文句いう

吹田市 木下 敏子
ひとり身を明るく包むスケジュール

枚方市 松原 保
鉛色好きになれない冬の空

防府市 坂本 加代
世のことが分かった頃にこの世去る

共選欄

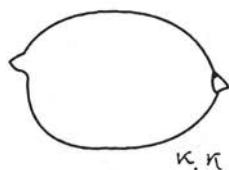
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 375名)



「学 校」 牧 野 芳 光 選

まだ無職まず大学は出たけれど
分校のたった二人へ読む送辞
手を抜いた生徒が出世頭です
名門をかくしているが見せもする
先生にめっぽう強いモンスター
廃校を知らずに降りた過疎の駅
早弁を食べて午後から腹空かし
学校で薙刀構え閉じた本
校庭は防空壕といも畠
教師冥利ガキ大将が囲む会
おめかしの母が眩しい参観日
国立に受かっただけで親孝行
同窓と聞いて話が弾み出す
先生のビンタに感謝忘れない
学校へ行くのに塾へ通ってる

塩竈市	木田比呂朗
宇部市	高山 清子
茨木市	島田 誠一
米子市	後藤 宏之
大阪市	坂 裕之
横浜市	菊地 政勝
大阪市	近藤 正
鳥取県	岩崎 和子
和歌山市	坂部紀久子
河内長野市	村上 直樹
札幌市	小沢 淳
四條畷市	吉岡 修
羽曳野市	藤原 大子
箕面市	寺井 柳童
堺 市	齋藤さくら

「学 校」 古 久 保 和 子 選

母の腕を料理学校出て越せず
学校で兄も弟も風邪もろた
メダカから開校式の通知来る
廃校の時計は九時を指したまま
同窓会鬼籍の友が座の主役
同窓会でんやわんやの国訛
教師冥利ガキ大将が囲む会
挨拶の種まいておく通学路
学校で私の根っこ作られた
学校と叫ぶノーベル平和賞
まだ遊ぶつもり留年すると言う
大学名レッテルにして職探し
初恋の第二ボタンは捨てられず
クラス会みんな昔の名で呼んで
新校舎ウォッシュレットも付きうらら

日置市	前田 洋子
京都市	都倉 求芽
岡山県	田中 恵
和泉市	横山 捷也
奈良市	岩本 浩二
河内長野市	木見谷孝代
河内長野市	村上 直樹
芦屋市	竹山千賀子
豊中市	松尾美智代
札幌市	三浦 強一
犬山市	金子美千代
大阪市	原田すみ子
加西市	金川 宣子
三田市	上田ひとみ
西宮市	亀岡 哲子

初恋の第二ボタンは捨てられず
同窓会鬼籍の友が座の主役
少年に還る廃校のブランコ
改築の校舎に知らぬふりをされ
体育祭フオークダンスに指も照れ
校門を出るとケータイ生き返る
学校で行儀作法が悪くなり
学校で羊家では王様だ
黒板が白板になり昭和往く
足腰を鍛えてくれた通学路
玉手箱持つて母校を訪れる
概まで母校の寄付が追ってくる
自分史に誇る夜学の星がある
変わらない景色を詰めている校歌
勉強は嫌いでも学校は好き
弱い子に駆込み寺の保健室
母さんに習う料理はまだ未完
当然の権利大卒まで齧る
転校でお国訛りのバイリンガー
手も口も出そうになって参観日
校長も我が子に悩む進学校
大学へ入ってからの遊び癖
学校で習わぬことはすぐ覚え

加西市 金川 宣子
奈良市 岩本 浩二
青森県 松山 芳生
豊中市 江見 見清
生駒市 飛永ふりこ
高槻市 原 洋志
大阪市 井丸 昌紀
米子市 竹村紀の治
大阪市 内田志津子
橋本市 石田 隆彦
箕面市 広島 巴子
調布市 伊勢田 毅
鳥取市 中村 金祥
大阪市 升成 好
可児市 板山まみ子
豊橋市 藤田 千休
大阪市 平井美智子
大阪市 津守 柳伸
西宮市 福島 弘子
佐賀県 真島久美子
鳥取県 松川 行男
八尾市 宮崎シマ子
鳥取市 谷口回春子

給食と自習時間にある出番
いじめっ子昔もいたよ学校に
勉強は嫌いでも学校は好き
予備校はずつと首席で終えました
学校か家庭か採める子の躰
卒業をして学校が好きになる
学校のテストが今も夢に出る
校門をくぐった時は燃えていた
学校にこんなにもいる子供達
学校の大好きな子と嫌いな子
自分史に誇る夜学の星がある
先生に一目置いていた昭和
当然の権利大卒まで齧る
学校の中で迷子になっている
学校が教育現場らしくない
母校跡お菓子のような家が建つ
学校の廊下で初恋と出会う
教室に格差の影のびている
軸足を予備校に置く受験前
マドンナと言う人のいた女学校
改築の校舎に知らぬふりをされ
学校を避難所にする街に住む
一張羅の母を見付けた参観日

西宮市 足立 茂
三次市 伊藤 寿子
可児市 板山まみ子
奈良市 大久保真澄
弘前市 福士 慕情
豊中市 水野 黒兎
高知市 小川てるみ
鳥取市 倉益 一瑤
尼崎市 春城 年代
芦屋市 黒田 能子
鳥取市 中村 金祥
神戸市 能勢 利子
大阪市 津守 柳伸
弘前市 高瀬 霜石
奈良県 安福 和夫
東かがわ市 川崎ひかり
枚方市 丹後屋 肇
神戸市 奥澤洋次郎
弘前市 今 愁女
西宮市 山本 義子
豊中市 江見 見清
三田市 北野 哲男
大阪市 平井美智子

木造の校舎いじめはしなかった

学校の給食は好きあと嫌い

女学校中学校と空財布

生きる術教えてくれた縄のれん

スクールバス子から道草を奪う

給食と自習時間にある出番

給食のほかは忘れた小学校

金次郎廃校知らず読書中

逆あがり出来ないままに中学へ

校庭にしゃがみあの日を僕を追う

春が来てチイチイパッパチイパッパ

学校のトップがビリに雇われる

学校の廊下で初恋と出合う

学校の中で迷子になっている

星のうた進学捨てた耕耘機

居眠りと一緒に学ぶ定時制

通学路ひとり帰さぬ道となる

校門が鉄格子になつていく

校門を出ると荒涼たる砂漠

秀 句

大学へもう神様に用はない

学校で習わぬことで食べている

卒業をして学校が好きになる

岡山県 池田たか子

米子市 中原 章子

倉吉市 山中 康子

池田市 上山 堅坊

西予市 黒田 茂代

西宮市 足立 茂

大阪市 板東 倫子

倉吉市 中村 毅

箕面市 酒井 紀華

羽曳野市 吉村久仁雄

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 喜田 准一

枚方市 丹後屋 肇

弘前市 高瀬 霜石

神戸市 山崎 武彦

三原市 鴨田 昭紀

八尾市 宮西 弥生

鳥取県 斉尾くにこ

京都市 高島 啓子

高槻市 松岡 重子

堺市 加島 由一

豊中市 水野 黒鬼

偏差値で輪切りにされる志望校

元学校元役場だと過疎の地図

先生にめっぽう強いモンスター

廃校のサクラ静かに咲いている

学校と社会は違う風が吹く

校庭へ西陽の伸びる逆上がり

少年に還る廃校のブランコ

放課後も子どもの匂い残される

手も口も出そうになつて参観日

ドーナツの穴のあたりに有る母校

校門を出ると荒涼たる砂漠

夢の中まだ跳箱をとんでいる

学校で習わぬことで食べている

学校はイチかけイチはイチと言う

放課後に学んだことが役に立ち

まだ夢に出る学校に叱られる

初恋の人は音楽室にいた

学校の壁には有罪の証拠

学校の怪談子らがなくなる

秀 句

宿題を置いてきました木の校舎

分校のたった二人へ読む送辞

学校で泣いた笑ったキユンとした

和歌山市 武本 碧

鳥取県 伊藤 寿美

大阪市 坂 裕之

岡山市 丹下 凱夫

大阪市 奥村 五月

奈良県 渡辺 富子

青森県 松山 芳生

海都市 小谷 小雪

佐賀県 真島久美子

岡山市 永見 心咲

京都市 高島 啓子

鳥取市 岸本 孝子

堺市 加島 由一

唐津市 仁部 四郎

尼崎市 藤井 宏造

出雲市 竹治ちかし

橿原市 居谷真理子

沖繩市 森山 文切

鳥取県 竹信 照彦

藤井寺市 太田扶美代

宇部市 高山 清子

弘前市 浅田 隆樹

「目立つ」

(投句 212名)

藤 岡 り こ 選



私こ一番前のまん中よ
ゲジゲジの眉がトレードマークです
目立つことないが真面目にマイベース
鬼の貌そんなに僕に似てますか
マタニティ双子なんです産み月で
目立たないあなたに何故か輪が出来る
同窓会あれはエステに通てるな
花束を引き立てているカスミ草
遅刻するおばちゃん何故かよく喋る
金髪の嫁が来ました一丁目
遠くから見ると目に目立つハルカス
苦勞人に目立つ豊かな人間味
その席はスポーツライトひとり占め
ゼスチャーが派手でいやでも目立つ奴
目立つときおごるサイフも持っている
家計簿に日毎かさんでゆく医療
砂かぶりいわくありげな派手な服
みじん切りされても目立っているピーマン
高齢が目立つ団地が暮れなすむ
キャンプではドラフト一位よく目立ち

西宮市	緒方美津子	堀籠市	木田比呂朗	羽曳野市	藤原 大子	西宮市	片山 忠	西脇市	七反田順子	大阪市	坂 裕之	堺市	矢倉 五月	奈良市	渡辺 富子	河内長野市	坂上 淳司	弘前市	吉川ひとし	堺市	奥 時雄	堺市	遠山 唯教	三田市	上田ひとみ	堺市	村上 玄也	長野県	丸山 健三	紀の川市	宇野 幹子	豊中市	水野 黒兎	岡山県	紫 しめの	米子市	生田 和之	三田市	堀 正和
-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	------	-----	-------	-----	------	----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	----	------	----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------

奉加帳目立つ達筆目立つ額
千年來村を守ったご神木
青空に一つ残った木守柿
ほころびが目立つふたりの赤い糸
出来ちゃってもう限界の披露宴
目立ちたいらしいチヨロチヨロよく動く
目立たぬがコーチは見抜く子の素質
あわてん坊女性専用気づかない
あつちにもこつちにも防犯カメラ
まっ白な日が珍しいカレンダー
あちこちに空き家が目立つ過疎の町
ライバルを置いてゴールのテープ切る

佳 句
どんぐりの中の一つがよく光る
祝日の日の丸目立つ二三軒
賛成の拍手は少し目立たせる
音楽会どうにもくしゃみとまらない
ちよつと目立ちちよつと叩かれたい陽気

人
幸せの黄色いハンカチがなびく
人目引く大看板の動く蟹

地
天
ありふれたシャツがきらいなカメレオン
軸
七色が集まってこそ目立つ虹

櫻原市	居谷真理子	唐津市	岩崎 實	大阪府	米澤 俣子	吹田市	木下 敏子	札幌市	三浦 強一	高槻市	片山かずお	大阪市	奥村 五月	姫路市	古川 奮水	弘前市	高瀬 霜石	河内長野市	大島 友子	紀の川市	楠原 富香	東大阪市	佐々木満作	松江市	三島 淞丘	唐津市	坂本 蜂朗	藤井寺市	太田扶美代	香芝市	大内 朝子	池田市	上山 堅坊	東大阪市	北村 賢子	三田市	北野 哲男	大阪府	柴本ばつは
-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------

「助 走」

(投句 208名)

坂 裕 之 選



雪の下春を感じて土動く

梅一輪春がゆつくり助走する

びよんびよんと助走してみるランドセル

大物かも知れぬぞこの子まだ助走

必勝の鉢巻き東大への助走

助走してハードル越えた志望校

受験生助走路の予備校を選ぶ

父さんの背中に助走路があった

助走などせんかて跳べる蛙の子

目的へ助走しているかたつむり

世渡りの助走居酒屋へと男

踏み切りが悪く助走が活かせない

明日へ翔ぶ夢見続けている助走

ジャンボ機の助走見ている三輪車

変身に勢いつけて試着室

油絵の助走ではない水彩画

優勝の祝辞の稽古もうしてる

終活に先ず断捨離の本を買う

狭い基地助走の要らぬオスプレイ

出世まで助走期間が長過ぎる

大阪市	柴本ばつは	大阪市	豊橋市	藤田	千休	唐津市	坂本	蜂朗	東大阪市	北村	賢子	貝塚市	石田ひろ子	茨木市	藤井	正雄	弘前市	高瀬	霜石	大阪市	大西	晴雄	和歌山市	松尾	和香	羽曳野市	徳山みつこ	大阪市	高杉	力	箕面市	出口セツ子	高槻市	富田	美義	富田林市	関	よしみ	シドニー	坂上のり子	河内長野市	松岡	篤	堺市	矢倉	五月	三田市	北野	哲男	和歌山市	喜田	准一
-----	-------	-----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	------	-------	-----	----	---	-----	-------	-----	----	----	------	---	-----	------	-------	-------	----	---	----	----	----	-----	----	----	------	----	----

まだ助走なかなか飛べぬ慎重派
うねうねと助走が続く迷い道

ライバルへやる気の助走見せておく

満を持し飛び立つ時を待つ助走

下積みでしつかり磨く芸の幅

入念な助走に結果ついてくる

大空を心に描き助走する

人生の助走時どき小休止

助走路の小石も拾う親の愛

損得がからむと助走などしない

リベンジを誓って助走繰り返す

体力を助走に使い果たす駄馬

佳 句

自己流の助走でこの世飛び越える

もう一度跳ばうしつかり助走して

プロポーズまでの助走が長すぎる

まずは誉めさあ悪口が始まるぞ

本番へ準備たつぷりして余裕

人

晩成と言われ未だに助走中

地

助走するまだ七十という若さ

天

本音待つ世間話に時間かけ

軸

目標に向けての助走手抜きなく

豊中市	池田	純子	神戸市	富永	恭子	松原市	森松まつお	和泉市	横山	捷也	堺市	内藤	憲彦	香芝市	大内	朝子	東京都	川本真理子	倉吉市	山中	康子	南あわじ市	萩原	狸月	鳥取市	夏目	一粋	富田林市	山野	寿之	奈良県	安福	和夫	三田市	福田	好文	高槻市	島田千鶴子	佐賀県	真島久美子	橿原市	居谷真理子	可児市	板山まみ子	大山市	金子美千代	長野県	丸山	健三	富田林市	肥山	一文
-----	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	----	----	-------	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	----	----	------	----	----

「パセリ」

(投句 208名)

石田隆彦 選



パセリです主を引き立て慎ましく
脇役で緑艶めく名はパセリ
さりげなく料理をパセリ引き立てる
ひそやかに自分を主張するパセリ
寄り添ってメインのお供するパセリ
無くていいパセリ一つで活きる皿
添え物のパセリが美人顔をする
最期まで客を眺めているパセリ
大皿にボツンとパセリ孤独感
カスミ草もパセリも共に裾模様
聞き役の位置でパセリがよく喋る
オムレツにのりたいたいなんていうパセリ
お飾りで終るパセリは僕好み
パセリまでべろりと食べる元気な子
子の手前引きつる頬で食うパセリ
万能とパセリのジュース日に三度
パセリ食べ孫は得意の顔をする
パセリの主張きいて残さず食べる
よく噛んでパセリの香り食べている
洋食後菜のようにパセリ噛む

弘前市	稲見 則彦
和歌山市	松尾 和香
鳥取市	春木圭一郎
可児市	板山まみ子
豊中市	池田 純子
シドニー	坂上のり子
高槻市	原 洋志
池田市	上山 堅坊
富田林市	山野 寿之
河内長野市	坂上 淳司
大和郡山市	坊農 柳弘
大阪市	柴本ばつは
和歌山市	磯部 義雄
堺市	木見谷孝代
河内長野市	澤井 敏治
堺市	木田比呂朗
塩竈市	藤原 大子
羽曳野市	村上ミツ子
八尾市	石原 歳子
三田市	福田 好文
三田市	

坪庭にパセリ年中欠かさない
いやだったパセリが好きになり大人
元氣出そうパセリのみどり光ってる
新婚の皿にパセリとミニトマト
パセリにも肉にもなると賢夫人
パセリ役演ずる妻に二重丸
僕パセリ君を輝かせるために
仲の好い夫婦に風味パセリの香
世渡りの智慧は別だとパセリ役
生涯をパセリの役の母でした
パセリとは私にあなたいる如く
彩りのパセリも減らす消費税

佳 句

お終いはパセリを食べて毒を消す
メインディッシュパセリの恩を忘れない
ああパセリ 己の才に気づかない
パセリ買い大人になったものと自負
パセリのようにピリッと居たい老いの位置

人

地

天

軸

和泉市	横山 捷也
宝塚市	田中 章子
鳥取市	岩崎 和子
橿原市	居谷真理子
河内長野市	黒岩 靖博
鳥取市	山下 凱柳
岡山市	紫 しめの
八尾市	山根 妙子
高槻市	富田 美義
堺市	矢倉 五月
大阪市	古今堂蕉子
犬山市	関本かつ子
倉吉市	山中 康子
貝塚市	石田ひろ子
弘前市	高瀬 霜石
東京都	川本真理子
大阪市	笠嶋 惠美
大阪府	初山 隆盛
紀の川市	宇野 幹子
茨木市	藤井 正雄

『麻生路郎読本』余滴 (28)

「矢車」と路郎作品 ⑩

楽原道夫

「矢車」三〇号（明治44年10月）で、筆者がチェックした句を挙げておく。

病むあさのこゝろ新聞紙の匂ひ 破魔杖
いそがしい意識！午後四時五時六時

三郎

客のなきピーヤホルの椅子に凭り 同

瓦斯の灯の青きに青き夢を見る 龍郎

夏を病む牛の如くに日は沈む 同

鐘の音に夏と秋とが離れゆく 由三

寝轉んで走らすベンの手暗がり 同

頬にたるるそれもうれしき洗ひ髪 同

とよ子

ひとり寝て蚊帳のにほひをなつかしむ 同

溜息を漏らしても今秋の鐘 五葉

生くべくはモツと確に物を言へ 同

蜘蛛の仕事にまたはげまざる男かな 同

荷十

青き山の寝さめにうれし旅の宿 同

路郎の巻頭作品「生」を挙げておく。

生

ピストルへ偶と手がゆきぬおもちゃ店

秋の沁む單衣の吾のいちらしや

限りある金を使ふも淋びしけれ

憂かりけり生へるにまかすうすら髭

八方きさへ來ぬ一日あり秋さびし

爲すなきにひがみ心のおぞましや

雨降りぬ一人の秋にふさはし

人形を抱いた心地で朝かへる

算盤も時計も忘れ生きてゆく

吾が噂氣にする君のいちらしや

秋深くさびし一日は一日より

ねるの衣十月の夜のあたたかみ

この号では、路郎が課題吟「雨の日の感覚」の選もしている。入選句を挙げておく。

着がへする單衣に雨の肌さはり 默葉

ほとほと物に倦みけり雨の日曜日 同

雨の日は倉でまゝ事した日あり 覺圓坊

雨垂れの音限りなく更けてゆく 由三

思はねど心は沈む秋雨に入る 五葉

さよならと云ふは淋しき語なりけり 同

雨上り朝の静寂の秋の音 同

雨の伊勢を二見も見ずに歸る秋 同

借金は何うせ此世の負債なり 同

「矢車」三一号は、明治44年11月20日に発行されたが、これが終刊号になってしまった。内容を記録しておく。奥付を含めて全17ページ。下の数字はページ数。

・弦の絶間に（一四句） 三輪破魔杖 2

・三の糸（一五句） 岸本 龍郎 3

・道頓堀川を見ながら 三太・五葉 4・5

「三太・五葉」とあるが、川上三太郎

の随筆

・原稿屋（二） 浅井林之助の随筆 5・6

・白蠟のまたたき（二五句） 麻生路郎 7

・闇へ闇へ 大橋醉月の随筆 8

・響（一四句） 浅井五葉 9

・別れては又（第二信） 眉愁生 10

川上三太郎の通信

・新しき日記帳より（二四句） 馬場由三 11

・氷囊の下より 病三生 12・14

・木村平文銭の随筆 15

・赤とんぼ（一四句） 森井荷十 16

・消息・寄贈雑誌の報告 17

・投稿規定・奥付 17

投稿規定を掲載しているので、三十一号発行時には、終刊を考えてはいなかったことがわかる。

「矢車」三十一号で、筆者がチェックした句を挙げておく。

人間になつたと思ふ秋の午後 破魔杖
戀せよと薄桃色の花が咲く 龍郎
青き蜜柑のするとき匂ひ午後の部屋 同
赤き影血の影細き長き影 五葉
存在を知つて不安な目を開き 同
秋の風何も語らず強く吹く 同
日記など思ひ立つ夜の秋の味 由三
書に更けし秋を冷たい手水鉢 同
なつかしや風になやめる赤とんぼ 荷十
一人あれば膝を抱へる男かな 同

水府の代表作の一つである〈戀せよと薄桃色の花が咲く〉は、「矢車」三十一号に発表されたものであった。「番傘」昭和33年9月号「水府自伝12」の「F・B・Nはにかみ屋の新聞記者生活」で、水府は、この句について次のように述べている。

B（筆者註—Beautyで、美人のこと）の

場合。美しいガールフレンドがほしかった。学生時代、女学生を一人知っていたが、友達の女のような気がしていたし、貯金局では、心をもやしていたあいてもあつたが、チャンスがなく話の出来る人は一人もいなかった。

おなじ九条の町にIという薬屋があつた。この姉妹は評判の九条小町とでもいわれるほど美しかったが、その当時という肩入れが多く出入して、気の弱い私はその表を通るのもはずかしく、もちまへの赤い顔になつてしまふのだつた。

母が風呂へ行くとその薬屋の姉妹のどちらかにあう。「背中を流してくれてお前によろしく」とつたぞ」と、意外な話をきいたこともあつた。築港へ涼みに行つた帰りの電車で、はでなゆかたの芸者に手を握られてボウとしてしまつたことがある。本意なく車中で別れてしまつて、あくる晩もそのあくる晩もなやましが続いたなど内気なハイティーンは、こうして日をすごして行くのだつた。*「戀せよとす桃いろの花が咲く」の句はこのころの作品だつた。

*「戀せよと」の句は、『定本 岸本水府

句集』（昭和33年1月）には、〈戀せよと薄桃色の花が咲く〉の表記で収録された。「矢車」三十一号に発表された〈三の糸切れし心地のキスのゆめ〉も『定本 岸本水府句集』に収録されている。

路郎作品「白蠟のまたたき」を挙げておく。

白蠟のまたたき
ふところ手荷造りをする庭に立つ
夕ぐれは残せし都思ひ出づ
淋しきに眼は伏し心眠る也
噛み棄てし反古にも己が血はこもる
三十二燭晩秋の夜を黙し居ぬ
黒光る足袋を悲しとみる男
蟲もなかず日本橋區の秋のくれ
眞青な影を踏む夜の銀座街
寂しけれ落葉の上に上に散る
腕を組む男に秋は逝きにけり
薄あかりさきゆく人の影淋し
ひとり寝の明日をおもへば腹が立つ
秋の葉が銅像の肩すべり落つ
白蠟のまたたき柿のひやかさ
果てしなく續く哀愁冬に入る

（次回に続く）

初音教室

題 — 真つ直ぐ

山口 光 久

去る2月16日、NHKテレビ19時30分からのクローズアップ現代の番組に川柳が取り上げられました。タイトルは「自虐?反骨?今を笑う現代川柳がブーム」です。

以前、NHK大阪の昼の番組で川柳が放映されましたが大阪エリアだけでした。民放でも川柳が紹介されたことがあります。だが、お笑い番組の中で面白可笑しく紹介され、文芸としての川柳とは程遠く狂句的なものでした。

今回の放映はいろんなところでの川柳を紹介しながら、サラリーマン川柳の選者、山藤章二氏を解説者に迎えての対談でした。山藤氏は、川柳は喜怒哀楽という様々な人間感情や笑いを詠むので皆さんの共感と呼んでいるのではないのでしょうか、と。

サラリーマン川柳は山藤章二氏と尾藤三柳氏が選者ですが、いろいろな意見があります。

初めの頃のサラリーマン川柳から

正論を吐かぬ聴かぬが出世道

棒グラフ伸ばしてくれた子の寝顔

【添削】

原 真つ直ぐに努力を重ねた七十年 英 男

中八になっていきます。下六になっていきます。

破調になるとリズムも悪くなります。

添 真つ直ぐに努力を重ね古希迎え

原 父の遺言真つ直ぐに生きて幸つかめ 紀美恵

あれやこれと言いたい事を一杯詰め込み過ぎました。リズムも悪くなりました。的を

絞りましょう。

添 真つ直ぐに生きよと父の遺言書

原 真つ直ぐに生きる苦さを骨が知る 和 宏

下五が適切かどうか、推敲しましょう。

添 真つ直ぐに生きる苦さを知る背中

原 青空を二分するかに飛行雲 (川)真理子

「飛行雲」でも想像はできますが、正しく「飛行機雲」としましょう。六音字になります

ので上句に持つてゆきましょう。

添 飛行機雲真つ青な空二分する

原 真つ直ぐにのびよのびよと天の声 (山)弘 子

リフレインの時は一つを漢字にしたら。

添 真つ直ぐに伸びよのびよと天の声

原 真つ直ぐな意見猫背になって聞く 道 子

添 真つ直ぐな意見を聞いている猫背

原 決定です秘密保護法不安つる マユミ

上五が冗句。下六です。ぶつんぶつんと切

れた感じでリズムも悪いです。

添 秘密保護法急に不安が付き纏う

原 へそまがり真つ直ぐ歩けがしない (山)久 子

添 へそまがり真つ直ぐ歩き怪我をする

原 歳重ね葉書の文字がダンスする 開 子

添 歳重ね葉書の文字はミミズ書き

原 真つ直ぐに歩む父持つ母強し ひろこ

添 真つ直ぐに歩む両親子は我慢

原 曲がる道真つ直ぐ走る事故の元 勝 治

添 カープした道を真つ直ぐ走り事故

原 真つ直ぐで眠くなります高速は 加 代

添 真つ直ぐな道で睡魔に襲われる

原 地図どおり真つ直ぐ行つたが迷い道 登 子

添 地図どおり真つ直ぐ行つて道迷う

原 決め球は直球勝負三振だ 忠 貞

添 決め球は直球勝負君の腕

原 真つ直ぐに生きた母の背教えられ 回春子

添 真つ直ぐな母の生き様教えられ 福貴子

原 真つ直ぐに前見て歩けスマホ族

添 注意して真つ直ぐ歩けスマホ族

原 もう一軒行きます真つ直ぐ歩けます 和香子

添 真つ直ぐに歩けますよと三次会

原真つ直ぐの運命線も皺まみれ まさる

添真つ直ぐの運命線を皺が邪魔

原真つ直ぐに育つ瞳に直と呼ぶ 律子

添真つ直ぐに育つ瞳を褒めそやす

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

添真つ直ぐに育つ瞳に直といはれ 由美

原君の顔浮かべ真つ直ぐ帰宅する 武人

添君の顔浮かび真つ直ぐ帰宅する

原何となく真つ直ぐ生きた古稀二人 洋一

添何となく真つ直ぐ生きた二人

原真つ直ぐに背筋伸ばして今日デート 治子

添真つ直ぐに背筋伸ばして今日デート

原身の丈で真つ直ぐ生きて小き幸 富恵子

添身の丈で真つ直ぐ生きて小き幸

【入選句】

真つ直ぐに歩み亡父の道たどる 蘭洋子

真つ直ぐに生きて余生を盛り 燭節子

立合いの気迫そのまま電車道 狸月

真つ直ぐな道もそこは水溜り 満知子

貯金なし真つ直ぐ生きてそれでよし 温子

真剣に勝負する時ストレート 泰宏

真つ直ぐに生きて腰が曲ります 国和

幼子の真つ直ぐな目に癒される 亜希子

真つすぐに育つた子らも大根も 昭枝

真つ直ぐなひとで嘘など隠せない 紀雄

九条の御蔭真つ直ぐ生きられる 心咲

真つ直ぐな穴が蓮根支えます 絹枝

真つ直ぐな黒髪好きとプロポーズ 和之

真つ直ぐな道を素直に歩きたい 川洋子

真つ直ぐな空へロケット尾を引いて 斎宏子

真つ直ぐに生きた亡父の声がする 天翔

真つ直ぐな道に思わぬ落とし穴 純子

卒寿の背真つ直ぐ伸ばしマイク持つ ミヨノ

真つ直ぐな気が招く四面楚歌 義雄

真つ直ぐに育てと添木親心 晶子

真つ直ぐな人言葉に影が無い 孔一

【佳句】

真つ直ぐに帰ると言って出たまま 修三

十八時真つ直ぐ帰る伝書鳩 ひとし

バス停まる真つ直ぐダッシュそれトイレ 喬

加減出来ず真つ直ぐ言ってきた溝のり子 安代

真つ直ぐの君の主張を持て余す

【今月の推せん句】

私の顔まっすぐ見てよねえあなた 山下 凱柳

何か疚しい事でもあったのですか。奥様に 限らず相手の顔は直視したいですね。

真つ直ぐにあなたの胸へ行つたのに 大前 安子

「のに」がいろいろと想像を膨らませてく れます。その先が早く知りたいと。

真つ直ぐに生きて時には四分休符 藤井 智史

人生、畏まって生きていると疲れます。時 には何処かで一休みが必要です。下五が効 いています。

【私の句】

真つ直ぐな性格いつも損ばかり

川柳塔鑑賞

同人吟 升成 好

— 3月号から

浮世とや劇中劇と思いたし

西口 いわゑ

人間の一生を「鍾乳石の一センチ」「星の一呼吸」などと、大自然に比べ何と儚いものかと詠んだ句はよくお目にかかるが、「劇中劇」という捉え方がユニークで斬新。切れ味がよい。

モノリザよりもっと分からぬ妻の笑み

福田 好文

モノリザの笑みはどこから見ても、自分を見ているように見える八方美人。しかし笑みの奥は読めず、百人百様の説がある。妻の笑みを素直に受けとっていいものか、いや大方は不気味なものと、身構えられるのでは。詠んでないところに情報がある穿ちの句。

再会を願う賀状も十年目

島田 千鶴子

久しく会わず、年賀状だけのやりとりだ

けの友人知人が年々増えている。十年も続けると、書いてあることが毎年同じの方も少なくない。私の例では五十年年賀状だけの学友が、今年こそ再会しようと、今年も書いて来た。

円熟に遠く作句のかたつむり

山本 希久子

「円熟に遠く」とはご謙遜であろう。下の「かたつむり」の表現が巧みで、作者は遅々として進まぬ身を嘆いておられるのであろうが、見方をかえればかたつむりほど黙々と苦節を乗り越え、わが道を行く姿は称賛に値するとも言える。完成度の高い佳句。

ネガティブに我慢するのは意に沿わず

木見谷 孝代

後期高齢者に仲間入りして久しいわが身にもはや我慢とか遠慮は願ひ下げたいもの。それより今を意の保に、わが保を言っ

て暮らしたいのが本音。

ポジティブな生き方万歳。

一瞬の閃きわたしには宝

栗田 久子

輝くとは持続的に強く光ること。閃くは瞬間的に光ることと思うが、常時輝いている人には閃きは無用。凡人の私には閃きが何とも待ち遠しい。この一瞬の爽快さ、醍醐味を求めて川柳に取組んでいるとも言え、まさに宝。

人間が古くて義理が欠かせない

遠山 唯教

国民学校に通ったわが世代にとり、対人関係として守るべきルール、礼儀の義理は、体の芯に染みついて離れない。いい歳をしていい加減義理にしばられない生き方を、頭では考えつくも、行動に結びつかない。この句、わが意を得たりとの感が深い。

絶好調何が来たって受けて立つ

原田 すみ子

年毎に老いの付く病がふえてくる昨今、この句は何とも羨ましい。健康であることが当り前だった昔の威勢はどこへやら現状との落差は大きい。この句に出合い大相撲

ファンの私には、連勝を重ねて行く白鵬関の雄姿が脳裏に浮かんだ。

春を待つ横顔羽化を匂わせて

栃尾 奏子

ご息女の近況を詠まれたものと、勝手に拝察するが、子を見守る母親の心情が何とも心温かく、春晴れのような一句。

根気良くほどくか切るか思案する

古今堂 蕉子

何でも手とり早く、ブツブツ切るかすぐ破る癖のある身に、ほどいたものか、いや切るものか、どうしたものか、一呼吸置くことを今後の教訓としたい。

気持ちよく好意受け取るのも礼儀

大川 桃花

褒め言葉や好意に、判で押したように謙遜することが礼儀のように身についた世代に、この句は気持ちよく素直に受け入れる姿勢に、すがすがしさを感じる。しかしこれも過ぎると嫌味になりかねないことを心して、これからは気持ちよく受けることとしたい。

栽培自然薯努力の跡がない

高島 啓子

自然薯は本来、山中で岩や石を避け乍ら、

曲がりくねったもの。

それに比べ畑で栽培された薯は、パイプの中でまっすぐ育てられている。

敢えて私見を述べると、曲がりくねった方がねばりが強く、味に深味があるように思える。作者は形だけでなく、この味も含めて努力の跡がないと見られたように思えたらならない。

無試験で得したような喜寿迎え

菊地 政勝

七十歳を越えた頃から、年毎に病気の数が増え、一つずつ歳を重ねることが、容易ではなくなってきた。作者はこの山を試験というハードルでとらえられたのがこの句。入院を三回もした年もある身に加齢はまさにハードル。ここに来て八十路というハードルの高さに直面している。作者がこの俤、無試験で米寿、白寿を迎えられるよう願ってやまない。

神の音楽奏で続ける那智の滝

黒田 茂代

注連縄を木にかけると神になるよう、滝に注連縄を渡すとこれまた神になる。那智の滝に縄を渡すニュースを毎年テレビで拝見するが、この句はこの景を鮮やかに切り

とったまな句。

手鏡を斜めに見ても歳はとし

西谷 悦子

手鏡を斜めに、また三面鏡を横から眺めて、若しかして若々しい自分が映るのではないか、という期待で鏡を当てて見るのも老いの一面か。何回見ても歳はとし、と区切りをつけられたことは思い切りよく深い。

無駄づかい出来ぬ余命もへそくりも

永原 昌鼓

余命をどういきいきと過すか大きなテーマである。趣味に生き、老いを寄せつけぬのも一案。いずれもゆめゆめ閑に出来ない。ハイタッチ敵も味方も好きになる

山岡 富美子

もう背伸びすることも無い土踏まず

木下 敏子

笑ったら小さな痛み消えていた

有沢 せつ子

プライドを捨てれば楽になれるそうだ

春木 圭一郎

丸腰が気楽でだあれも傷つけぬ

森山 盛桜

いずれも余生を無理せず、肩の力を抜いて生き抜くヒント。肝に銘じたい。

水煙抄鑑賞

— 3月号から

川崎 ひかり

オブラートで包む皮肉に気付かない

荒木 郁子

皮肉をオブラートに包む、まさに女性の得意技、でも気付かぬふりなどして居る相手の方が、一枚上かもね。

ごゆつくりなどとぬるーいお茶が出る

神野 千恵子

につこりと笑ってぬるーいお茶を出されたら、につこり笑い「どうもおおきに」と決して心の中は見せぬ様に……。

面白い夢かも知れぬ笑つてる

北原 昭枝

私も自分の笑い声でとび起きる事が泣くより笑う方が夢でも倅です。

寝たきりでないのがせて幸せだ

近藤 秋星

毎日を元気で過ごす事の出来る事に、感謝又感謝ですね。

老人と言われたくないまだ八十路

下田 茂登子

まだ八十路ですよ。これからこれから青春して過ごしましょう。茂登子さんの、生きる姿勢と青春に乾杯!!

大吉を毎日引いている不安

鴨田 昭紀

そうですね。引く度引く度に大吉だとか、気味悪いですよ。たまさかになる大吉だから喜び感じますもの。

煩惱を抱く生臭い手を洗う

中前 幸子

洗っても洗っても落ちない、それが煩惱なのでしょうね。生きているそれ自体が生臭いものではないか。

手の中に勝負の駒を持っている

神野 きつこ

勝負の一手に握りしめている駒。出すタイミングを計り、ピツシと、胸のすくような大きな声で、「王手」!!

隣とはつかず離れず踏みこまず

小松 紀子

そうなんです、お隣りと言えども、ずかずか入り込んではいけません。句の様なお付き合いが今の世相です。

いつの間にか税と福祉が分離する

嶋本 喬

あの約束どうなったのでしょうか? 今何処を通っても道路工事で通行止めばかり、又元のばらまき政策が……。

悲しい程二歳の君に恋してる

日置 みどり

切なくなりました。私も孫三人にメロメロです。初恋以上の愛しさに、この生命掛けても悔ない程恋してます。

呼ばれた犬孫とおなじ名前だわ

磯島 福貴子

孫の名前呼ぶと犬が走って来る。何んやねん。可愛い孫と同じ名前だなんて許せない。

何事も妻がルールの我が家です

九村 義徳

義徳さんのお家もそうですか? と言われる男性が多いと思いますよ。奥様が強いお家の方が円満ですよ。実は私の家もご多分にもれず……です。

叛くかも知れぬ火の種掌の中に

岡崎 美知江

バントヒットぐらいがたまにあるのです
吉道 あかね



追悼

土橋はるお君を悼む

土橋 螢

風評が流れる橋に立っている

お茶が出そうしばらく正座して待とう

ソチ五輪先ずは羽生に期待する

孫の手が痒いところを掻きに来る

無礼講にのんだお酒は旨かった

一月の中頃、鹿野温泉病院へ見舞に行った時はとても元気だった。しかし二月に入って肺癌が進行したのか、二月一日集落の報恩講の日に死去した。昭和七年生まれだから丁度八十歳を越えたところ。私の妹を妻として厳格な気性で男らしい存在だった。

川柳は大好きで昭和五十五年頃から日本海新聞に投句したりしていた。

みか月川柳会でも有名人で彼が居ないとみんなが淋しがつていた。

スイッチを入れたエンジンからない

まつ葉蟹一べん食べて飽きたとは

同窓会名簿に男僕だけか

盆栽に孫が靴下干している

スイッチが見当たらずに座り込む

本名土橋晴夫、法名釈至浄。葬儀は二月三日十二時出棺自宅葬。光輪寺住職伴奏浄徳寺住職によって執行された。晴天に恵まれ大勢の参会者に見送られて旅立って逝った。

平成二十六年四月号の投句が最後になりました。

これまでとてもお世話になりました。

助け合ってきた、いくつもの思い出を

大切に、先に旅立ったはるお君の分

も少しでも長生きをして、恩返しをした

と思っています。

地獄を通り過ぎる頃、三月中旬には

四十九日の法要とご案内をいただいでい

ますので、また思い出を語り合いたいと思

います。

先に極楽に入って待っていてください。

合掌



(投句192名)

インスピレーション・ナビ
も少しずつ皆様方の中に溶け
込んできたと感じています。
ここでは、どれだけ弾けて頂
いても結構ですので、いつも
とは違ったお顔を見せて下さ
い。では、今回も。

横原市 居谷真理子

痛いなあキーンと濁らない言葉

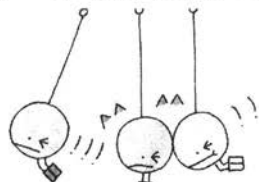
(評) あまりにもビュアな言葉は、時と
して胸に突き刺さることがあります。(濁
らない言葉)という表現に敬服。

篠山市 酒井 真由

わざとではないのよ風のいたずらよ

(評) 〈わざとではないのよ〉に、わざと
らしさを感じるのには穿ち過ぎでしょうか。
風にも気の毒なよう。

我儘が顔のぞかせて旅三日
大阪市 平井美智子



(評) 三日もよくネコを被っておられま
した。お互いさまでも思いますが、ここ
を乗り切れば長いお付き合いが出来そう。

河内長野市 坂上 淳司

四個目を吊るしてみたい研究者

(評) 成功も失敗も、その四個目にかかっ
ているようです。研究者たるもの、未知
の世界は魅力的ですものね。

神戸市 富永 恭子

みんな揺れるんだ確かめてるんだ

(評) こんな状況は自分だけ、と思っ
ていたことが実はそうではないと分
かった時の安心感。暗闇から光が射
したよう。

弘前市 肥後和香子

心地いい痛みは恋に似ています

(評) いくつかの恋を通り過ぎ、沈
の痛みも経験したからこそこの余
裕。恋によく似た痛みなど、今では貴重
品かも。

富田林市 古田 千華

ウエディングベル鳴り出した逃げたいよ

(評) マリッジブルー真つ只中の様子。
鳴り出したベルに観念するか、映画か何
かのように脱出するか、勇気の見せ場。

鳥取市 夏目 一粋

にんげんの新種やたらに発芽する

(評) 世代間のギャップを埋めるのは大
変なこと。その新種はやたらと増え、こ

ちらの古い頭を笑っているような。

和歌山市 平田 元三

雨だれのリズムに合わせ踊る指

(評) 軽快な雨だれの音にピアノの鍵盤
でも叩くように踊りだす指、その指に呼
応して心もやがて弾みだします。

堺市 矢倉 五月

抜けがけは無し堂々と勝負だぜ

(評) こつそりと準備したり、黙って誰
かに会いに行ったりは許しません。今あ
るがままに勝敗を決めましょう。

和歌山市 楠見 章子

時計屋の時刻はどれが定かやら

海都市 三宅 保州

言うなれば日中韓の相関図

生駒市 飛永ふりこ

ごつつんこ文殊の智慧もまともらぬ

佐賀県 真島久美子

真ん中は痛いのですか春ですか

堺市 遠山 唯教

人事異動うわさ話が往き来する

神戸市 能勢 利子

困ったな二人に好きと言われても

四條畷市 吉岡 修

口出しはするが頼りにならぬ人

先祖代々ばくにもドン・キホーテの血
弘前市 高瀬 霜石

河内長野市 松岡 篤

春うらら夫婦喧嘩のとはつちり

和歌山市 古久保和子
アンテナが錆びないうちに旅に出る

河内長野市 藤塚 克三
理系女らが振り子の原理テスト中

米子市 生田 和之
それぞれの立場も判る苦情処理

芦屋市 竹山千賀子
音程がずれて仲間に戻れない

奈良市 岩本 浩二
惚れた娘に嫌われ嫌な娘に好かれ

弘前市 稲見 則彦
右脳から左脳へ走るこの刺激

藤井寺市 太田扶美代
夕焼小焼がブランコはまだ揺れている

吹田市 山本希久子
逃げ切れぬこの世笑って許そうか

大阪市 柴本ばつは
さまざまなんてこの次君なんだ

鳥取市 岸本 宏章
バラバラの野党再編など無理だ

西宮市 緒方美津子
クラス会けんかした事なつかしく

松江市 相見 柳歩
試練かもしれず快感かもしれず

三田市 尾崎 一子
揉め事の張本人は知らん振り

高槻市 片山かずお
優先席からお退きなさいな若い方

長野県 丸山 健三
痛いなーあれは地球の埃だよ

札幌市 三浦 強一
原発へおしくら饅頭官と民

和歌山市 玉置 当代
どいてどいて宇宙のごみが体当たり

青森県 松山 芳生
調停の流れがらんとどのわたし

鳥取県 斉尾くにこ
大好きでちよつと菌形をつけました

大阪市 原田すみ子
痛み分け時に飲み込む苦い水

宝塚市 田中 章子
空中ブランコ愛と嫉妬がからみあう

藤井寺市 鴨谷瑠美子
どうしても選ぶとすれば左側

大山市 金子美千代
方舟に乗るのはワタシなの ゴメン

唐津市 仁部 四郎
二次予選彼にもチャンスあるはずだ

東大阪市 北村 賢子
いじめっ子きつと心は痛んでいる

富田林市 中井 アキ
捨てる神助ける神もおりますよ

弘前市 吉川ひとし
イスラムとガチンコ勝負できぬ国

枚方市 海老池 洋
じつとしておれば衝突ないものを

倉吉市 山中 康子
弱点を突かれ独りぼっちなんだ

高槻市 富田 美義
窓際で次のチャンスの奪い合い

神戸市 松井 文香
体当りして本心を知りました

鳥取市 有沢せつ子
相槌を打って空気をやわらげる

河内長野市 梶原 弘光
ゴム風船天まで届くのはどっち

出雲市 黒目 英男
風鈴もいろいろな音出している

可見市 板山まみ子
お互いに痛み分けあう仲間では

豊中市 藤井 則彦
煮え立つて具が弾み合うおでん鍋

玉野市 片岡 富子
限定品早く買わなきゃ後が無い

貝塚市 石田ひろ子
お迎えに転がるように出る園児

大阪市 太田としお
兄弟はきつと他人の始まりよ

鳥取市 山下 凱柳
団子三兄弟僕だ俺だと意地を張る

羽曳野市 徳山みつこ
花の下乱打している恋の鈴

6月号発表
(4月15日締切)



柳箋に2句

民族の詩歌 (34)

いのち 生命のうた ③

三好 專平

平成8年(1996)「らい予防法」が廃止された。明治40年(1904)に発効して以来およそ90年ぶりである。これで、日本における「隔離政策」は終わったかに見える。しかし、実態は必ずしもそうではない。

以下、『ハンセン病文学全集』より、各時代の川柳を紹介しよう。

多くの句会が開かれ、句集もたくさん出されている。全集には全部で約5000句収録。1934年プロミンができて、完治するようになる。

・1940～1960

子の顔も忘れがちなる夢さびし
療養の銃後不自由さを忍び
忠魂碑ちっと見てゐる松葉杖

鬼外 怜月 無茶

故郷に全快を待つ母がある
娘の望み叶へて嬉し春の繭
病む身にも尚嗜みの引き眉毛
病みなれてギブスの上で句を拾い
小豆島見える視力を羨まれ
幸福になれよとおくる離縁状
嬉しさがこみあげてくる無菌室

一 祥
笑門 志賀夫 竹坊 不在 一門 昇

・1970～1980

バレットナイフで偽りの日を削る
白杖で雪の深さははかり春
堂々と生きる権利の毛虫這う
やどかりの命殻から抜け出せず
仰向けば子供が暮れた千羽鶴
川柳につながる友であたたかし
癒える日をひとり信じてくれた母
愛ひとつ確かな物にできぬまま
生きられるだけは生きたい義手義足
生きてゆく努力へ妻という味方
反骨のナイフも錆びて今は古稀
看護婦の年をマスクが若く見せ

明柳子 香歩 ゆきお 弘一 三郎 靖男 良輔 とき子 良吉 苔華 正人 紫春

・1990～2003

水色の夢を残して君遙か
月見えぬ月見楽しい杖仲間
南十字星眺めた友呼ぶ八月忌

みつ子 美佐夫 生門

天皇をまた神様にする気配
鎮魂の花火見上げる生き残り
唇で探る火傷の手の哀れ
この命素敵な出会い有り難う
夫逝つて黒子の役ももう終わり
セツ子

一郎 秋夫 明子 聖一

1984年から、中村哲医師が、ペシヤ
ワールで、バキスタン人やアフガン難民の
ハンセン病患者の治療を始めたことが報じ
られ、日本の患者にも大きな励ましになっ
ている。また、彼は、アフガニスタンの山
岳地帯の患者の治療も開始した。2000
年からは、早魃の多いアフガニスタンで灌
漑用の井戸掘りを始めたことはよく知られ
ている。

2001年9月に、「ハンセン病物語故者
追悼句会」が開かれた。その折の句を。

句と共に君の瞳も忘れまじ
石ころは転がったまま眠らされ
亡き人の勝訴を祝う声がする
戦争をしないと蠅が殺される
悪夢からまだ醒めきれぬ予防法
目を伏せて歩いたころの差別の目
哀しさは差別が差別生む社会

玲子 翠星 妙子 厚兵 翠星 明子 翠星



花に想う (1)

好きな花のアンケートをいくつか調べましたら、やはり桜が一番でした。桜の次には、「バラ」「チューリップ」「ひまわり」「コスモス」でした。桜以下はアンケートによって少し順位が入れ替わりますが、だいたいこれがベスト5です。

桜が日本人に好かれるのは、清楚な美しさに加えて、待ちかねた春の訪れを祝福するように、バツと一度に咲く見事さ。そして、その散り際の鮮やかさでしょう。

嵐去り雪止みやつと桜咲く

律義にも桜満開喜寿となる

桜満開煩惱活気取り戻す

職退いて駅の桜が美しい

ママチャリで公園梯子する花見

北国はまだまだ雪という花見

花びらを頭に一つ持ち帰る

冬の厳しさに耐えて、待ちかねて、やつと咲いてくれた桜。誰のための満開でもないのに、自分を祝ってくれているようであり、冬の間は眠っていた「煩惱」も活気づきます。

現役で忙しくしていた頃には花を愛でる余裕もなかったが、改めてゆっくり眺めると通っていた駅に見事な桜！

弁当やお酒を提げて仲間といっしょに、という本格的なお花見でなくても、近所の公園の桜を「ママチャリ」で見て回るだけでも楽しい。そして、「北国」の寒さを思い遣りながらの静かな花見。ふと気がつけば頭に花びら一つ。

桜咲く酒と肴は揃ってる

昼間から飲んでいいよと言つ桜

吊るされた句を肴にし花見酒

花見酒まさしく日本文化だな

花の下おひとりさまの缶ビール

酒好きの仏にのみす花見酒

「酒なくてなにが己の桜かな」は、落語「長屋の花見」の枕に出てくる川柳。飲兵衛にとっては「花より団子」であり「酒のない花見なんて」というところでしょう。

桜は咲いた酒も肴も揃っているとなれば、後はメンツを揃えるだけ。普段は控えている昼の酒も今日は特別。短冊の川柳を眺めながらのチョイと一杯は、まさに日本の文化。仏さんに花見酒を供えた典子さんも仏になってしまわれた。

花の下ちよつと小遣い持ってます

花の下楽しむことは生きること

幸せをつくつく思ふ花の下

この中で誰が明日死ぬ花の山

見納めになるかも知れぬ桜見る

見納めと言つて十年花の下

素寒貧では花見も寂しい。自由に遣える金のある嬉しさ。満開の花の下をそぞろ歩けば身も心もウキウキ。生きるということは、まさに「この世を楽しむこと」なのでしょう。

満開の花は心を弾ませますが一抹の寂しさや命の儚さも思わせます。「見納めになるかも」と、センチメンタルになるのも桜の魔性。毎年そのように思いながら、とうとう十年も経ってしまった。この調子ならあと十年は大丈夫だろう。

加島 由一

竹村紀の治

井伊 東吉

村上ミツ子

三浦 強一

神夏磯典子

「酒なくてなにが己の桜かな」は、落語「長屋の花見」の枕に出てくる川柳。飲兵衛にとっては「花より団子」であり「酒のない花見なんて」というところでしょう。

桜は咲いた酒も肴も揃っているとなれば、後はメンツを揃えるだけ。普段は控えている昼の酒も今日は特別。短冊の川柳を眺めながらのチョイと一杯は、まさに日本の文化。仏さんに花見酒を供えた典子さんも仏になってしまわれた。

花の下ちよつと小遣い持ってます

花の下楽しむことは生きること

幸せをつくつく思ふ花の下

この中で誰が明日死ぬ花の山

見納めになるかも知れぬ桜見る

見納めと言つて十年花の下

素寒貧では花見も寂しい。自由に遣える金のある嬉しさ。満開の花の下をそぞろ歩けば身も心もウキウキ。生きるということは、まさに「この世を楽しむこと」なのでしょう。

満開の花は心を弾ませますが一抹の寂しさや命の儚さも思わせます。「見納めになるかも」と、センチメンタルになるのも桜の魔性。毎年そのように思いながら、とうとう十年も経ってしまった。この調子ならあと十年は大丈夫だろう。

本社 三月句会

◇三月五日(木)午後一時
アウイーナ大阪

啓蟄も過ぎた五日、三月句会は百二十一名(投句九名)の参加で開催。初出席は、田中ゆみ子さん(大阪市)小川賀世子さん(大東市)のお二人。句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、白根ふみさん(出雲市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は、西出楓楽さん。題は「笹本英子の生涯」。番傘同人の英子は、中流の農家に生まれ、商業学校を卒業後、住友へ就職、二十歳の時に大阪で川柳に出合う。

男なら酔うて忘れてしまうもの

二十七歳で島根の農家へ嫁入りしたが、農家の嫁は労働力と思われていた時代で、苦勞を重ねたらしい。

良縁と思つたこともなく老ける

英子には川柳を通じて人間を創るという信念があったと言われている。(まつお)

月間賞は、新家完司さん(鳥取市)

(司会)蕉子・善純(協取)奏子・勝弘

(受付)唯教・紀子(清記)勝弘

席題「零す」 河内 月子 選

ほろほろとこぼれる記憶拾えない
満ち足りてそれでもこぼす愚痴がある
味増汁をこぼす傘寿を笑えない
こぼれたいいえあなたがこぼしたの
愚痴こぼす あなたに不満ないけれど
零してもあかんぐらいは分かつてる
今日もまた笑みを零して陽が昇る
頑固者ついにクソッと笑ったな
愚痴を零す前に反省しましたか
こぼすので時折りよだれ掛けをする
嬉しくて乾盃の酒こぼしてる
ライバルが転けた思わず笑みこぼす
言い分けに妻はにんまり笑みこぼす
ホーホケキョ静から動へ春こぼれ
覚悟決め此処で生き抜くこぼれ種
二、三杯飲むと震える手が止まる
こぼすほど年金欲しい後期です
零さぬように口でお迎えるお酒
幸せの音がこぼれている寝息
こぼれ出す不満を聞いてくれる人
水もれのだんだん増えてきた老後
涙こぼす人もない程生きてやる
スタートを切れたら何も零すまい
こぼしても笑顔で拭いてます介護
煮こぼれはきつと私の灰汁だろう
脱輪をしてから風がたたかい

母こぼす飯粒父は拾う人
年齢を聞いて目こぼししてくれる
また今朝もご飯こぼして叱られた
瓶から口惜し涙がこぼれ落ち
父ちゃんに聞こえるように愚痴こぼす
人間をこぼしてみたくなる地球
やつちやつたカレー一滴染みになり
夫婦喧嘩いつでも妻に泣かされる
ごはんつぶ零すが酒は零さない
難聴の二人でぐちのこぼし合い
くすぐると本音をこぼすお人好し
佳
かぐや姫の涙をこぼす月の暈
父さんがここで煎餅食べはった
愚痴こぼす妻から逃げて屋台酒
呆けてきたらしい愚痴まで零さない
ポロポロと安倍内閣がこぼれだし
人
一円もこぼせぬ年金の家計
こぼしてもいいよまだ半分もある
地
菜の花が春をこぼしておりますの
軸
八十歳お茶コーヒートよくこぼす
兼題「具合」 堀 正和 選
懐の温かい日は日本晴れ
雅明

桃花
希久子
いさお
保州
修
洋
宣子
善純
完司
章子
則彦
朱夏
真理子
克己
靖鬼
勝弘
保州
ゆみ子
あや子

寒いのはふところ具合ですあなた
 母ちゃんのおとこ具合見てねだる
 不具合は仕方おまへんすく米寿
 不具合を見抜けなかつた子の命
 不具合の見えかくれるする都構想
 都合よく迷彩色にする政治
 不具合と言葉をかえた欠陥車
 さあどうぞいつもの具合ですく煮
 具合よく茶柱が立つ桜餅
 約束へいいあんばいに梅の咲き
 体調の具合知らせる酒の味
 最高のメークが出来たいぞ勝負
 会えません顔の具合が悪いので
 開け閉めの具合が悪い妻の口
 名句生む使い具合のよいペンだ
 ミディアムに焼いてください僕の骨
 すこし右そこそここの貼り具合
 食卓で入れ歯の具合聞かされる
 揺れ具合ウトウトさせるバスの旅
 唄う前マイクの具合確かめる
 猫の具合悪く句会を休みます
 今死ねば具合の悪いことがある
 具合よく出かける日には治る風邪
 都合良いとこに不思議な穴がある
 懐具合月の旅行はやんべする
 新婚さんどんな具合か覗かれる
 いい具合遅れたバスがやって来た

房子 走ったら上手い具合に来た列車
 ばっは 妻がいて具合の悪い電話切る
 哲男 不具合を並べる医者の誓約書
 あや子 「具合どう」保険掛けてる妻が聞く
 美津子 懐具合知って猫まで家出する
 富子 掃除ロボ鼻歌うたいいい具合
 光久 具合よくどっちにもとる京言葉
 修 きやりばみゆばみゆ三回言える日は元氣
 瑠美子 その他大勢いちいち具合など聞かず
 朝子 佳 三分咲き話の花は満開で
 俣子 穂の実り具合やきもきする案山子
 和夫 パソコンは急に拗ねたり黙ったり
 ゆみ子 具合よく飲み屋の前で雨になる
 完次 調子良く行きすぎるのも恐ろしい
 克己 人 調子良く行きたい
 隆彦 ある時払いなんて具合の良い言葉
 章子 地 具合良いことだけを聞く耳になる
 耕治 天 具合良いことだけを聞く耳になる
 あかね 子 子の具合声聞くだけでわかる母
 まつお 軸 子の具合声聞くだけでわかる母
 宏子 好 子の具合声聞くだけでわかる母
 扶美代 二日酔い具合が悪いとは言えず
 美智代 兼題「苦い」 太田扶美代 選
 蘭幸 兼題「苦い」 太田扶美代 選
 肇 兼題「苦い」 太田扶美代 選
 かずお 昔むかし薬はみんな苦かった
 美智子 苦みばしった男がもてていた昭和

弘光 思い出をほろ苦くする片想い
 六点 ライバルめ苦々しいな一歩先
 武彦 課長から苦言を浴びる棒グラフ
 茂 ビターチョコ恋はワインの底で待つ
 俣子 間違いを子に指摘され苦笑い
 たもつ 敗戦の苦い暮らしをばねにする
 文代 帳尻を合わせてからの苦い酒
 保州 まっ直ぐな苦言ストンと鳩尾に
 瑠美子 白黒をつけると苦い味がする
 味のあつた話案外苦いもの
 賀世子 血の絆ときには苦いこともある
 五月 反古にした約束口にまだ苦し
 完司 苦い酒承知である自暴自棄
 進 旗振りは苦手だからと隅にいる
 としお 苦言だと今の今まで思ってた
 千代 古希の恋ほんのり苦い片想い
 すみ子 真実も春の野草もほろ苦い
 言い分けの嘘を見抜いた苦笑い
 ビールが苦いそれがどうかしましたか
 コーヒーが苦い素直になりました
 肩甲骨あたりに止まっている苦手
 苦いのが効くのか薬みなニガイ
 福島の大地を語るふきのとう
 原因はわたくし父の苦い顔
 失恋に効くブラックを飲んで
 じいちゃん投資してるんかに苦笑い
 思い出の中には苦いものもある

雅明 克己 肇 寿之 裕之 克三 六点 賀世子 信子 アキ 楓 誠一 進 唯教 ダン吉 紀華 富美子 寿子 義 月子 義 靖鬼 はこべ 章子 紀乃 弘光 かずお

苦笑いもう半分は許してる
三年目今年は苦いチョコあげる
反抗期思い出すたびほろ苦い
二番手のチョコほろにがい味がする
淡も苦味も消えたいところが消えた
年月が苦い経験かくする
どうしました苦虫噛んだ様な顔
学問も遊びも渋皮を剥いて

能子
耕治
桃花
良子
蘭幸
信子
美智子
森子

フライパン持つとコックの顔になる
わが家はコックピットにでんと妻
母の味コンビニなんか負けられず
ふつくらとしてうまそうなコックさん
コック全開恋の予感の春風
聴診器愛のコックを打診する
相棒は少し雑だが名コック
妻の愚痴コック全開はとばしる
一流のコックと聞いておしいね
自負すれば和洋中華の迷コック
物忘れ脳のコックの締め忘れ
非常コック操作は妻の意のままに
給食の料理を運ぶチビコック
あら煮なら絶品ですよボクの腕
素材からこだわるミシュランのコック
コック長家に帰ればフロメシネル
定年後はコックの役と皿洗い
三世代胃袋満たす母の腕
コックには負けぬと妻の匙加減
好物は妻の肉じゃがコック長
妻病んで毎日三度コックする
シェフになる大志を抱いて皿洗い
水槽の海老と弾んでいるコック
虚と実の真ん中辺にあるコック
舌に保険かけてるらしいコック長
定年後妻の専属コックです
コックピットに命預けてフルムーン

あかね
和夫
日の出
真理子
柳弘
勝弘
堅坊
裕之
文代
黒兎
光久
シマ子
勝弘
満作
章子
則彦
すみ子
光久
五月
一文
いさお
瑠美子
富子
保州
まつお
茂

五つ星コックの腕を皿に盛る
コック全開バツと桜が咲きました
チョコ髭と帽子が売りのコック長
コック全開おとぎ話が流れ出す
ミシュランの星はコックの涙跡
コックにも客にもなつて一人者
お喋りのコック閉まらぬまま寝言

順子
希久子
茂
アキ
誠一
美智子
見清

苦い水飲んで賢くなりました
クレソンのほんのり苦い自己主張
嫌いとは言わず苦手を通してく
ほろ苦い忠告だったふきのとう
苦そうに飲んでいますが好きな酒

あかね
瑠美子
弘光
朱夏
美智代
勝弘

一流のコックと聞いておしいね
自負すれば和洋中華の迷コック
物忘れ脳のコックの締め忘れ
非常コック操作は妻の意のままに
給食の料理を運ぶチビコック
あら煮なら絶品ですよボクの腕
素材からこだわるミシュランのコック
コック長家に帰ればフロメシネル
定年後はコックの役と皿洗い
三世代胃袋満たす母の腕
コックには負けぬと妻の匙加減
好物は妻の肉じゃがコック長
妻病んで毎日三度コックする
シェフになる大志を抱いて皿洗い
水槽の海老と弾んでいるコック
虚と実の真ん中辺にあるコック
舌に保険かけてるらしいコック長
定年後妻の専属コックです
コックピットに命預けてフルムーン

あかね
和夫
日の出
真理子
柳弘
勝弘
堅坊
裕之
文代
黒兎
光久
シマ子
勝弘
満作
章子
則彦
すみ子
光久
五月
一文
いさお
瑠美子
富子
保州
まつお
茂

五つ星コックの腕を皿に盛る
コック全開バツと桜が咲きました
チョコ髭と帽子が売りのコック長
コック全開おとぎ話が流れ出す
ミシュランの星はコックの涙跡
コックにも客にもなつて一人者
お喋りのコック閉まらぬまま寝言

順子
希久子
茂
アキ
誠一
美智子
見清

七十年前の苦さを忘れてる
地
モノリザの微笑は苦笑かも知れぬ
天
ドロップの苦さやつぱり熱がある
軸
さよならは苦手泣き出しそうになる

勝弘
洋
わこ

一流のコックと聞いておしいね
自負すれば和洋中華の迷コック
物忘れ脳のコックの締め忘れ
非常コック操作は妻の意のままに
給食の料理を運ぶチビコック
あら煮なら絶品ですよボクの腕
素材からこだわるミシュランのコック
コック長家に帰ればフロメシネル
定年後はコックの役と皿洗い
三世代胃袋満たす母の腕
コックには負けぬと妻の匙加減
好物は妻の肉じゃがコック長
妻病んで毎日三度コックする
シェフになる大志を抱いて皿洗い
水槽の海老と弾んでいるコック
虚と実の真ん中辺にあるコック
舌に保険かけてるらしいコック長
定年後妻の専属コックです
コックピットに命預けてフルムーン

あかね
和夫
日の出
真理子
柳弘
勝弘
堅坊
裕之
文代
黒兎
光久
シマ子
勝弘
満作
章子
則彦
すみ子
光久
五月
一文
いさお
瑠美子
富子
保州
まつお
茂

五つ星コックの腕を皿に盛る
コック全開バツと桜が咲きました
チョコ髭と帽子が売りのコック長
コック全開おとぎ話が流れ出す
ミシュランの星はコックの涙跡
コックにも客にもなつて一人者
お喋りのコック閉まらぬまま寝言

順子
希久子
茂
アキ
誠一
美智子
見清

兼題 「コック」 池 森子 選

開花宣言春がコックを全開に
キッチンにはわが家のコックピットです
定年後家でコックをさせられる

富美子
楓楽
善純

あかね
和夫
日の出
真理子
柳弘
勝弘
堅坊
裕之
文代
黒兎
光久
シマ子
勝弘
満作
章子
則彦
すみ子
光久
五月
一文
いさお
瑠美子
富子
保州
まつお
茂

五つ星コックの腕を皿に盛る
コック全開バツと桜が咲きました
チョコ髭と帽子が売りのコック長
コック全開おとぎ話が流れ出す
ミシュランの星はコックの涙跡
コックにも客にもなつて一人者
お喋りのコック閉まらぬまま寝言

順子
希久子
茂
アキ
誠一
美智子
見清

兼題 「迷う」 村上 玄也 選

矢印が途中で消えてから迷路
決めてからまた迷つてる試着室
軍配に迷い許さぬ大相撲
人を責め自分を責めてなお迷う

准一
雅明
遠野
俣子

イェス・ノー決断迫る剣が峰

情報の樹海で迷いまだニート

迷い来た道にも轍出来ていた

胃袋はひとつメニユーが決まらない

雑踏を歩き迷いを捨ててくる

キュービッドが迷った跡のあるハート

好きで揺れ嫌いで揺れてまだ迷う

ぐっすり寝たら迷いもふっとんだ

お育ちがばれた紳士の迷い箸

あれ以来再婚ばなしちと迷う

懺られ自尊心が又迷う

茶柱が迷う出欠水をさす

助手席のナビに従い道迷う

爺さんに似合うかユニクロで迷う

保険満期息子に言おうかゆうまいか

迷わずに第一球はアウトロー

八十路まで恋のかけらが迷うてる

六道の辻で凡人迷ってる

喜寿にしてまっ赤なバラにまだ迷う

満腹になると迷いはさめていた

地下街で迷い地上で又迷う

蝶追って桃源郷に迷い込む

崖つ淵で迷ったことのある命

二十四時暮れぬ都会で迷うてる

ふたり居て花の迷路もまた愉し

迷うたび汗を流せと母の声

遺言書書いては破り夜もすがら

光久

直樹

満知子

朱夏

あかね

完次

舞夢

和夫

一步

正春

ふりこ

隆彦

耕治

桃花

英夫

義子

恭昌

宏子

楓楽

あや子

郁夫

哲子

たもつ

朱夏

ダン吉

誠一

思春期の樹海で恋を抱いている
ハヒフヘホのどれで笑うか迷ってる

真つ直ぐな道で迷ってばかりいる

眼鏡変えてみたけど迷い膨れ出す

迷子札娘がつけと押しつける

あちこちで手が鳴らされて迷う鬼

しぶちんで又迷ってる金のこと

佳

少々迷ってしまう増加減

言の葉がスマホの海へ迷い込む

散骨もいいし樹木葬もいいし

迷ったら性善説をとっている

度胸決めたららしい迷った目が据る

人

原点はなんだったのか風に問う

地

迷いから覚めて立ち位置やつと見え

天

迷いから覚めて矢印蒼く映え

軸

迷いから抜け出たところは黄泉の国

兼題「王者」 小島 蘭幸 選

エネルギーの王者ではない原子力

うちの王者おむつなかなか取れません

句を作る王者になって句を作る

逆転のトライ王者の底力

奏子

和夫

楓楽

わこ

一步

六点

月子

宣子

富子

いさお

唯教

靖鬼

ひとみ

安代

寿子

川柳界の王者たしかに其処彼処
冠を脱げばせつせと風呂洗い

金のなる木に水を忘れていた王者

チャンピオンの孤独を覗く昼の月

王者には少し憂いがない

王者さえいれ伏す母の深い愛

十字架を背負い荒野を行く王者

マラソンの王者に人生を学ぶ

内緒だが王者はやはり妻でいい

どんぐりの王者は友がたんと居る

表彰台の真ん中に立つ光ってる

猿山のボスにもひとつある矜持

王者にも家来にもなる妻と僕

王者の椅子何でも出来て孤独です

寝不足の王様楕円形になる

チャレンジャーの倍稽古するチャンピオン

たおやかに季節の中にいる王者

王様もわたしも独り闇のなか

訪日のプリンスに見る王の品

わたくしの王は私しか居ない

妻はカルタ僕はメンコのチャンピオン

王様は昨日あなたで今日わたし

居眠りの上手な母が王者です

君が代を聞くためにとる金メダル

王者でも時々悩む背の低さ

初孫にかしづく六人の従者

僅差でも涼しい顔をする王者

寿子

英夫

あかね

扶美代

たもつ

直樹

朱夏

紀乃

万紗子

朝子

完次

ひとみ

靖博

美智代

義

いさお

信子

紀華

妙子

富美子

眞澄

恵

日の出

宏造

正雄

淳司

弘光

王さまが唄うと哀しい歌になる
三代目まだ品格は備わらず

チャンピオンのとても悲しい物語

賢すぎる王様だった自滅した

日本は覇者になってはいけません

王さまは自分ひとりで動けない

佳

今はもう介護施設にいる王者

チャンピオンの敵は体重計だった

海底の武蔵王者のままの顔

影武者を五人雇っている王者

みんな王者でとてもうるさい酒場

人

貸農園40坪の王様だ

地

いい国だ王様までも野次飛ばす

天

二人しかないが二人とも王者

軸

レジェンドと呼ばれたことはない王者

.....

★3月号103頁中段21行目

あかんでえお札はコピー出来まへん

下段4行目

白い肌きつと秋田に違いない

の作者は太田としおさんでした。

お詫びして訂正します。

扶美代

アキ

ひとみ

真理子

勝弘

日の出

蕉子

保州

弥生

楓楽

完司

弘光

ダン吉

新家完司

天

句会 燦 燦

2月句会を読む

岩崎 眞里子

北国を思う作品達から可愛い春を買って、心はボツカボカ。

散歩から貰う宇宙のエネルギ

初散歩先ずは畑にこあいさつ

雪国を出てゆく敗北のかたち

野も山も浜も宇宙と呼応し、命達は元気を確認し合う。でも

雪国を出ると雪は溶ける。つまり敗北とは陽炎のことか？

三菱東京UFJ銀行

くだいわね逆さにするよ砂時計

それ以上いうと手毬は弾まない

くどくても平和は良いと言いつく

銀行名をそのまま句にしてしまう遊び心も凄いが、「くどい」

という題のパワーも凄いが、それを上回るひねり職人達のユーモ

アが、冬の句会を元気に温かくしているのだと納得した。

影法師どんどん僕の先を行く

どんどん忘れて今日も元気で

あかんでえお札はコピー出来まへん

先に行った影がちゃんと待っていた夕暮れ。そんなこと忘れ

ている今日の元気。でも忘れちゃいけないこともある。当たり

前確認のとしお作品は、たぶんこの世の大事な潤滑油！

魂が散歩たのしむ一行詩

誰にでも合やす物差し持っている

こんな風に老いたい人がいる句会

確かに創作は頭の中の散歩。そこに心も入れて魂が楽しむと

したのは深い。深い作品には、どんな人とも心触れ合える豊か

さがある。柳誌や句会はそのような作品に出会える場である。でも

句会には、会いたかった人達と出来たての笑みを交わす至福の

一時がある。そしてその中に、老いの匠も静かに御座します。

朝子

弘光

あきこ

保州

瑠美子

富美子

はこべ

柳弘

靖鬼

としお

堅坊

朱夏

楓楽

あきこ

保州

瑠美子

富美子

はこべ

柳弘

靖鬼

としお

堅坊

朱夏

楓楽

あきこ

おどろおどろ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

もう一枚欲しい師走のカレンダー
十二単脱いで身軽くなるこよみ
抽出しに敷く銀行のカレンダー
暦から学ぶ私の知恵袋
日めくりの日をカレンダー見て直す
衣裳替えとつても早いカレンダー
カレンダー埋め尽くして病んでいる
風紋のひと夜ひと夜にある悟り
身に合うた生き方悟る蟹の穴
ありのまま咲いて野菊にある悟り
飛んでみて悟る追い風向い風
寒風を悟って生きる数椿
限界をひそかに悟るベダル漕ぐ
半熟の子に悟られた腑甲斐無さ
限界を悟り切つて無理してる
飛び出した風船糸が付いていた
悟つたら風が迎えに来てくれる

武幸 義雄 俣子 絹子 義泰 起世子 碧
和子 ひろ子 純子 八重子 きく 菜摘 美枝子 美羽 次根

凡人です生あるうちは楽しもう
青春をタンスの奥に入れたまま
鍋底を黒焦げにした長電話
モノクロの記憶の中で母を恋う
喉元でいつたりきたりする名前
裏切りへ忘れた事にしてあげる
人は皆忘却という武器を持つ
幸せな時を忘れたすれ違い
前向きな風に忘れる古い傷
老人にど忘れという隠れ蓑
お互いに笑って話すもの忘れ
お母さんあなたの息子なのですよ
ケータイとメールほんとの顔がない
笑顔こそ誰もが持てる宝物
所帯主みたいな顔をてる猫
ゆつたりと笑顔で話す人が好き
風雪をお顔に刻む辻地蔵
看護師が笑顔で太い注射針

いずも川柳会(鳥根)

竹治ちかし報

あこがれたバラは素通りして行った
あこがれた空で迷った籠の鳥
頬杖の窓の向うの鳶の舞い
あこがれたままの姿で夢の中
あこがれて通った十代映画館
あこがれのままで終った好きな人
あこがれの恩師夕陽の中に住む
百歳の元気な人にあこがれる

弘子 智三 当子 幹子 章子 みね 彦弘 富香 昭枝 幸子 保州 宏夫 正治 千鶴 よしこ 昇 准一

あこがれの人に挑戦状を書く
夕暮は鍋もやかんも喋り出す
喋らせて置けば機嫌のいい八十路
一度だけ喋って三度返さるる
お喋りを黙って聞いているみかん
長電話あつという間に電池切れ
消費税一円玉がよく喋る
好奇心ギラギラしてた少年期
少年の瞳の奥に海がある
少年と紙飛行機で飛んでいる
孤独なのか少年スマホ離せない
腹一杯たべて少年夢はなす
少年の心覗けば飢えている
少年よキラキラ海は生きている
ポリシーと気楽が喧嘩するわたし
立たされた廊下で今日は参観日
それだけの事だ気楽に参加する
フオークより気楽に食べる箸が好き
気楽さを買われ毎日忙しい
お気軽に増税決める人がいる
あの日から気楽になったシャボン玉
気がねなく一人気ままな一軒家
さようなら気楽になった冬木立
米びつが満杯ならばそれでいい
日本を気楽に中国が跨ぐ
気楽さを裏返してるひとりぼち
生かされて気楽な余生ともいかず

浜丘 眞弓 昌枝 幸七 七美 寿美 熊四郎 テル子 健柳 美千代 蘭水 桂子 喜子 幸子 聖治 博子 志津 弘子 敬子 敬子 良子 歌子 たえこ 芳山 ひとみ ちかし

十人十色そのひと色に老いにけり
青空を見上げ大きく背伸びする
青空に抱かれて生きるあと少し
人の輪が恋しい句会前後です
健康はたからだ親のDNA
路地裏に義理・人情が干してある
あつあつのオコゲが好きな戦中派
豪快に笑った靴を履きちがい
絵手紙に三原色を遊ばせる

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

有頂天軸足までが宙に浮き
懸命に生きる自分をいとおしむ
引き潮になって本音が見えてくる
夫婦喧嘩の度にパトカー呼ぶでない
据え膳でこつおうさんをしてみたい
追われる身減速できる訳がない
一流校も無職の孫がいとおしい
もの言わぬ静かな寝顔いとおしい
軸足がさしみ決断せまられる
性能が良くてパトカー追い越した
軸足が踏ん張っている徳儀
いとおしい日々アルバムの中にある
水虫もしもやけも喜ぶ足湯
こつおうも三日続けば飽きが来る
耳の遠い人にも笑顔なら届く
パトカーに追われて逃げるのも勇氣

氏加子 小とみ 一湖 規子 一花 霜石 雅城 五楽庵 芳生 一粹報 洋々 無限 金祥 天翔 房江 静夫 善平 あしび 行男 重忠 みゆき 振作 回春子 美恵子 清信

軸足が崩れだしたか倦怠期
こつおうはないが愛情あふれてる
いとおしい君と暮らして銀婚だ
軸足がぶれてピントが定まらぬ
堕ちた偶像小保方氏にやあ騙された
半値でももうかる原価いくらなの
巡回のバトに無事故の夜が明け
パトカーも安心出来ぬ逆走車
パトカーに捕まらぬよう小路行く
パトカーのスピード違反捕らえない
軸足が揺れて歩行もままならず
軸足も極楽までは自信ない
軸足も赤い夕日に立ち止まる
軸足も段々細る物価高
軸足が何と通風とは誤算
五人の子育てた乳房いとおしい
いとおしむ隣りになった柿ひとつ
軸足で百円隠し後で取る
壁ドンをした軸足が定まらず
※「こつおう」は因幡方言でこちそうの意

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

プレッシャーわざわかけるインタビュ
学校が近くて遅刻ばかりする
学校のトイレ長いといじめられ
近道を見つけた時の安堵感
生え際に気になり出した白髪染め
改札に祖父母の顔で出迎える

凱柳 主一郎 隆浩 美佐枝 由美子 清流 とも湖 節子 茂登子 蟹郎 昌鼓 妻子 菖子 地佳平 茶人 雅女 孝二 克也 一粹

川柳塔なら 坊農 柳弘報

体力の衰え気持ちでカバーする
婚活で拝み倒され嫁に行く
朝刊の匂いを嗅いで行く始発
体調の整理我慢の休肝日
じわじわと老いが進んでいく暦
とんとんと話が進む飲み仲間
凶と出た七福神に拝んどこ
拝んでもあの一言は許せない
進むべき姿日本が揺れだした
始発には昨夜の恋がまだ匂う
一字ずつ拝んで書いている写経
同行二人始発駅から春になる
執刀医の後姿に命乞い
不始末へ片手拝みの後ずさり
進化論やがて仏になるヒト科
どっちにも転んでみせる自然体
拝んでも神は許さぬ罪の色
栄転と左遷涙の始発駅
沿線を起こして始発電車行く
人生双六まだ振り出しに戻される
始発駅まだ愛を待つ冬帽子
愛された記憶が残る薔薇の芯
拝むとこれば必ず拝んどく
拝むのにこたわりがある蟹気楼
後戻り出来ぬこの道を進む
強かに生きる女の草書体

おたか 盛隆 甚之市 次郎 郁夫 修 ふりこ 博一 萌子 将文 辰雄 紀子 貫一 比呂志 順啓 信仁 弥己 克己 恭昌 寿之 樹 勝弘 柳弘 いさお 梶子

終章の男にマーチ鳴り止まぬ
 鉛ちゃんを持って進めば敵は無い
 クラシック流れ天女になる五体
 体ごととび込む吾子を抱きしめる
 いききつて五体ゆだねる花びつぎ
 合掌の形で兄の長い旅
 縄文杉よ人は進化をしましたか
 終戦後赤いリンゴが始発駅
 御嶽の雪を拝んで春を待つ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

彫りが深いいえ皺が深いのです
 世界史の諸悪の根源皮膚の色
 肌みせて隙はみせない美女と飲む
 面の皮ますます厚くする化粧
 遊び駒今にむつくり起き上る
 明日へと今の歩幅を広くする
 トキメキの鼓動今では不整脈
 ぶり大根たつぷり煮込む今が旬
 悲しみは今も何処かで戦する
 競う気で五輪活気の出る地元
 ライバルの頭ひとつを競い合う
 刎頭の友と競うた棒グラフ
 人生レース横一列の新生児
 センス良い母娘で競うディナーショウ
 大自然の摂理と競ってはならぬ
 張り合つて家もハワイにフルムーン
 音立ててクイーンを競うカルタ会

完次 朝子 國治 理恵 成子 怜依子 良一 堅坊 恵美子 忠昭 博 実風 東風 弘泰 歌留多 更紗 ルイ子 タカ子 庸佑 シマ子 恭昌 なぎさ 祥昭 武臣 和雄

ほつこりの鍋に平和な小正月
 ほつこりの言葉の中にある急所
 足湯して人もほつこり話の輪
 回復の義母にほつこり三分粥
 公園のベンチほつこり梅を愛で
 いるだけでほつこりさせてくれた母
 片寄らぬメニエールを決める一人者
 狂信にアララが嘆く酷いテロ
 福豆の力信じて鬼は外

あさ子 篤 直子 弘子 克己 栄子 百合子 郁夫 国和 柳子 一歩 昌紀 志華子 紀乃 あや子 集一 とーな 楓楽 黒兎報 美智代 美佐子 守啓 郁子 堅坊 黒兎 春代 桂子

カラス鳴きいやな予感を打ち消して
 テロなくすアンパンマンよやって来い
 炬燵にはひつつき虫が住んでいる
 切り干しを作つて母の冬ごもり
 前向きの姿勢チャンスへ手がとどく
 テトラポッド海の機嫌を知っている
 末席で空気の色を読む無言
 目かくしを取れば亡母似の福笑い
 踏ん切りがついて自分をとり戻す

柳子 一歩 昌紀 志華子 紀乃 あや子 集一 とーな 楓楽 黒兎報 美智代 美佐子 守啓 郁子 堅坊 黒兎 春代 桂子

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

一番の謎は私がここに居る
 地球儀は謎と悲しみ抱いてます
 赤いバラなぜにそなたにトゲがある
 食事会噂バラ撒く主婦の口
 放射能撒き散らしてなお無罪
 豆を撒き鬼の気持ち思いやる
 福は内炬燵で寝てる鬼の面
 自由人しかし氣遣いしてる人

美智代 美佐子 守啓 郁子 堅坊 黒兎 春代 桂子

とことん依怙地かしわかんこともない
 陽気良ししかし翌日寒気来る
 発言にしかしやなあで身構える
 言い過ぎたしかし自分も欠陥者
 いいお国ですがあれこれ心配も
 着いたかなちよつと無理した義援金
 予算案あれもこれもと氣前よく

久子 信男 正子 長一 勝 正代 柳童

高知川柳社

小川てるみ報

困つちやうな物価も血圧もあがる
 断ち切れぬしがらみが引く後ろ髪
 遺産ゼロ地震竜巻火事豪雨
 死に金は困らぬように持っている
 輪番を吞まされてる役どころ
 困難は承知真冬の逆遍路

千鳥 陸宏 幸美 てるみ 美香 三郎

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

ふる里に心を残し帰る子等
 聴診器心の奥が見えますか
 傷ついた心を癒やす孫二人
 ふる里に心安らぐ友がいる
 「花は咲く」流れステッパ踏む結弦
 俺流を通すと寒い向い風

放任 はつ恵 よしみ いさむ 弘 ひかり

川柳ささやま(兵庫)

北澤

稠民報

お料理が上手で妻の鍋ひかる
 南向き春一番のふきのとう
 貧しいが愛を論じた頃がある

久子 かほる 哲男

横車押して世間を狭くする
お静かに走る凶器とならぬよう
私にも固有な名詞がある誇り

生かされてキャベツ大根刻む朝
万歩計あがぬ足に納得だ

柱時計三つが好きな時に鳴り

スポーツ界以外の疑惑出る
落下する滝の流れに身を預け

うっかりへ自問自答のくり返し

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

記念切手想いを濃ゆく送りたい
端と端繋いで丸く収めとく

告白はできたがしかしそれっきり
レシートが詳しい事情しゃべりだす

全国に友達がいる切手貼る

皮剥いてみれば詳しく分かる筈

ナビの指示理解できずに後戻り

詳しい切手何故かうれしい時に貼る

消印の切手に残る亡母の文字

カラフルな切手で届くアイラブユー

ロボットをあやつる人もロボットだ

錯覚の幅が大きい塩砂糖

チョコの甘さによっと錯覚してしまう

弟が兄の顔して先に逝く

裕福でないがそこそ幸せだ

多数決しかししかしが多すぎて

稠民 真由 勇

多美子 開子

可住 幸子

照代 美智子

茶子報

孔美子 和子

弘子 すみれ

小 盛 桜

咲和 鈴

実満 八重

美ツ千 蟹郎

照彦 幸代

蛭 茶子

みさ子

ちぐはぐな話錯覚されている
ドック受けレッドカードで不安な日
錯覚を桜の花を狂わせる

嘘でしよう持てない僕に來たメール
錯覚の平和に慣れて人質に

錯覚で拾って恋が花開く
駆け引きに詳しいテロにいたぶられ

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

シミとシワ増えて鏡がびびっている
アンパンを齧り泣き顔埋めている

顔が利く居場所小さくなっていく
どうしてる顔はみないがメールくる

背中が見せる本当の顔がある
湧き水を飲む旅人の顔をして

曖昧に半熟タマゴ動きたす
山の岩戸へ自動ドアを売りに行く

山動く面倒なこと避けながら
手足が動く今が旬だと跳んでいる

まけつづけ王手と言えて動くゆび
元気がいい朝日に呼ばれ跳ね起きる

ぼろぼろになっても動く母がいる
ウインドの前揺れ動くまだ女

梅咲いた明るさ何か動き出す
藍より青し松江のケイが宙を跳ぶ

青色は着こなせないが好きだな色
青くささ撒きまみしめて燃え上り

青二才と言われ嬉しい七十四

かおる 京 富久江

満 拓庵

恒 いさお

昌枝 青帆

畔 俊子

桂子 寿代

芳山 美智子

久枝 久絵

紗季 あきら

ちえこ 幸子

知恵子 草庵

ゆき 左余

弘充

青春がまだまだ続く年女
まだ尻が青いこの児が文句言う
赤信号青に変わって急ぐ足

ロボットのセールスマンに夢で会う
ロボットがアームを伸ばし恋撫む

ねじ切れのロボットになったふりする
ロボットにしては色気が有り過ぎる

干し大根春の芽生えに浮かれ出す
三歳のめばえ反抗くり返す

あなたからメールが届く気もそぞろ
新しい自分のめばえさらけだす

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

さざれ石最終章は苔がむす
悪業の果ての果てまで罪の嵩

残照に急かされ今日は嘘を吐く
古稀過ぎて苔むす脳に酒をやる

繁栄の経済のみは片手落ち
月の沙漠ラクダに武器は積まないで

孫曾孫DNAは下戸一途
真実を救う夕陽の無言劇

朱文字で柗目を埋める冬ひとひ
許すこと覚えた丸いまいる石

ありふれた型に嵌まれば一行詩
廃屋で苔が居場所を主張する

美しい仕業をひらり裏返す
晩学の空はとてつもなく広い

一言も言わずにぎゅっと素手と素手

聡美 哲子 幸 寛

静枝 柳歩

博子 幸代

輝山

清 壽峰

静子 一文

朋子 耀一

高鷺 常男

慶之 壽之

恵 安男

森子 かこ

欣之

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

励ましの嘘は一杯ついできた
 女房においこらお前いない時
 お互いさま水に流して仲間おり
 激戦も試合終われば仲間内
 はじめまして曾孫の写真抱きしめる
 命水口に含んで目が醒めた
 カモメが飛んだ噂話を持って行く
 老いらくの恋はしんしん狂わせる
 深読みはよそううれい嘘だから
 火がついて小さな嘘が肩こらす
 外国語習い介護の施設行く
 名水をたつぷり飲んだ日の調子
 明日へ飛ぶ思いの丈の思案橋
 水琴窟こころやんわり和らげる
 立春の明るさ珈琲たつぷりと
 雪しんしん湯豆腐笑う君という
 イスラムの鬼に撒きたい豆があり
 紙ヒコキ位のパワー持っている
 ビールより酔醒めの水身に沁みる
 雪解けに君への嘘が顔を出す
 千両が元氣赤赤冬の月
 嘘少し丸めて母の駅に着く
 驚草の空飛ぶ夢をみる蕾
 世は進み男でもする水仕事
 北風に負けじと老いの前かがみ
 言い訳の嘘をにこにこ聞いてます

健二 富夫 初音 りこ 里江 咲貴 幸香 柳明 和子 よしひさ 修平 雪菜 つな子 野鶴 ヨシエ 紀華 純 紀乃 五月 哲夫 千津子 晴美 靖鬼 かずお 宏造 耕治

便利さが次の不便を呼びさます
 ゲンコツを飛ばし脳味噌入れ換える
 たつぷりとあなたの嘘に酔っちゃった
 水臭い男だ黙って逝っちゃった
 話ときれ外は音無く雪つもる
 小さな嘘だ真面目な顔で聞いておく
 水やりも忘れられてる冬の花
 神様もお許しになる愛の嘘
 外は雪一本つけてメザシ焼く

はびきの市民川柳会(大阪) 永田 章司報

食べごろに肥えて隣家のコケコッコ
 玄関で鍋の匂いに冷氣飛ぶ
 眉うまかくけて一日吉となる
 心配いらぬ書いて父さん徘徊し
 貧富の差何が成長なんだろう
 春近し蠟梅冷氣をとおせんば
 行く先に冷氣感じるこの不安
 優しいと得する父の下がり眉
 増税で冷氣さしこむ懐に
 顔見あげ年金からのお年玉
 未熟児でも元氣いっぱい成長し
 戦争を知らない総理が音頭とる
 ロボットと暮らす未来に顔とる
 窓開けた途端に風が冬の朝
 自分の字後で読んだら読めません
 天敵は口の達者な小さな孫
 成長の度にこちらは老いてゆく

見清 奮水 ひとみ 正和 美龍 比ろ志 美也子 哲男 茂 光男 ちづる みつこ シルク ダン吉 洋一 雄太 喜久子 千鶴子 久仁子 フジ 敏 美喜 さくら かつ美 ヨシ枝 いさお

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

倅からハガキ卒業延びました
 盗まれた金に背筋が凍りつく
 眉をよみどんな嘘でも見ぬく妻
 寒牡丹冷氣の中に凛と咲く
 修験僧冷氣の峰を指す杖
 アベ総理に眉間の皺を見せに行く
 人の手で書かれた温い年賀状
 筑前煮どこかなつかし母の味
 目の動き証拠隠した指示を出す
 さわどいのは百も承知のバスタオル
 ひとり占めしたくてママの靴隠す
 郷愁は母の糠味噌茄子の色
 階段で膝がつぶやく明日は雨
 階段を登らず平は楽でした
 添うた日のうぶな白無垢角隠し
 余生の道はのはの照らす一行詩
 嬉しさを隠し切れない背が笑う
 またひとつ秘密がふえたクラス会
 さりげない一言妻のストライキ
 諷刺画と言えどきわどい花のバリ
 能もなく隠す爪なく生きて来た
 老人の勲章顔のしみ増える
 ライバルはまだ階段を駆け上がる
 仕事やと妻に隠れてキタミナミ
 良性とわかり帰宅の軽い足
 八十路すぎ近くて遠い二階部屋

六点 アヤ子 ひろすけ 泰子 高鷲 美代子 章司 正報 杓香 柳弘 公子 麗 北舟 勝弘 賢坊 堅子 朝子 直樹 満作 榮子 縣笹 和夫 満洲夫 公平

淳司

投票率が低くて民意届かない
 子羊が迷ったままの古希の人
 女房のあとを羊が歩いてる
 女房が先導役の八十路坂
 ラム肉をうめーと言って笑わせる
 年金のお蔭ほどほど暮らしてる
 ほどほどと恥じらう姫が大虎に
 階段をよいこらしよつとリズムカル
 ほどほどの夫婦蛙の子は蛙
 ほどほどの恋が出来ずに火傷する
 ほどほどに出来ず人生遠回り
 母さんに愛と涙を届けます
 ほどほどのところで止まれ体重計
 ウールよりヒートテックのシャツを着る
 ほどほどの辛を願って恵方巻
 ほどほどの叱り具合が難しい
 ほどほどの距離で事なし夫婦仲
 亡母達が耐えた昭和の暗い過去
 ほどほどの幸せ今朝のお味噌汁
 温泉に入りたそうな雪ダルマ
 ほどほどで止まらないのが恋と酒

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

弘光 光弘 正博 修 正美 篤 勝弘 富貴子 いさお 穂夫

傘貸して男の美学濡れて行く
 出しゃばりとリーダーシップは大違い
 理想論はいいからズボン穿きなさい
 承えて今が理想の時とする
 スープ冷めぬ所におきたい娘たち
 嫁がなくなつた途端に粗大ゴミ
 だんだんと笑わなくなる首相の顔
 足先が冷えた儘です理想論
 ミヨちゃんに男を見せた丸木橋
 雪国へ届け青空この陽射し
 子だくさん父は黙って酒を絶つ
 魂は売らぬ男の心意気
 いくさ嫌う僕の理想は青い空
 広いスーパ一男一匹溺れてる
 一言が男を上げた正念場
 あたりまえの事が明日も出来ている
 二番手につけて飛び出すタイミング
 出たとこ勝負逆立ちをする時もある
 いい味を出して主役を支えてる
 蚊帳火鉢父は上座に座つてた
 妻が逝く酸欠になる男はん
 助っ人は汗の匂いのする男
 祖母は理想母は目標今もそう
 多数決の声を聞かない基地移設
 オスブレイも基地もないこの空に
 限界を知つた男の悪足掻き
 安倍さんの強気発言不安から
 電話にはすぐ出るように仕込まれた

克己 忠昭 紅絵 信二 シマ子 茂 千代 廣子 たもつ すみ子 敏治 朝子 義泰 堅坊 ひろ子 恵美子 祥昭 紀乃 直子 とーな たかこ 哲男 信子 のぶ久 美智子 壽峰 康信 和雄

空澄んでいても帰れぬ被災の地
 理想論今はしつかり道になる
 川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報
 玉手箱開けてしまった人ばかり
 私の心こじ開け住み着いた
 窓開けてムシヤクシヤみんな放り出す
 胸襟を開ける葉は酒らしい
 窓いっぱい開け雑用を受け入れる
 北の窓開けつ放しで待っている
 開ける前から当選の赤いバラ
 開けこま言つても脳は居留守中
 心の窓開けて咲かせた愛の花
 黒い腹開けて六腑を入れ替える
 ドリル開けさびた頭をみがきます
 旅半は翼の手入れしておこう
 想像の翼広げる朝ドラマ
 キュービッド翼を広げ矢を放つ
 暖かい国へ翼で移住する
 もう一度飛びたい翼繕つて
 帰つてこー翼休めにふる里へ
 小休止翼にサロンパスを貼る
 好きですと広い翼で抱きつこう
 試着した翼で逢いに行つちやつた
 節食を気にしコトコト爪を煮る
 豆を煮るコトコト蓋が語りかけ
 コトコトと父にこにこと老人車
 コトコトと温い天井鼠寝る

隆昭 丹吉 完司 清 公恵 美知江 美ツ千 石花菜 紀の治 滋 龍枝 野蔭 陽之助 久江 義人 久芽代 道子 悦子 盛桜 紀美恵 くにこ 重利 貴恵 啓子 恭子

コトコトと訪ね来たよな青い鳥

美美子

コトコトとハートの鼓動美女がいる

幹啓

柱時計家の歴史を刻む音

みち子

過去帳を開き私の祖に出会う

耕治

湯豆腐をコトコトと煮る老い独り

重忠

雪女が深夜コトコト戸をたたたく

玲坊

コトコトがグツグツになり恋をする

芳光

この音はさなきが春を告げる音

三津子

コトコトと加齢を知らず音しきり

節子

豊中もくせい川柳会(大阪)江見

見清報

アンコールしそうにないと席を立ち

則彦

戸をどんどん叩き神様売りに来る

正明

逃げ水に母が揺れてる峠道

幹治

待ち人の気配につこりする鏡

肇

あと五分うとつが嬉し冬の朝

(若)玲子

カラカラと笑う鬼ならおともだち

とーな

玉虫もたぶん自分の色を持つ

歌留多

豆つぶで逃げるが勝ちとババの鬼

巴子

夫よりたぶん私が先に逝く

美智代

きれいだなあ恋の気配が顔に出る

紀華

七十年がつるとり巻き戻る気配

佳恵

冬の底押し開け覗くふきのとう

千鶴子

すぐ逃げてなかなか来ない春と秋

堅坊

春めいて五感活いき満ちて来る

ヨシエ

活花を一輪好きな人が来る

(永)玲子

残照の余韻の中で追う活字

雀舎

春頃に帰れる気配千羽鶴

美佐子

説明書読まずに使う家電品

健二

拉致問題逃げるが勝ちは通さない

武彦

人の流れ気にせず女立ち話

美津子

すんでのこと逃げて素知らぬ顔の猫

正彦

役当りそうで総会休みます

耕治

古里の気配感じる国訛り

比ろ志

イジメから逃げ少年の引き籠もり

美籠

たぶん浮気今日は根こそぎ掘り返す

蕉子

活力をもらおう街は春の色

久子

自浄作用あるのでしょうか空に問う

葉子

袈裟・白衣人に諭すに役に立ち

見清

ネコババを「記載もれ」だと片付ける

茂

活魚の運命知ってる回る寿司

靖鬼

ここの一番派手に鈴振る神だのみ

五月

立春の春の気配のない暦

千恵子

逃げ道にきれいな鬼がおりました

きらり

鍵穴に合う鍵になる人入社式

求芽

川柳塔わかやま吟社 川上

大輪報

五線紙が我流で脱線繰り返す

富美子

褒められて天狗になった我流文字

英子

丸い文字我流のまんま母の撒

徑子

生き方も我流ふり向くことはない

寿子

おばあちゃんいつも我流で治す風邪

紀久子

我流だが築いた家風恙無く

秀子

オレ流も結果残せて言えること

日出男

頂点を極めた自信ある我流

愿

ゆるキャラと頑固者との二重奏

まさみ

ゆるキャラで故郷再生狙ってる

ほのか

ゆるキャラのバイトに洩れてカップ麺

紀子

ゆるキャラのおなかは夢を詰めている

あかね

ゆるキャラがほんととは子ども大嫌い

ダン吉

くまモンを一度総理にしてみたい

大輪

ビフテキで釣ったアナタを飼っている

克子

ワンランク上の肉食う妻の留守

准一

肉声を閉ざして消えてゆく時代

あきこ

肉筆の賀状に友の心意気

よしこ

感謝して命いただく肉料理

和香

その手紙後で肉付けして出そう

なる子

浄土には旨いお肉はないだろう

小雪

京都塔の会

樹本

宏子報

先生が美人カオスになるクラス

弘之

養毛剤はちばちはえた気がしてる

弘子

無理してもいいけど無茶はいけません

則彦

クラス会つい気にかかるお召し物

保子

腹時計はちばちメニュー浮かびだす

みどり

手づくりの鯖寿司恋し母恋し

泰夫

宇治駅の自販機なのにおいしいお茶

求芽

夫婦茶碗は紆余曲折を知っている

英旺

手作りの野菜でつくる冬のナベ

悦子

親よりもつき合い長い同級生

満子

古傷を笑い合ってるクラス会

堅坊

鷹揚でそこはかと品ハイクラス

ふりこ

仏壇のメロンはちばち食べ頃か

朝子

はちばちと動けるうちは出かけます

りこ

初釜に作法知らずの飲みっぷり
鳶の子に有名校と無茶を言う

お茶代わりにと気配り嬉しコップ酒

歳分る安定感のクラス会

中流をアベノミクスがぶち壊す

手づくりじゃないと食べないから作る

昭和では当然だった母の寿し

お茶席で知った日本の美の心

表も裏も稀な手描きの年賀来る

うな重の松と暫く会ってない

はちぼちと歩けば似合う齡である

手づくりを五分で食べる無礼者

結論の見えないままお茶にする

風に揺ればちぼち老いてゆく八十路

昭和

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

老梅の一際赤い花を褒め

梅見よりぬくい炬燵に引っぱられ

梅漬けて女一人前の顔

おにぎり日本心梅が好き

孫と言うテロが突然来て騒ぐ

国境を越えて飛んでるテロリズム

テロ対策何かにつけて板ばさみ

甲のためこはいつでも割を食う

甲乙を決めかねみんな花丸に

甲と乙契約だけの間柄

甲のあと一歩とかぬ乙の愚痴

整形の顔は甲乙つけがたい

福子

五月

比ろ志

弥生

かお

啓子

宏子

忠子

牛延

公子

見清

文代

葉子

昭

昭

美代子

喜代子

悦子

雄太

六点

一文

武義

いさお

フジ子

キーキ

龍一

瑠美子

甲乙丙丁で戦地へ往かずすみ

甲と乙極めた技に隔てなし

甲乙つけず育てた子は宝

割り箸に大木だった自負がある

話し合うヒントを探すも人の業

70年平和刻んだすばらしさ

刻みつづ零れ落して行く記憶

刻む時しわを引き連れやってきた

胃袋に刻んだ飢えが離れない

再稼働許した人の名を刻む

山門にイニシャル刻み逃げてきた

時刻む父の形見の古時計

まわり道だらうか刻んできた月日

辛さを刻んだ皺と自惚れる

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

宏造報

隅っこでこそ看板つけ変える

究極の道具は両手水を飲む

合格を待っていましたが幼稚園

知らせ待つ携帯にらみ正座して

道具なくても要らない母の握りめし

寝つけない冷蔵庫での鉢合せ

亡母の歳越しで思案の道を行く

恋愛にも格差があると思ひ知る

ブーメラン着地はやはり妻の胸

こそこそと金婚の宴娘が企画

こそこそが捕まり巨悪逃げおおす

背を越され小言少なくなった母

シルク

絹枝

ヨシ枝

信二

彦弘

一步

光男

清之

みつこ

勝弘

まつお

雅枝

紅紫朗

扶美代

宏造報

千代

美津子

みよし

邦男

てる

弘子

りこ

一徳

千賀子

文香

浩司

利子

合格に赤飯炊いて祝う膳

峰の雲今日でおやじの年を越す

帰りぎわこそこそ母のあれやこれ

睦まじい歩幅もそろう老いふたり

飛び越えたつもりの溝で足の骨

新入学お道具箱に夢一杯

合格の通知にねむり深くなる

急坂を追い越す脚の美しさ

一夜越し命にすぎる血の絆

耳栓も七つ道具に入れてある

ウルトラマン救っておくれ人質を

国境を越すと平和が身にしみる

大丈夫君の選んだひとだもの

詰め襟のいが栗頭喜寿を越す

愛憎を越えて夫婦と言う絆

窓開けて春の息吹を風に聞く

水たまり一つ飛び越え青い空

五分粥を作ってくれた母恋し

福の神こそこそ出掛けそれつきり

歳月は流れるように喜寿傘寿

下宿さがしうれしいやらさびしやら

平熱を越すかも知れぬ本命チヨコ

喝采の裏で黒子の汗が飛び

喝采の裏で黒子の汗が飛び

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

言い訳は胸三寸に止どめとく

胸たたき爺にまかせと胸を張る

胸底にマグマ冷凍させてある

武臣

洋次郎

宏造

紀華

茂

恭子

歳子

直

順子

美籠

盛夫

勝弘

ひとみ

哲男

秋果

キヨミ

淑子

じろう

わこ

比ろ志

伯備

求芽

野鶴

重忠

蟹郎

一瑤

大人びた小学生に脱帽や

壊し屋はいつの時代も勇ましい

酔う程に最終電車が気にかかる

バラマキの外交裏目にでたイスラム

富柳会(大阪)

吉田 千華報

握手したその掌が寒すぎる

てのひらが母の温みを待って微熱

てのひらを返すわたしを裏返す

合掌を静かに流れゆく大河

てのひらに乘せても妻はタクト振る

見つめられクスツと笑う掌

言い訳の端々にある自尊心

首枷になる侮っていた端数

おもてなし時折亡母の貌が出る

振舞のところでに嫉糸

車内でのお化粧恥も塗っている

もてなされストンと落ちた意地ひとつ

振舞の酒なら下戸も二三杯

横恋慕までさせたのはでんぐ熱

盗み聞きニヤリと顔を置いてゆく

私の愛はあなたと猫と半分こ

雑草の生きねばならぬ根の強さ

長い根で繋がっている腐れ縁

どろどろの心沈めて上が澄む

風習に耐えた根っ子が頼もしい

盗み読む手紙のなかのゴビ砂漠

振舞の酒長幼の序が光る

かよこ

美濃

照月

司

千華報

登子

高鷲

慶子

よしみ

睦子

喜八郎

アキ

欣之

未知

寿之

早人

静子

いさお

淳司

安希子

シルク

澄子

七朗

恵

佳子

朱夏

清

モナリザの微笑指先まで優雅

端っこで昨日の僕を裏返す

手のひらで握っています過去未来

端っこを指でなぞっている手紙

生き上手中途半端を泳いでる

一行だけ暗記しておく維摩經

端と端結べば丸くなるものを

堅い胸たまには盗んでほしくなる

真白な大根恥じるものがない

ひもじくて盗んだパンに味が無い

根性悪虫を一匹飼っている

私を楽しくさせた酒五勺

下り坂命の端を握り締め

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

六畳の部屋に爆弾低気圧

飛行機もわたしも格安になった

取り敢えず蓋だけをして再稼働

マシマロの胸に突っ込む爆撃機

すっぽりとあなた私の福袋

空を飛ぶ夢が戦闘機になった

動けない物ぶら下げて生きている

命乞いするなら酒を控えなさい

日本は平和だから鶴が来る

時刻表通りにバスがやって来た

戦争もイジメも詐欺も皆ネット

一日中何も釣れない平和かな

ゴミの日もおよばれの日も勝手口

奏子

仁

千恵

武人

浩二

一筒

田鶴子

日木

かこ

廣子

満子

美代子

森子

盛桜

宣子

寿代

芳山

くにこ

照彦

石花菜

紀の治

芳光

大鯨

野蒜

蟹郎

麦青

新聞に汚されていく大人たち

がんばれよそとつぶやく福寿草

僕の力五割になって家平和

金柑を頬張ったまま不意の客

上向いて歩く影が悩むから

平凡が平凡でなくなる恐さ

グラマンに追われて逃げた橋の下

外国に命を捨てに行かないで

高齢者もそのうち減ってくる日本

晩酌はうまい布団はあたたかい

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

無防備に生きて年金だけ頼る

お休みと裸婦像に雪あたたかし

紅葉が行く道すがら鬱する

暗唱に擦り切れるまでテープ聴く

通販で都会と同じ服を買う

失言を拭き取ることは難しい

幸せを見落とさぬよう眼鏡拭く

悩むより行動すれば答え出る

選挙するお金あるなら被災地へ

経験の自慢話はうなずける

放哉の声が故里に風が吹く

木枯らしが懷までも吹きつける

食事会みんな持った食後菓

健さんを見送る黄色いハンカチで

良いことが起きそう朝に虹を見る

再稼動すんなり決めてほしくない

美ツ千

幹啓

雄大

けいこ

由紀子

風露

重忠

恒子

仁美

完司

陽子報

和之

陽子

水樹

信平衛

章子

みどり

美恵子

かずこ

澄子

三郎

みち子

由里

昭子

敦子

信子

嘉子

つらい時辛抱せずひとと休み

まあまあと人の事なら言えるけど

辛の字に一画加え辛となす

怒るほど独りぼっちになつてくる

木の家に住みアナログに生きている

殺人放火聞きなれて麻痺しそう

生かされて命を無駄に生きている

花咲けば憎い減反忘れ去り

武装して撃つのが同じ弱者とは

護憲派の菊のご紋が見えないか

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

もう時効すべてを許す事にする

大切な人だからこそ許せない

もう一度許してみよう友の嘘

一眠りすれば許せることばかり

許すこと覚えてからの人間味

許しているが言葉にならず重い朝

少し鬼少し仏で丁度いい

雑草だけど夢は大きく持つて

許されて今日のこの日を生きる

許すからとあの手この手はマズい

もう少し生きる背もたれある椅子で

許さねばわたし自身ががちがち

許されぬ罪はまとめてあの世まで

許さねばこれから先が見えてこぬ

老いて今自分許してばかりいる

薫 慶一

真 青

安 子

華 蓮

和 代

一 眸

菜 美

遊 子

公 弘

房 子

扶 美

昌 紀

久 仁

光 久

た も

加 お

美 智

蕉 子

美 龍

希 久

義 子

智 恵

み つ

楓 菜

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

父ちゃん河童に負けぬ名スイマー

ジム通い河童よこ目の大泳ぎ

河童からさそわれそうに頭はげ

どしゃ降りには河童と句でも練ることに

欠席の電話に咳も入れておく

お見舞へ御礼返しに風邪もらう

風邪熱かそれとも恋の熱かしら

まっとうに生きているから風邪を引く

鏡見て三高無理とランク下げ

少しだけハードル下げる娘の羨

フランスは和食に星を付けたがる

川柳のうでワンランク上げたいな

樟脳の薰着て行く一張羅

恩に着る口先だけで終るひと

若い娘はパンツの上にミニを穿く

普段着が居心地よいと母の汗

平和です四季それぞれを纏つて

衿を立て背中丸めて行く散歩

年一度不安を纏う検診着

沢山の色の草花春が好き

禅の行煩惱の炎ゆれやまず

ことわざをいろいろ使う母の知恵

いろいろうの心労越えた笑い皺

マッサンと言えば隣の飲んだくれ

平和主義積極的が敵つくる

予報士が昨日の嘘をあやまらぬ

光 久

健 二

俊 昭

美 智

ち あ

つ な

幸 香

忠

雅 尚

武 彦

廣 子

隆 見

勝 正

哲 男

順 子

ヨ シ

雅 司

宣 子

喜 久

一 子

章 子

キ ヨ

修 平

和 雄

好 文

お隣もそのお向いも年金者

パイパイのあとはひっそりお正月

多分また来ますと絵馬に書いてある

酒やめた体かいるが味気ない

余命わずか細った妻を抱きしめる

仕事着が一番似合う玉の汗

お見舞に座ブロン敷いたりんご買う

預かって下さい私の心を

もう卒寿昭和も遠くなりにつけり

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

幼児はママのスカートのにぎりしめ

婆ちゃんは上爺のところに逝きたいと

子に還る母を叱つて詫びている

視野狭い僕にキリンの首欲しい

信じると不安の影が聞き合い

鳴く犬を信じて裏の庭を掘る

いい笑顔ここからの愛信じよう

信じてるいつも一緒に悪い友

信じてると言うときキツとする夫

信じ合ひ軸のぶれない夫婦独楽

老いてなお選べぬ親の重荷負う

退院日ジョーク飛び出す友笑顔

人情の暖にはこり無人駅

ふところへ飛び込めますか寒椿

ふところの深さを決める妻の匙

ふところに故郷がある母がいる

ふところに恥じらいの文よれよれに

淑 子

耕 治

徹

富 夫

雄 太

美 龍

恭 子

ひと

正 和

照 子

盛 夫

武 彦

千 賀

弘 茂

妙 子

邦 子

利 子

文 香

加 寿

勤

洋 次

じ ろ

博 史

和 宏

洋 一

— 116 —

柳界展望

★平成26年度川柳塔わかやま吟社四賞

葵水賞 第一位

堀 富美子

どの子にも新品着せた
母の初春

課題吟賞 第一位

松尾 和香

敷布団母の言葉の硬い

まま

☆小島蘭幸主幹は3月11日(水)、NHK広島テレビ

「昼まえ直送便」に出演。

課題「春」の選句を披露。

中国5県に放映された。

尚、今後毎月一回出演の

予定。

☆木津川計先生は3月15日(日)、住吉大社吉祥殿に

於て、藤澤恒夫郎「西華山房」跡顕彰碑完成記念イベント「藤澤恒夫と住吉」と題して講演。

▽新誌友紹介△

岩国市

上村 夢香

紹介者

小島 蘭幸

岡山県

山縣 宣子

紹介者

新家 完司

交野市

田岡 久幸

紹介者

木本 朱夏

井原市

金原 敏子

紹介者

小島 蘭幸

▼計 報▲

■白根ふみさん(理事・米子市)は、2月13日逝

去。享年八十五。通夜告別式には、八木千代参与(代理)、林瑞枝参与(代理)、政岡日枝子理事、後藤宏之氏が参列。

▽お詫びして訂正△

3月号P92下段16行

目、防止→帽子。P102上

段最終行、くだいようで

すがそれから長い↓く

どいようですがとそれか

らも長い

常任理事会 3月5日(木)

①同人推薦文書および同人・誌友拡大策②第3回誌上大会報告③第21回川

新 同 人 紹 介

谷川 憲

— 玄也・誠一推薦

第12回 大野風柳賞作品募集

雑 詠 五句 (未発表作品)

審 査 大野 風柳

審査方法 選句は記名選とします

五句一組として総合力で賞を決めます

全員の入選句を発表誌に掲載します

表 彰 大野風柳賞 一名

(受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通費)

準 賞 三名 奨励賞 七名

締 切 4月25日 消印有効

参加費 1000円 (小為替)

(発表誌6月号希望者は500円加算のこと)

★投句用紙自由

★7月5日(日)の柳都全国大会席上にて表彰

投句先 〒956-8691 新津局私書箱15号

柳都川柳社 宛

第34年度 夜市川柳 課題と選者

	題	選 者	出句締切
第1回	駄 目	三宅 保州	6月20日
第2回	許 す	矢倉 五月	7月20日
第3回	断 る	鴨谷瑠美子	8月20日
第4回	ど じ	たむらあきこ	9月20日
第5回	半 端	井上 一簡	10月20日
第6回	壊 す	山本希久子	11月20日
第7回	焦 る	日野 愿	12月20日
第8回	嵌 る	長谷川博子	1月20日
第9回	嘆 く	天根 夢草	2月20日
第10回	外れる	岩田 明子	3月20日
第11回	手	高瀬 霜石	4月20日
第12回	嘘	小島 蘭幸	5月20日

ハガキに3句(投句料 1年分 3,000円)

投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2丁16-3

河内 天笑 宛

柳塔まつり④定例確認事 次回 4月7日(火) AM10時
項⑤各部報告事項

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 寝る・力・ストレート・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 吟 行 化粧・酔う・囁目吟	集 合 = 9時30分 南海電鉄「蛸地蔵駅前」 岸和田城とだんじり会館
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 当る・ぐいぐい・握手	弘前市桶屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦
川 柳 ねやがわ	19日(日) 13時締切 無料・運用・才能・自由吟	寝屋川市立産業振興センター 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 阿弥陀・美味しい・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0037 藤井寺市津堂1-7-25 太田扶美代
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時50分締切 ルーツ・抱く・脆い・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	21日(火) 13時30分締切 塾・サイズ・働く・ひらひら 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	25日(土) 14時15分締切 袖(連記)・厳しい・うきうき	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 柳 会	25日(土) 12時30分開場 しみじみ・カーテン・暮らし	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸柳会」宛
はびきの 市 民 会 川 柳	26日(日) 14時締切 一年生・肘・遅咲き・ブッシュ	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時30分開場 再稼働・シニア・うやむや	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 調子者・ローカル・丁寧・抱く	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(月) 14時締切 スパイス・ほそぼそ・限	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 14 時締切 咲く・面・限度	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 会 川 柳 会	4 日(土) 14 時締切 裏金・震える・どろどろ 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富 柳 会	4 日(土) 14 時10分締切 嘘・三日程・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	4 日(土) 14 時締切 うなずく・さっぱり・ギラギラ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま っ え 吟 社	4 日(土) 13 時45分締切 昼・野菜・窓・ジョーク	雑賀公民館 〒690-1223 松江市美穂関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川 柳 会	10 日(金) 14 時締切 知る・声・正直・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 さ か い	10 日(金) 13 時開場 かたい・出会い 折り句=せいど	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	11 日(土) 14 時締切 選ぶ・指・誤解	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4-11-6 山崎珠生
川 柳 塔 打 吹	11 日(土) 13 時締切 桜・育てる・めそめそ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	12 日(日) 14 時締切 怪訝・釘・赴く・雑詠	八尾市浜川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	12 日(日) 14 時10分締切 兼 題=国産・鼻・モデル 課題吟=学校	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	13 日(月) 14 時締切 大切・咎める・アドバイス 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子
ほたる 川 柳 同 好 会	14 日(火) 13 時30分締切 前・抜く・めでたい	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

編集後記

★花一杯友いっばい得意しい日 薫風

★平成一七年四月二四日に橘高薫風先生が逝かれて一〇年。入退院をくりかえされての人生であったが、先生にお聞きせねばならぬことはたくさんあった。まだ宿題を提出していないのに、出来る悪い生徒がひとり取り残されたという感じ。四月は心に花冷えの日がつづく。

★俳人の伊丹三樹彦先生も坪内稔典先生も薫風先生と交友がおりだった。その縁で川柳塔にご執筆頂いたことも……。今月は三樹彦先生がエッセイをお寄せくださった。先生はこの三月五日で九五歳を迎えられた。川柳に対する先生のあたたかい眼差しがうれしい。ますますのご健勝を

お祈りしたい。

★印象絵・インスピレーションナビがスタートして四カ月。最初の投句者は一〇〇名。先行きを案じていたが今号では一九〇名を越した。入選率の厳しさに投句をためらわれる方も多いと聞く。多読・多作・多捨という。ナビに限らず愛染帖・檸檬抄・一路集などにもご投句をお待ちしています。

★毎月、他社の柳誌や川柳塔傘下の会報誌がたくさん送られてくる。出雲市のいずも川柳会は創立八九年、「川柳いずも」の題字は麻生路郎。三月号のエッセイは川柳塔誌友の原煩悩児氏。「恥ずかしかな不勉強」と題して、川柳塔一二月号「西尾菜句抄」を採りあげている。

★「正弁丹吾父娘と見えぬ箸を割り」の正弁丹吾が理解できず、辞書を繰っても解らなかったというもの。「正弁丹吾とは

「けなげ組」を読んで

今年一月の川柳塔の編集後記を読み、「けなげ組（平本勝彦著）を是非、私にください」と編集部にお願いをして、本を頂きました。一生懸命自分なりにがんばっているのに、世の中では目立たず、注目されず、時には無視をされる、それでも、自分の役目はマジメに責任をもって果たしている、けなげな物（大根のつま、切手の裏、やせたら使ってもらえるベル

ひとこと

大阪の割烹の名で、織田大作之助の「夫婦善哉」でも取り上げられている」と会長であり、編集人の竹治ちかしさんが親切に解説をしている。つけ加えれば店の前には「行き暮れてここが思案の善哉かな」の碑が建っている。

（朱夏）

◇尊敬する先輩柳人から譲り受けた一冊の本がある。宝物のように大切に、何度も繰り返し読んでその本の名は、昭和

トの穴」等の、かわいいイラストにグチが書いていました。

「そういえば、そうだなあ。けなげ組がいなかったら、主役が引き立たないなあ」とけなげ組を思わず褒めたくまりました。楽しくて、考えさせられる本をありがとうございました。

毎月、楽しみに平本先生のイラストを見て、感性をフル回転させて、句を作っていきたいと思います。

（藤井 智史）

三十年発行の麻生路郎著「川柳とは何か」◇この中で路郎師は、句会での川柳の作り方について「多くの人達は、句会で一句でも多く入選させようという、薄っぺらな名誉欲から、甚しい人になると選者当て込みの句さえ作って……」と述べ、これを大きな誤りと指摘している。正直、自分の情けない限りだが、諸兄は如何でしょうか。

◇今でも句会へ出た時

（いさお）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(6月号)」

地名

市都
道府
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「リクエスト」(4月15日締切)

6月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B

A

B

A

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

6月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「リクエスト」 (2句) 牧野芳光共選
古久保和子選
インスピレーション「ナヒ」 (2句) 大西泰世選
北村賢子選
松尾和香選
一路集 (3句) 「続」 「く」 「あべこべ」 遠山唯教選
初歩教室 「スマート」 (3句) 山口光久担当

7月号

檸檬抄「決心」
一路集「懐かしい」「身軽」
「ぶりぶり」
初歩教室「らくらく」

本社4月句会

とき 4月7日(火) 13時開場・14時00分締切
会場 締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ たかつガーデン 8階 たかつ東・中の間
天王寺区東高津町7-11 電06-6768-3911
おはなし「衰えぬ「力」ブーム」
兼題「船(舟)」
「鮮やか」
「びちびち」
「探る」
「灰色」
藤井則彦氏
森松まつお氏
矢倉五月選
古久保和子選
米田恭昌選
小山紀乃選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社5月句会

7日(木) 午後1時から

兼題「染める」「金持ち」「ショック」
「織る」「動物」

第33年度 夜市川柳募集

第11回「横」田中新一選
ハガキに3句 4月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価 八百円(送料86円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一五年平成二十七年四月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四一八九四七九番

第8回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社 主幹

小島蘭幸 選

ご応募ありがとうございます。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

おむすびに家風があつてゴマを振る
サブリなど要らぬ毎日ごま食べて
麦飯に良く合うごまを振り掛ける
胡麻をかけ呪文唱える割烹着
シンブルに黒ごまだけのにぎりめし
大好きと孫に言わせたごま団子
健康な暮らしへ胡麻のサポーター
ごまの力借りて喜寿への道歩む
春菊の苦味とごまのハーモニー
大好きなごま和えですよ亡父さん
帰省して母のごま和え噛み締める
ごま和えに元気をもらう傘寿坂
朝昼晩おひとり様で食べるごま
究極の和食仕上げるごまが好き
戦中戦後胡麻で育ってきたわたし
つきごまがおせちの味をプロにする
手料理のランクを上げる凄いがごま
ゴマを播る母がしていたように播る
黒ごまでなければならぬお赤飯
ごまパワー美魔女に生まれ変わります
【準 特 選】
仕上げにはつきごま振ってシェフ気分
うまかった亡母のごま和え作れない
【特 選】
ゴマ育ち孫は丈夫で美人です

和歌山 木本 朱夏	河内長野 山岡富美子	寝屋川 籠島 恵子	弘前 稲見 則彦	芦屋 黒田 能子	紀の川 辻内 次根	倉吉 中村 毅
大阪 石橋 直子	鳥取 齊尾くにこ	神戸 山崎 武彦	札幌 小沢 淳	寝屋川 岡本 勲	高槻 松岡 重子	大阪 岩崎 公誠
三田 大川 桃花	大阪 上垣キヨミ	大阪 宇都満知子	大阪 谷口 義	藤井寺 太田扶美代	大阪 栃尾 奏子	広島 岸本 清
三次 伊藤 寿子	大阪 古今堂蕉子					

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

ごま

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマで
はなく、杵と臼を使った杵
つき製法で出来た「すりご
ま」です。

今までと変わらぬ、風
味豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050